

斗 正-60

博文館編輯局校訂

佛教  
各宗

高僧實傳

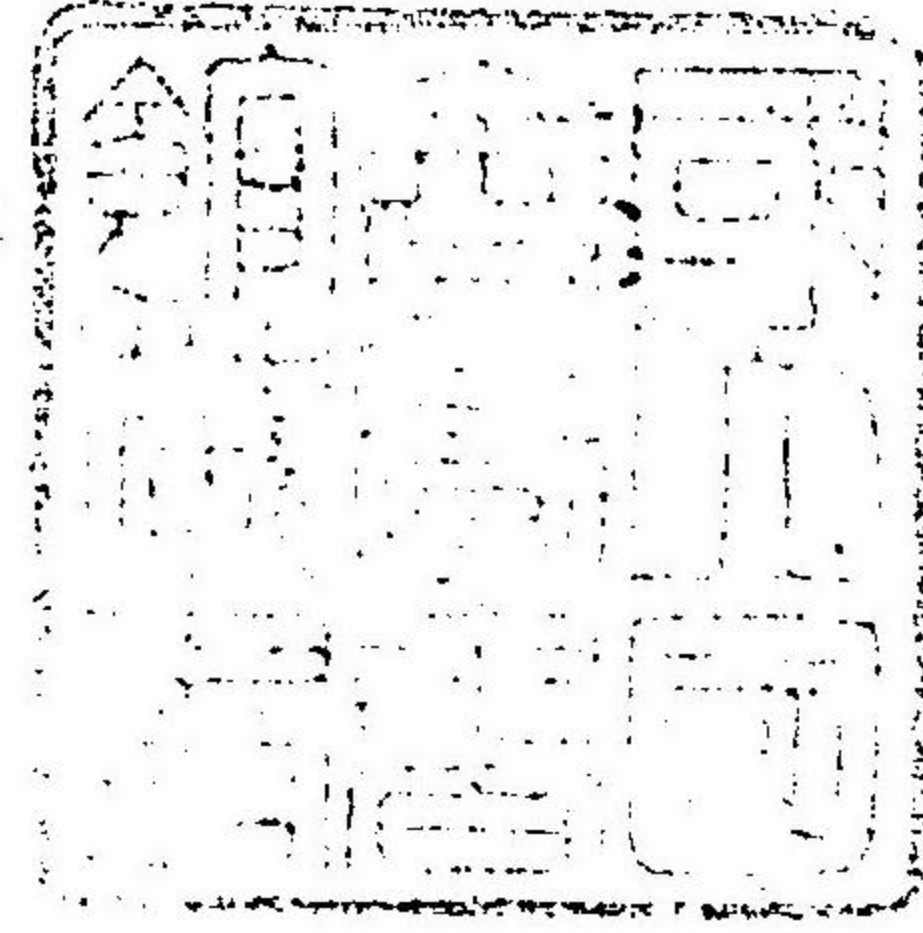
全

東京 博文館藏版



180.28 H135 & (10)

180.28  
H135 &  
(10)



大恩教主  
釋迦牟尼如來法像

新漢籍



28.1.1









耕溪齋寫







耕溪縮寫



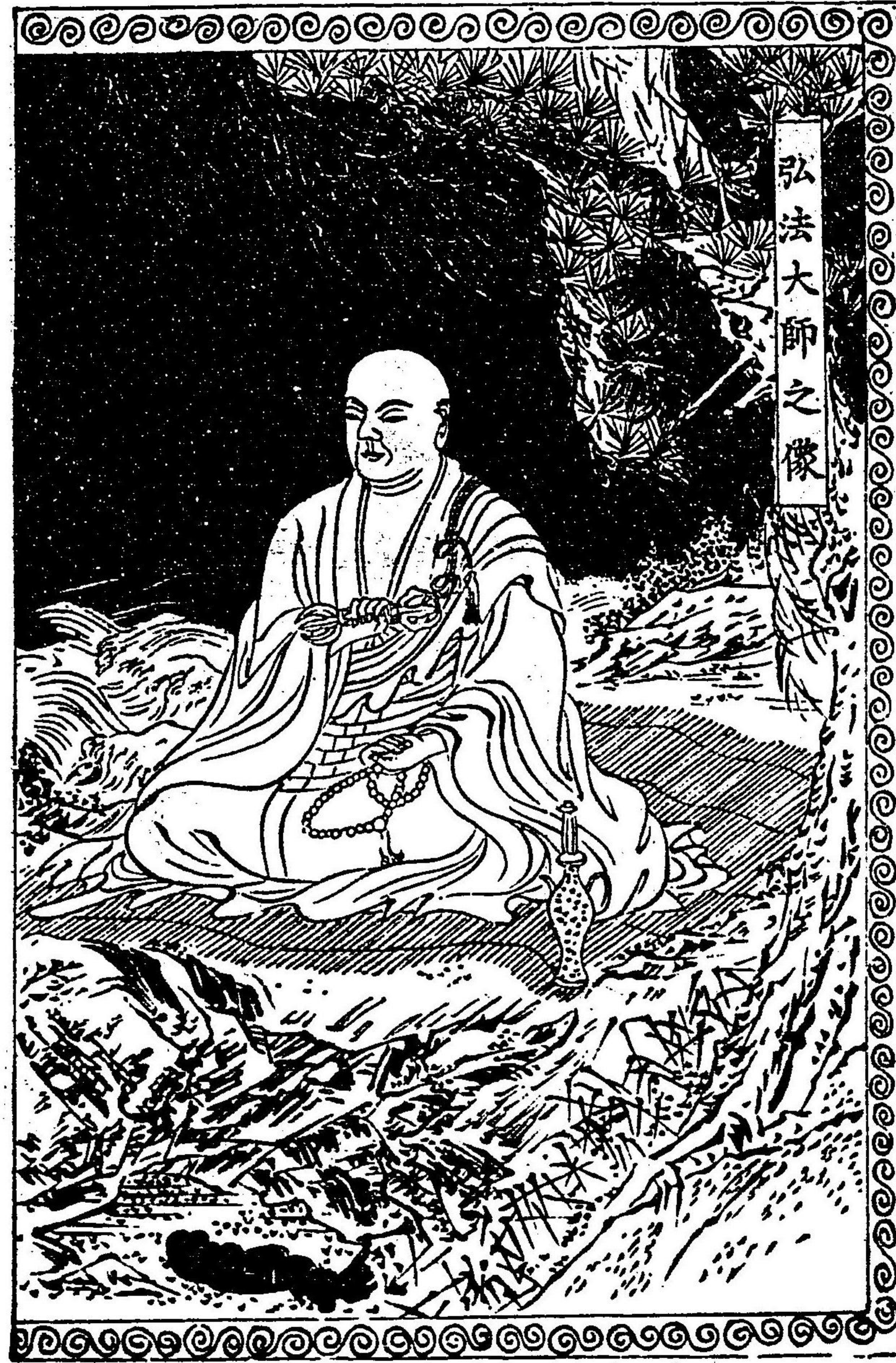








新野

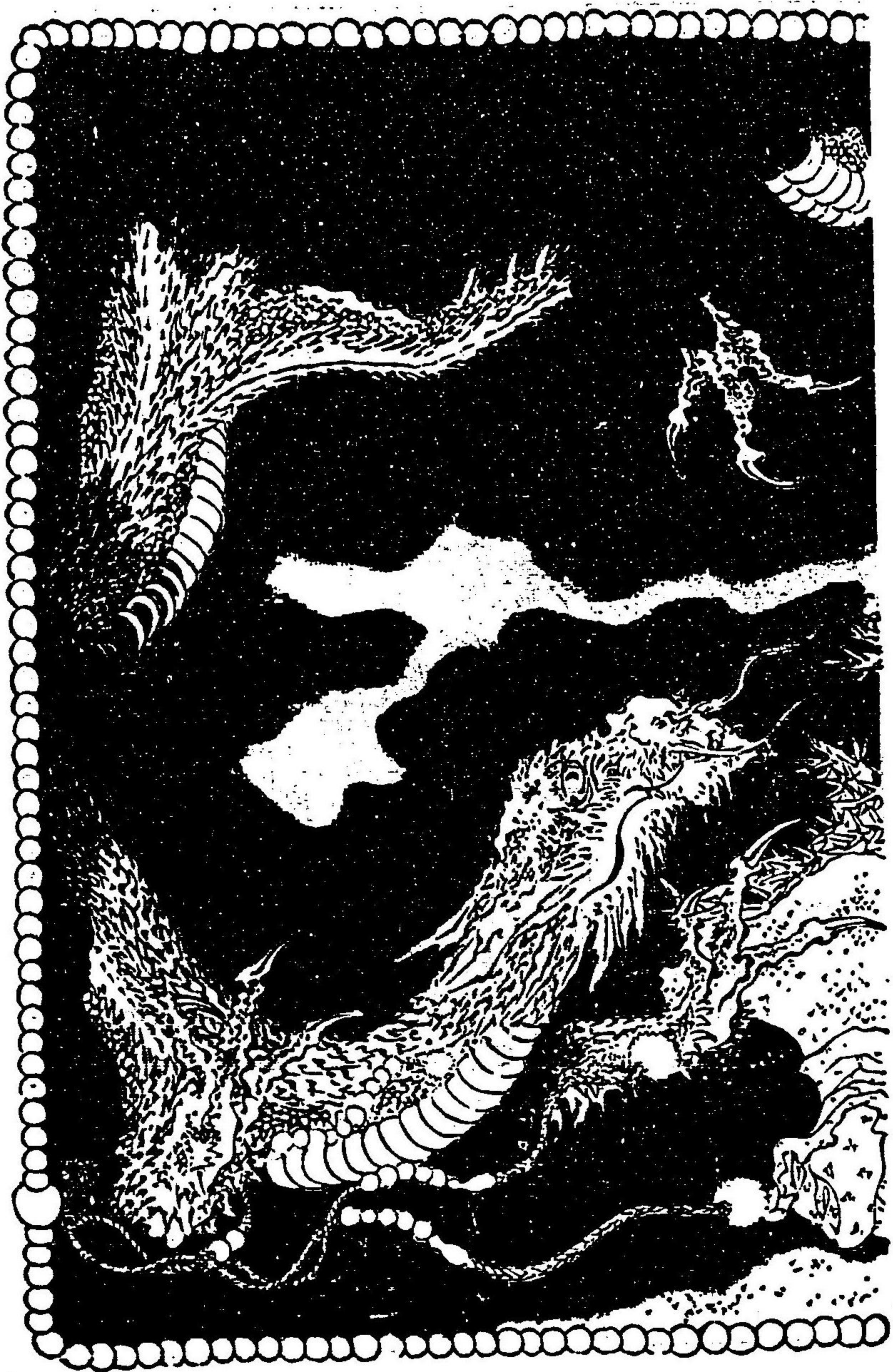


弘法大師之像













海峽





佛教各宗高僧實傳總目錄

三國七高僧傳圖會

龍樹菩薩傳……………一

天親菩薩傳……………一七

曇鸞大師傳……………三三

道綽禪師傳……………四四

善導大師傳……………五二

源信僧都傳……………七二

源空上人傳……………九八

聖德太子傳……………二一五





傳教大師傳

傳教大師傳……………二六一

弘法大師行狀記

弘法大師傳……………二九一

永平道元禪師行狀圖會

道元禪師傳……………三八一

日蓮聖人一代圖會

日蓮聖人傳……………四〇三

親鸞聖人御一代記圖繪

親鸞聖人傳……………六五三

兩大師傳記

元三大師傳……………八八一

慈眼大師傳……………九一七

祐天上人一代記

祐天上人傳……………九三七



三國七高僧傳圖會天竺之卷

杓杞菴一禪居士編輯

龍樹菩薩傳

大明没西山一月光繼之。大聖釋尊化緣の薪盡たまひて。拔提河の波と消え沙羅樹の煙と立のぼり給ふといへども世々に高僧跡を繼て出現在し。衆生を濟度し給ふこと。偏に彌陀釋迦二尊の  
 大悲。高僧相承の鴻恩なり。抑龍樹菩薩は南天竺橋薩羅國梵志の種大豪貴の家に誕生したまふ  
 梵志とは日本に於て源平藤橘の四姓の如く天竺にての姓氏にして一刹帝(王氏)二婆羅門(梵  
 士)三毘舍(平人工商)四須陀(農民)都合四種あり。就中梵士は婆羅門の種なり。尤此菩薩の  
 懸記本迹は經論に數出たり。凡楞伽經魏譯九(十二)。唐譯六(十八)。摩訶摩耶經下(十三)。  
 付法藏經五(十五)。西域記八(八)。同十(十二)。法苑珠林六十六(二の左)。十二門論宗致義  
 記上(廿三)等其中に於て。付法藏經。楞伽經魏譯同ふして且詳なり。域記と記義と滅相を記  
 し。稍同からず。又景德傳燈錄一(廿三)。傳法正宗記一(七)。五燈會元一(卅二)等は禪家の  
 別傳にして大に諸傳に異り。佛祖統紀五(十八)合糅して一傳とす甚爾らずとす  
 ○金剛頂經義決上(初左)密部傳承縁を載せ○金剛正智經には妙雲相佛と説き○大莊嚴三昧經



には徧覆初生如來と説けり。慧果阿闍梨（弘法大師の師匠なり）は妙雲如來是觀自在王如來の異名なりと説く。釋論聖法記に出づ。

今こゝに説ところは姚秦三藏鳩摩羅什翻譯の楞伽經の意によるなり。偕またこの菩薩の出現の異説あり。摩訶摩耶經と涅槃經と。佛祖統記によれば如來の滅後七百年の後とあり又中論の説には五百三十年或は九百年とあれ共。法苑珠林六十六卷に立并三藏の傳によれば佛滅後三百年に出世まし。七百年の長生を保たまふとあり。然れば御一生の化導七百年ならん歟。尙異説まち／＼なれども畧す。然るに此菩薩は諸宗の高祖にして。天台眞言禪宗華嚴三論。法相。淨土眞宗等に至るまで皆以て祖師に立ざるはなし其來由は釋迦如來楞伽山にましくして。未來記を大慧菩薩に説給ふ。經に云未來當有入大慧汝諦聽有人持我法於南大國中有大德比丘一名龍樹菩薩能破有無見爲人說我乘大乘無上法證得歡喜地往生安樂國（魏譯楞伽經第九總品一唐譯第六偈頌品一同之）さる程に如來滅度の後。はるか星霜を経て出世し給ひ龍樹菩薩と名けたまふ。能外道の法を摧き有無の邪見を破り大乘無上の法を明し給ふ。其中に十住毘婆娑論を作て。難行易行の二道を明し。彌陀本願の法は唯他力にして易行道なることを教へ。又自ら彌陀十二禮の偈を作りて回施衆生彼國として。淨土往生を懇に人にも勧め自も願ひ給ふとなり。さて此經文の中に無上法といふは宗風によ

りて無上法の一句を取て諍ふとあり。夫龍樹菩薩は八宗の血脉相承の師なり故法相宗には空觀非無と談するを無上法とす。三論宗には假名。因緣。顯道。無方。の四種を立て。勝義皆空と談するを。無上法とす。華嚴宗には小乘教。大乘始教。大乘終教。頓教。圓教の五教を立てるといへども己界。佛界。衆生界。是三無差別と談するを無上法とす。法華宗には四教五味を立てるといへども。一心三觀一境三諦と解を無上法とす。眞言宗には顯密二教を立て顯教を遮情門とし密教を表徳の法とし。父母所生身即證大覺位と談するを無上法とす。禪宗には教外別傳不立文字を談じ。物と抱はらざるを無上法とせり。斯の如く我修する所の法を無上法と諍へり九表記に云今の經文に往生安樂國とあれば無上法の詞正念佛なり故に欣求淨土の念佛宗には修する所の念佛往生を無上法とす。是誠に經文に宜し後學の人之を判じ給へ。今私に云。華嚴天台眞言禪宗等には勝の義ありと雖も易の義なし此故に無上法にあらず又念佛宗には勝易の二義あり故に念佛の法は無上が中の無上の法なり誰か之を諍んやと云々楞伽山といふは楞伽といへる城のある山にして。夜叉の住居なる地なりといへり。文類聚鈔蹄浴記云く楞伽は城の名。山を摩羅那山と名く僧伽羅國の東南にあり。心玄義に云く梵に楞伽といふ。此には難入といふ。亦是嶮絶といふ。復可畏といふ。亦莊嚴といふ。此の摩羅那山は南海の中に孤峙つ山岳にして其の止削し如くなる故に嶮絶と名く。山の頂きに城あつて



四圍に戸扉なく唯神通ある者空を飛行して下り入り。方に其中に預する故に。名づけて此城を難入といふ。羅刹中に居すゆへに復可畏と名く衆の寶をかざるがゆへに復莊嚴といふと云々。釋迦如來此山に於て說法し給ふ其とき大惠菩薩といへる知識ありて。上首たり難じて一百の問を立給へるに釋尊一々にその答を審にしたまふ是を悉く説宣たるを楞伽經といへり。其中に未來記を説たまふ文に南天竺國の中に大徳の比丘あらん龍樹菩薩と名くべし能く有無の見を破し人の爲に我乗の大乗無上を説き。歡喜地に住し安樂國に往生せしめんと説給へり有無の見とは人は人に生れ虫は虫に生死相續して常住なりと思ふ。是有の見なり。又人も犬も死すれば火の消たるがごとく灰となり土となりて迷も證も無ことなりと思ふは無の見なり此有無の二見より六十二の邪見を生ずる也是皆九十五種の世を穢すとある外道の教なり夫を能破り盡して大乘の無上法を説て弘むとなり。我乗とは佛自内證の大乘法なり我物我教といふに同じ四教義に云乗とは運載荷負の義也。牛馬にも乘船筏にも乗て我思ふ處に至へき料なり運載とは乗物に乗じて道を運びて行義なり。聲聞は四諦を乗物とし支佛は十二因縁を乗物とす。此二人は四諦十二因縁の船に乗て分段生死の愛河を渡りて但空法性の彼岸に至るべき也。菩薩は六度を乗物として生死の愛海を渡。佛果菩提の彼岸に至るべき也。但天台によらば菩薩は四教の不同あり。藏通の菩薩は二乗とおなじく分段生死の河を渡る也。別圖の菩

薩は分段變易の二種生死の愛河を渡るべき也。四教ともに菩薩は佛果を以て彼岸に踰べき也云々。是故に乘の字を與かるなりと云々。又大乗小乗といふは人に約し法に約する二の意あり。人に約する時は二乗を小乗と名づく自行限る故に。其智力狭ければ小乗といふ之菩薩をば大乘と名づく。自行化他兼濟して觀智廣大なるが故なりと云々。されば大乘は佛の内證智とて聲聞にても菩薩たりとも。佛より外には知ものなき智惠の事を内證智といへり大經に所謂佛智不思議。不可稱智等の五智の事なり。無上は一乘勝たる上もなき法といふと云。龍樹菩薩南天竺に出現して。有無の邪見を破り大乘の上もなき法を説教て歡喜地に住せしめ。安樂國に往生なさしむるぞと。釋尊未來を察して説給ふ也。歡喜とは身によるこぶを歡といひ心によるこぶを喜といふ。獲べきものを得んと思ひてよろこぶを歡喜と云と有り。偕此龍樹菩薩發心出家の由縁を尋るに。天竺月支國といふは西域の中の南國之其國五分にわかてり。東天竺西天竺南天竺北天竺中天竺あわせて五天竺と號す。その南天竺橋薩羅國なる梵志の種。大豪貴の家に生れ給ひて名を龍樹と稱す其母樹下に於て平産なすゆる。阿周陀那と字す阿周陀那は樹の名なり。龍その道を成するの故に龍をもつて字に配し號して龍樹と曰ふ云々。或は龍宮に入はじめて成道を得るによつて龍樹と號すと統紀に見えたり。又龍勝と號す共云り。天聰奇悟事不再告と有て。天聰て萬事を奇く悟り聰明叡智にして何事によらず一回聞其義理



を明らめ、聊も忘たまふといふことなし。いまだ乳をのみ食を餵るの中より。諸梵志の四章陀典(外道の書籍)を誦を聞たまひて。三十二字づゝある偈文四萬頌を悉諷じおぼえ。其義理を心に領し明らめたまふ。尋常の人なりせば。十歳已上のもつたりとも。暗におぼゆることかた。假令そらに誦ものありとも。畢竟鸚鵡の心經を讀に齊しく。争その甚深の句味をあきらめ識ことあらんや。今龍樹は幼稚にして十二萬八千の文字を宙に會得し。しかのみならず。其ふかき義理をあきらめ給ふと。誠に安養久住の菩薩。大慈大悲の方便なることおもひてしるべし。二十歳の頃にいたりては五天竺を巡歴て天文地理易學および諸の道術等殘所なく學得て。天竺廣しといへども。誰もつて是に續く者なく其名四方に轟り。しかれども天竺は。所謂大國なるが故に此彼に龍樹に彷彿の朋友三個あり。是亦頗豪傑なり。一時この契友會合し。相談ふて曰。既に天下の義理におひて神明をひらき。幽旨を悟るべき者。のこらす吾等これを盡せり。此上は何をもつてか自娛とせん。身に歡樂を究るの外あるべからず。夫は人情を慾にして色慾を究こそ一生の樂ならめ。さりながら吾諸梵志同士の徒にして一國の王公にあらざれば思のまゝに榮華を究淫樂なすこと難し所詮身を隱すの術を學びて王宮にしのみ。自由に入出して姪樂をさむむべしと。四個もろとも談ひつゝ。相連立て其術家に至りける。此隱身の術と云は俗に忍術といへる類にして。游偵。諜者。細作。邏候。接伺間諜。以上左傳の注に見えて皆忍

者のことす

五難祖云。漢時。解奴辜形貂みな隱淪出入するに門戸に由らず此後世遁形の祖なり。介象左慈。于吉。孟欽。羅公。遠。張果之流および。晋書の女巫章丹。陳琳等が術。皆是に本づく謂て神仙とす。其實は非なり其法五あり。曰く金遁。曰く木遁。曰く水遁。曰く火遁。曰く土遁其物をみて則隱べし惟土遁最捷なり蓋し處として土なきと無故之須く遁神を煉ると四十九日。空山人無の中に於て獨坐結念すべし更に符咒あり百神を役ひ若一念の忘記れば便重て煉べし。即大明に令謙と云者あり(字は啓敬)人を導きて大倉庫に入。事發われて逮われ飲を求め即跳て瓶の中に入。撲破て片々皆應。而て竟に所在を知らず此水遁の者。正徳年中老翁太監を流賊に脱しものあり。又聖醫を鐘し土を一塊握り遂に見えず此土遁の者也云々龍樹をはしめ三個の朋友。しのびやかに同伴し。其術の師たる家に至り禮を正ふして其術を學ばんことを乞。時に彼術師たる人つくゝと慮るに。此四個はこれ今天下におひて雙なき輩にして。名を世に擯にし。世の人を塵芥の如くにす。争我等が家に腰を屈て來るべき者にあらず此諸梵志才明世に絶すといへども。未我術を知らず故に斯は屈辱するものなり我もし今速に法を授けば。必我を棄て復來ると有べからず先且その藥ばかりは與へて法を傳ること待へし。然れば藥盡るときは。かならずまた來るべし。斯るとき長く吾を師とし尊敬すべし善哉々々と心を



決し。青色の丸薬を取だし各一粒づゝあたへ教て云く。足下等此丸薬をもつて。人なく極め  
 て静なる處に引こもり水をもつてこれを磨つぶし。各眼にぬりたまふべし。然るときはいか  
 ばかりの人中に出るとも。姿のみえることなしと慙に教るれば四個大に悦びつゝ。厚くも禮を  
 謝し。薬をもちかへり王城にしび入ん事を議しける。茲に龍樹は其丸薬を器に入。水をもつ  
 て磨つぶし給ふとき。其香氣を嗅ぎてしばらく考へ遂に此薬其數七十種にして何々をもつて調  
 合する處なり。尤其分量の多少に至るまで悉く鑒察し給ふ。是によつて再彼術師の許にいたり  
 て。此由を語給ふに術師大に驚嘆し。問て云く足下何に由てか此薬の方を。詳にしり給ふや。答  
 曰。薬自ら夫々の香氣あり。何をもつてか知さらん哉と。師しばく嘆伏し僅に一二種の薬  
 たりとも。其味ひ分量まで飲分る者有べからず。斯の如き人は之を聞も猶かたし。而るに況や  
 相遇をや。吾賤き術なんぞ惜むに足んや。たとへ隠すとも何の詮なき事なりとて。其薬の製法  
 万端具にこれを授けしと也。龍樹はすでに隱身の術を傳り得て。三個の朋友にも委く授け諸共に  
 王城にいたり。女官の室にしび入るに。原本その姿見えざれば。許多の禁門におひても咎む  
 るものなく。心にまかせて后官女の房々に到り。宮中の美人を悉く犯し。色欲を慾にし  
 給ふ然るに百餘ヶ日の後。女官の下陳におひて懐妊の人夥しく如何なる譯といふことをしらす  
 女官の面々只管に愧おそるゝといへども。匿によしなく種々評議の上。終に止事を得ず其旨帝

王へ奏し奉るに。帝大に驚かせたまひ。此何の不祥にして斯怪事を爲哉と。敵智の臣下を  
 して何者の所爲なるぞと穿議あるに。一個の老臣進み出。謹で奏すやう。凡斯のとき奇怪に  
 二種あり。一に鬼魅魍魎。狐狸の類ひの所爲あり。亦一方術と云し。身を隠すの術を以て。  
 忍ひ入事あり。是を調るに諸門の内にかまかなる砂を布き嚴しく監人を以て護らしめ給はし。  
 鬼魅の類ひに候はし。その足趾有べからず。隱身狐狸の業ならば必しも足趾現るべし。もし鬼  
 魅等の所爲に候はし術をもつて是を滅すべし。もし人間の所爲なりせば。兵士をもつて是を退  
 治すべし。敵慮惱ませたまふことなかれとぞ奏しける。帝を初め數多の群臣實にもつともと  
 同じつ。鬼魅降伏の術者を招き。又力士數百人を備へしめ諸門の内にお白砂をしき法を構へ  
 懸たりしが。案にたがはず四個の足跡庭上にあはれたり。驚破曲者ごさんなりと號をも  
 つて四方の諸門を堅めしめ。勇臣許多宮中に走入。劔を揮ふて的を定めず上下左右縦横無盡に。  
 殿中の隈々隅々。空を伐て廻りし程に。何かは以てたまるべき。さしも隱身の術を得たる徒も。  
 透間あらせず伐立られ。即時に三個切殺され忽ち形容をあらはしけり。龍樹も其時危かりしを。  
 素より智恵勝れたまひし故帝王の側に寄そひ。身を縮め氣を屏して坐しける。帝のほとり七尺  
 四方は劔を揮ふこと能はず。是に依て劔難を脱れ辛き命を助り給ふ。このとき初て熱風惟し  
 給ふやう。誠に淫欲は是苦の本たり好色は是禍の根なり。徳を敗り身を危すること。みな此



より起る。有べきことをあらずと悟り給ひ。一心に誓を立て曰く我もし今日の厄難を免ることを得は。出家となりて佛法を修すべし。と決定し給ひしと。是を經には。即 自 誓 曰 我若得 脫 當 詣 沙 門 受 出家 法 と説給へり。遂に龍樹は此難をまぬがれ。宮中を去のび出て山に入一箇の佛塔に詣て出家受戒し。九十日の間に三藏(經律論)を誦つくし給ひ。大小乘の深義を究め。尙其余に更に異なる經もやめらんと。十方を索ね給へども。すべて得たまふところなし。是によつて遂に雪山に登りたまたま山中に塔あり。塔の中に一個の老比丘あり。調つて法を尋ねたまふに摩訶衍經典(大乘の經卷)をもつて是を與ふ。龍樹さづかりて既に論し。其實義を知といふとも。いまた通利を得給はず。故に諸國を周遊て只管餘經を求め。且閻浮提(娑婆世界)中をあまねく求め給へども。曾て學びたまたまへき經なし。さる程に外道も論師も沙門も義宗も威く擯伏し給ふ。時に外道の弟子曰く師は一切の知人たり。今既に佛弟子と爲給へり。志かるに其道の足るるを承給ひて。足さると思ひ給はざるや只一事足ざるも一切の智に非ざる也。龍樹聞て答ふるに辭なく。幾情屈したまふ此に至て忽邪慢の心を起しつらく念やう世界中の法。其數太多し。原來佛經妙也といへども利をもつて之を推ときは。故いまだ盡さる所あり。そのいまだ盡さる所を我これを推て演でもつて。後學の者を悟すべし。理に於てたがはざれども事に於て失なし。されは何の咎めらんと心を決し給ひ。即ち之を行はんと欲したまふ

斯て龍樹は新に法を立給ふに先師たる者を見立てこれを置。戒を教へ衣服を更め造り佛法に准ひて聊 異ることを有しめ。衆人に受學せしめんと欲す。斯ありし程に日を擇時を選み。諸弟子に新に戒を授け。新なる衣を着せしめ爾して龍樹獨 靜なる處の清淨の中に在せり。其時菩薩位に任ぜられし大龍神出現し。此形勢を見て數惜みこれを愍み。即時に龍樹を備ふて海中に入龍宮城にいたり。宮殿中におひて。七寶の扇をひらき。七寶の函を取いだしもろくの方等深 奧經典無量の妙法をもつてこれを授く龍樹これを受て讀誦すること九十日。其經卷の數すこぶる多し。尤經説の心の深きを入れて。實利を會得し給ふといへども。佛法の有がたきを未眞實に領解したまはず。其時龍神これを察し而て問ていはく。足下看る所の經遍きやいなや。龍樹答て云く。諸函中の經卷 甚多く。無量にして盡すべからず今讀とてその經すでに閻浮提に十倍せり。龍神の曰今是に見給ふ經のことときは此宮中の諸處に藏せり。是其員を數ふべからず。則これを見せ進せんとして無量の經藏をひらきて見せしむ龍樹見たまふに。是まで見給ふ所の經に百千万倍せり龍樹志ばく感嘆し。實に佛經の廣大言語に絶せり。其時已に諸宗の相を得て深く無生を入り。二忍具足すと云々かくては龍神は龍樹が佛道を得給ふにより願て龍宮城を伴ひ出て。閻浮提に送りかへしける

五雜俎に云。蘇州の東の方。海に入ること五六日程に小島あり。闊る百里餘四面海水皆濁る觀



此水清く。風無して浪高きと數丈。常に水上を見るに紅に光る事日のごとし船人取て近付かず。云くこれ龍王宮也と云々。法華經提婆品に。文殊菩薩海中に往て龍王の女を教化の事。あよび佛說龍王經等あり

時に南天竺の王諸國を順覽し給ふに。邪道を信用の沙門釋子一個も見ゆる事を得ず。國人遠近皆其王道に化す。龍樹つくつく思ひ給ふやう樹はその本を伐されは傾かず。人主化せされば則道行れずと。然るに其國の政法。王家錢をいだして人を雇ひ行列の人夫とす龍樹伴ひに此便をもつて。その募に應じて人夫の將となり。戟を携へて前驅に列せり。其行列の倍を整へ部曲の次第を正して進退遲速を指揮すること嚴しからずして令行はれ法彰われずして。衆卒隨ふ事奇なり。國王之を見て歡喜び給ひ問て宜く。是はいかなる者ぞ從臣とたへて言すやう。此者催促に應じ勤る處なり尤扶持を食せず又錢をとらず。而して事に在ては恭く謹んで勤ること斯のごとし。其趣意何を求め何を欲するを知らずと。王近くめして宜く。汝は何人なるや。龍樹つゝと。我はは一切智人也と答ふ王甚驚き給ひ而して問て宜一切智人は曠代一たび有て今有事を聞かず。汝自智人なりと稱する事何をもつてか之を驗とせん。答ていはく智を志らんと欲給はし。何にまれ問せたまふべし具に說奉るべしと。王即自ら念らく。我は智主大論の議主たり。問て彼を屈伏せんこと安しといへとも猶譽とすべからず。問はずんば彼誇らんか。いかん。

はせんと良久疑惑に猶豫し給ひしが己を得ずして問給ふやう。天今何をか爲哉。龍樹の言へ天今阿修羅と戦ふと。王老ばらく辭なし。其言を非とせん欲するに。復以て是を證とする事なし。又其事を是とせんと欲するに事の明むべきものなし。故に王いまだ言を出し給はざる間龍樹復言此虚論をもつて勝を求るの談にあらず。帝須臾これを待せ給へ。稍てその驗あるへしと言訖る時忽空中に干戈兵器あつて相係て地に落たり王の宜く干戈矛戟これ戰器なりといへども。汝何の故に是天と阿修羅と戦ふ事を知るや。龍樹いはく是を虚言としたまはし。實事をもつてせんに如ずと。斯る折から阿修羅の手足指あよび耳鼻等空に從て下る。又王あよび臣民婆羅門衆をして空中に天と阿修羅の兩陣相對するを見す。王乃ち誓首して。龍樹を敬ひ其法化に伏す。殿上に萬の婆羅門ありしが。各束髪を切棄て成就戒をうけて弟子となれりこの時龍樹南天竺に於て大ひに佛法を弘め。外道の有無の邪見を催破し。廣く摩訶衍(大乘)を明かにす。是則ち大上無上の彌陀の大願にして自行化他を施し給ふなり斯て龍樹は優婆提舍十萬偈を作り。又莊嚴佛道論五千偈。大慈方便論五千偈中論五百偈を作り。摩訶衍の教をして大に天竺に行わしむ。又無畏論十萬偈を作る中論其中に出と云々

天台名目類聚抄に云。眞言宗は凡如來滅後六百餘歲に中天竺の龍樹菩薩南天竺に往て録塔をひらき。金剛薩埵菩薩に値て傳ふる處の法門なり。依經は大日如來。三世常住法界宮に



於て説處の三部の秘經也謂る大日經。金剛頂經。蘇悉地經也と云云又三論宗は如來滅後龍樹菩薩出生して諸法皆空の旨を宣ふ。又青辨菩薩出生して。おなじく此旨を宣ふこの宗の根元なり。よつて天竺には。馬鳴。龍樹。提婆。羅睺等弘宣せり。三部の論を以て。依憑するゆゑに三論宗と名づくるなり。一に中論四卷(龍樹作)二に百論二卷(提婆作)三に十二門論一卷(龍樹作)

諸も龍樹菩薩は十萬二十萬の偈を説て普く佛法を弘めたまふに。殊更國王歸依し給へば。國中の萬民風に草のなひくかごとく。佛法盛んに行われける。ときに一人の婆羅門(震旦の道士のごときものなり)あり能咒術を得て種々の奇瑞を驗わせり。かるがゆへに龍樹を大に妬み。其術を行ひあひて。勝劣を試て龍樹を一時に取ひしがんと思ひ天竺國王にぬかうやう。龍樹と術を争ひて。弘る所の法の勝劣をきわめたま旨を奏聞す。王の宣わく汝が如き大愚痴の身として。争か龍樹の所對となるべきや龍樹の智惠の明かなることは日月と光を争ふが如し。汝これを崇敬して必しも敵することなかれど。波羅門かへして言やう。恐なから大王御歸依あらせらるゝがゆへに其善惡をきらしめさず。王はこれ智人ならずや。何ぞ理をもつて之をあらはさずして勝劣の分ることあらんや。ひとへに術をくらへん事を數願ひたてまつるに王も今は制し兼給ひて。然らばこれを許へしとて即時に龍樹をめし給ひ。此由をのたまひつゝ日を撰て龍樹と共に

政徳殿に出御ありて。待受給ふに波羅門は。後より來り此躰を見より便ち殿前におひて口に咒文を唱ふれば忽ち大なる池を現し。清淨の水涌上その中に千葉の蓮華を生ず。波羅門すかさず。其蓮華のうへにうちのりて大音をあげて言く龍樹今世に誇るといへとも汝は地上に在て畜生に異ならず我は斯清淨の蓮華の上に座したり。されは大德智人ならずや。論義をなさんと抗言す其時龍樹は些も騷給はず暫く咒術を行ひたまへば。たちまち六牙の白象(牙の六ある白き大なる象也)現れ出たり稍て大象はしづくと池の中に入れて。婆羅門の乗たる廣大の蓮華の軸を鼻をもつてくるくと纏て引抜つ、虚空に投げ大地にどふと落しければ。婆羅門は腰骨を打くだかれ大に悶苦み頭をかへて誤りはて。龍樹に飯命していはくわれ身の量を知らずして。大師を辱しめんと欲せしこそ愚なれ。ねがはくは我を哀み其愚蒙を啓かせ給へと先非を悔て嘆ければ龍樹はこれを哀み給ひ弟子に加へ給へり

斯有し程に。國中の外道の徒ことごとく龍樹を信じ。上は國王より下万民にいたるまで龍樹を仰き。尊まざるものなく遂に大乘無上法を弘め。衆生を濟度あらせられける。偕星霜多く移り變りて。小乗を信する一個の法師あり。常に龍樹の大乘を忿疾めり。龍樹將に此世を去らんとす。而て此法師に問て曰。汝われ久しく世に住するを樂ふや否や。答て曰實に願はざる所なりと。龍樹聞て頓て退き。閑室に入扉を立て在せり。然るに日を経るといへども出給はず弟子の



人々奇異に思ひ戸を破つて内に入これを看れば更に在まらず。其行方をしらす故に南天竺の諸國其爲に廟堂を建て敬奉すること佛のごとし云々龍樹菩薩龍樹大士と稱す。天台教觀時名目私鈔の解曰。大士とは大は小に非る也。士は事也。運心廣大にして能佛事を建る故に大士といふ。亦上士といふ瑜伽論に云。自利利他の行なきものを下至と名く。自利ありて利他なきを中士と名づく。自他の行を具するを上士と名くと云。

同書云天竺に論師の興起は。凡如來滅後一百年の後摩訶提婆（此云太夫）鷄園に出世し諍論を興す。阿育大王大天を敬ひて有教を信ず。五百の諸漢これを見て悲て目を撃て言す恒河を泝て去ぬ。育王大に悔み。血を吐事一斗しかれとも尙五竺の學侶煽に有教を習ふ。滅後三百年（或五百年或六百年或八百年）龍樹菩薩出世して空の義を述て有教の義を破すと云々楞伽經の中に。龍樹菩薩の未來記を説て。證得歡喜地往生安樂國といへり。歡喜地とは。初地の菩薩の名なり。新譯には極喜地といへり。是則初地見道の位に初て眞無漏の智を得て。二空平等悟を開き自他利他して。大歡喜を證する故に歡喜地といふ。瑜伽惟識等の論に見えたり。案のごとく。佛の未來記に違はず佛滅後に。龍樹菩薩出世し給ひて。外道有無の見を破し大乘無上の法を説き初地の悟を得て。極樂に往生したまふなり。付法藏傳に依るに。即龍樹は第十三の祖師なり。假に仙藥を餌し。現に長壽し三百餘年佛法

を任持す。そ 度する所の人稱て數ふべからずと云々

讚彌陀偈曰。本師龍樹摩訶薩。誕ニ形像始ニ理類。網關閉邪扇。開ニ正轍。是闍浮提。一切眼。伏承尊悟歡喜地。歸ニ阿彌陀。生ニ安樂。譬如龍動雲。必隨闍浮提。放百卉。舒南無慈悲龍樹尊。至心歸命頭面禮。

天親菩薩傳

天親菩薩は。北天竺富婁沙富羅國の人也。富婁沙は譯して丈夫とす。富羅は譯して土とす。故に譯して丈夫國とす。天親の父は此土の國師婆羅門なり。姓は嬌尸迦と云三個の子あり。三子ともに婆藪槃豆と名く。婆藪は譯して天とす槃豆譯して親とす。天竺の風にして兒の名を立る事。同一名をもつてし。復別名を以てし各これを分つなり。于時此菩薩の傳説甚多し其大概を言へば

付法藏經六(十)百論序疏(十)慈恩三藏傳三(初)西域記五(十一)唯識樞要上本(四)俱舍神泰疏一(初)俱舍頌疏法盈序記(初)等の中に於て。付法藏の婆修槃多今の婆藪槃豆と同異の論尙し如止觀證眞私記一本(十)諸文を引按するに百論序疏。付法藏等の文をひけり。實に疑ひを考るの一端たり傳燈錄二(十)正宗記一(九)五燈一(四十八)等禪家の別傳大に諸傳に異なり



師子覺を以て今師の弟とするは。元の念常の佛祖通載五(十七)を權輿とす蓋西域記を誤讀て此附會をいたせり承用すべからず三井圓珍の法華論四種聲明日記(右二)に唐の無慶和尚の弟子慧則の説を擧て曰。大日普賢を以て天親菩薩と名く。迹名釋迦尊と顯す又經を引と云々天親菩薩は釋迦如來滅後九百年に北天竺に丈夫國に生給ふ。又小乘論には如來滅後千年とあり御壽命は八十年の間の御化益なれば一千年の前後か或は一千百年の間なるべし。天親を梵語には婆藪槃豆といひ。又は婆修槃陀或は伐蘇畔度。あるひは和修槃豆とも云へり。扱天親と號ること。天竺國劫初の時毗搜紐天王(帝釋天の弟なり)此土に來下して開闢したまふ其徳を感じ天王の像を長二丈につくり。廟を立ていはひこめ婆藪槃豆と稱す諸人歩を運び此天に祈るに諸願成就せずといふことなし。然るに天親父母の子無を愁ひ。此婆藪槃豆に祈誓をかけ給ふにたちまち一子を設給ふ。されば婆藪槃豆よりさすかり給ふ兒なればとて即兒の名をば婆藪槃豆と號くと也是すなはち天親(漢語)にして天は毗搜紐天の天をかたどる也。親は親と訓する也諸人あゆみをはこび彼天王をいのれば。此天王は親の兒を親むがごとくに親み給ふ故に則彼像を天親と號するなり。然るに此天親の像に祈願して得たる兒なるがゆへに天親と號る也新譯の論には世親といへり。是は世の人の親近する意に依て世親といふとぞ

或云梵語の婆藪は世なり。槃豆は親なり。天は梵語に提婆といふへさかといふ

さる程に天親の兄弟三個なるが。共に婆藪槃豆と名く。しかるに第三子の婆藪槃豆に。薩婆多部に於て出家し。阿羅漢の果を得る別に比隣持跋婆と名く。此比隣持とは是其母の名なり。跋婆に譯して子とす。人畜通じて梵語に子のを跋婆といふ。長子の婆藪槃豆は菩薩根性の人なる故に。亦薩婆多部に於て出家せり後に定を修して離欲を得。空義を思惟すれども入ことを得ること能はず。自ら身を殺さんと欲す賓頭廬阿羅漢。東毘提訶にありて此事を觀見して遙に彼地より來て長子の婆藪槃豆の爲に小乗の空觀を説く。教のごとくこれを觀じて。即便入ことを得給ふ。偕小乗の空觀を得るといへども。意猶いまだ安がすこれに其理た爾るべからず。此に因て神通に乗じて兜卒天に昇りて。彌勒菩薩に諮問す。彌勒菩薩渠が爲に。大乘の空觀を説給ふ夫より長子の婆藪槃豆は。閻浮提に還りて。彌勒の説たまひし如く思惟して。即便悟ることを得給ふ。其觀念の時に於て大地六種に震動す。既に大乘空觀を得たり。此に因て名を阿僧伽と改給ふ。阿僧伽は譯して無著といふ。深く小乗を厭捨たるの義なりとぞ。其後しばしば兜卒天に昇りて彌勒に大乘經の義を諮問す。彌勒その爲に廣く解脱したまふ。阿僧伽は得る所あるに隨ひて閻浮提に還りて自らの聞處をとつて。餘人の爲に説給へども。聞者多く信を生ずるものなし。阿僧伽すなはち自ら發願し給ふやうは。我今衆生をして大乘を信解せしめんと欲すれども未だ成せず。此上は所詮彌勒尊じきく閻浮提に下り給ひ。解脱し給はんには如すとて。



又兜卒天に昇りてこのことを告たまふに。彌勒すなはち其願ひの趣きを承引たまひ。夜の時にいたりて閻浮提に下り給ひ。大光明を放ち廣く有縁の衆をあつめ諸法堂におひて。十七地論(瑜伽論)一百卷を誦出し給ふに其誦給ふ論に隨ひ其義を解す。百二十日の夜を経て十七地論を解すること方に竟る。同一堂に於て法を聽聞すといへども。唯阿僧伽一個のみ彌勒菩薩に近づくことを得たり。余人はたゞ遙に聞ことを得るなり。夜は共に彌勒の説法をきく。晝は阿僧伽更に餘人の爲めに彌勒の説ところを解釋す。此に因て衆人皆大乘を信す。彌勒菩薩阿僧伽に教へ日光三摩提を修せしむ。説ごとく修學して即此定を得たまふ此定を得てより後。昔いまた解せざる所悉く能通達す。見聞ところ永く憶て忘す。佛いにしへ説ところの華嚴等の諸の大乘經悉く未だ義の解せざるを。彌勒兜卒陀天に於て阿僧伽の爲に其義を委しく解釋したまふ。阿僧伽一々に通達し給ふ後。大乘經優婆塞を造り佛の説給ふ所の一切大乘經を解釋したまへり。しかれば上にしめすが如く第三子の婆藪槃豆は。別名を比鄰持跋婆といひ。第一の婆藪槃豆は阿僧伽といふ。第二子の婆藪槃豆といふに是天親菩薩にして亦薩婆多部に於て出家したまふ。博學多聞にして遍く墳籍に通ず神才俊朗にして儂を爲べきものなし。尤戒行清高にして以て相匹がたし。茲に佛滅度の後五百年のうち阿羅漢あり。迦旃延子と名づく。母の姓を迦旃延といふ其母の姓に従つて名とす。先に薩婆多部に於て出家す。本是れ天竺の人なるが。後に罽賓國

(天竺の西北にあり)往て五百の阿羅漢および五百の菩薩と共に。薩婆多部の阿毗達摩といへる小乗の論を撰集す。是を八伽蘭陀といふ。譯して八體度といふ五万偈あり。伽蘭陀は譯して結とす。亦節と曰謂義類各相結屬す。故に結といふ。又義を攝して散せざらしむ。故に結といふ。義類のく分限あり。故に節といふ。亦此文を稱して發慧論といふ。神通力および願力をもつて廣く遠近に宣告するやう。若先に佛の阿毗達摩を説を聞かば得る處の多少にしたがひて送來るべしと觸しらせり是によつて或は人或は天諸龍夜叉乃至阿迦尼師。吒の諸天先に佛の阿毗達摩を説を聞けり。或は廣く或は略乃至一句一偈を悉送與ふ。迦旃延子諸の阿羅漢および。諸菩薩と共にその義を簡釋す。もし修多羅毗耶耶と相違背せされば即便撰錄す。若相違背すれば即便棄捨す。是取所の文句義類相關るに隨ふ。若慧義を明かにする則は。慧結中に安置し。若定義を明にする則は定結中に安置す。尙餘類悉く爾り此八結を合して五万偈あり。既に八結を造り竟ぬ時に又毘沙門を造りて是を釋せんと思ひ。馬鳴菩薩を招請せんと談らふ。此菩薩は舍衛國婆積多土の人なり。八分毘伽羅論及び四皮陀と六論とに通じ十八部三藏を解す。文宗學府先備の歸する所なりとぞ

起信論議記云馬鳴の名は諸の傳記に依に畧して三釋あり。一に此菩薩初て生るゝ時。諸馬を感動し。悲鳴して息ざるを以ての故に此名を立るなり。二にこの菩薩善能琴を撫して以て。







境の門に至て出んとす。時にこゝを守護したる諸の夜叉高聲に唱令て大阿毘達磨師今國を出んと欲すと即時にとらへて大集の中に還す。衆人共に檢問するに。語紙繆にして相領解せず衆人一統に狂人なりとす。即これを放遣る法師後に又門を出んとす。諸神復唱令して執てかへす。遂に國王に聞て又大集中にこれを檢問する事先のどとく更に相領解せず。斯のどとくするこゝと既に三反。去ては復かへる終に第四反に至つて。諸神たくりて還すといへども衆人重て檢問せず。諸夜叉をして放遣て國を出さしむ。法師は首尾よく本國に還り遠近に觸令して云く。我既に罽賓國に至りて毘婆娑を學び得て文義を具にす。能學ぶ者あらば急ぎ來て之を取るへしと。是によつて四方より學徒雲の如くに集る。年既に老衰に及たれば此法を説竟るへき餘命なきを恐れて諸學者をして急疾に之をとらしむ。さる程に隨て之を説出せば隨て書し遂に全く成就することを得たり。罽賓國の諸師後に此法已に餘國に傳りしと聞て後悔せしと云。偕も其後多くの星霜を経て。佛滅後九百年中に至り頻闍訶婆娑といふ外道あり。頻闍訶は山の名なり。婆娑は譯して住といふ。此外道此山に住するに因て名とす其頻闍訶山の麓の池の中に龍王ありて。名を毗利娑伽那といへり。龍王よく僧法論を解す。頻闍訶婆娑かねて龍王毗利娑那の。僧法論をよく解するを知る故に就て受學せんと欲す。龍王恆に身を變じて仙人の狀貌となり葉屋の中に住す。頻闍訶婆娑往て龍王の所に至て。其學ばんと欲ふ意をのぶる。龍王即

ち之を許し。僧法論の解を説く。頻闍訶婆娑此論を得て。外道の法を信はり。夫よりして心高く大憍慢おこり。此法最大にして是に過たる法有べからずと謂。今釋迦の法盛に世に行れ。衆人みな此法大なりと尊めり。我これを破すべしとて。即阿踰闍國に入て論義の敵をうちて曰く。我こゝに論義せんと欲すもし我負に墮なば當に我頭を斬るべし。若彼方負に墮なば彼が頭を切べしといふ。國王秘柯羅摩阿秩多。譯して正勸日とす。王此事を知て即ち頻闍訶婆娑を呼てこれを問。答て云く王はこれ國の主なり。沙門婆羅門にあひて偏愛の控有べからず。若習ふ處の行法あらんには。宜く其是非を試み給ふべし。我今釋迦の弟子と決判いたし度候おのゝ頭をもつて誓を立べしと奏す。王是をゆるしたまふ。王人をつかはして國內の諸法師に問たまふやう。誰かよくこの外道に對して論義をいたすもの有や。もしよく對するものあらば與に論義すべしと命ず。時に摩克羅他法師。婆藪槃豆法師等の諸大法師は悉く餘國に往て在さず。摩克羅譯して心願とす。唯婆藪槃豆の師匠たる佛陀密多羅法師のみ國に在せり。此法師本大解なりといへども年已に老衰し。神情味弱し。辨說羸微なり。されば見る影もなき行狀なれども法師のいはく。我法の大将たる者悉く餘國に往て在らず。爾はあれども外道強梁にして復縱すべからず。我今正に應じて外道に當るべしと。法師即この由を國王に奏す。王之を許して日を決。廣く大衆を集め論義堂におひて外道の頻闍訶婆娑と。佛陀密多羅法師と論義せしむ。外道問て云く



沙門は義を立んと欲すや。又義を破せんと欲すや。法師答ていはく我は大海のごとし。容ざる  
と云所なし。汝は塊の如し中に入れば即没す。汝がこゝろの望むところに隨ふべし。外道の云  
く爾らば沙門義を立べし。我當に汝を破すべしと。法師即無常義を立て云く一切有爲法利那刹  
那に滅す何を以ての故。後見ざるか故に種々の道理を以て之を成就すと。是法師の説所なり。  
外道一度聞て悉く誦じて口にあり。外道次第に道理を以て之を破る。法師すでに危し大衆して  
是を救はしむ。救得ると能わす。法師老邁の故に遂に負に墮す。此時外道の云く汝これ婆羅門  
種。われも亦婆羅門種なれば。汝を殺すべからず。今汝が背を鞭打て我勝を得たるを願すべし  
とて。老法師の背に鞭を打て。其成敗を行へり。王外道を稱美し給ひ三洛沙の金を以て外道に  
賜ふ。外道これを戴きて國中に布散し。一切の人に施し。稍て頻闍訶山に還りける。時に此外  
道大願を發して。山中の窟の中に入。咒術の力をもつて。夜叉神女の稠林といへるを招きよせ  
此神女に従ふて願ふやう。我死して後石と成て。永く毀壞さらしめよと。神女即ちこれを諾許  
ふ。さて衆に告ていはく若我著す僧法論に於て。不審の條あらば其趣を石面に書べし。我必文  
字を以て解説すべしと誓ひつゝ。自石をもつて窟を開き。中に於て命を捨るに。身即石と成れ  
り。果して其後難問のとあれば。石面に書て尋るに。即座に石面に文字をあらわし返答すとな  
り

偕も天親は阿踰闍國に還り來りて。斯の如きことを聞給ひ此外道に値ざる事を憤り。人を遣わ  
して頻闍訶山に於て此外道を覓しめ。其我慢を折伏して以て師を辱し耻を雪めんと欲す。然  
るに外道は身已に石と成し由聞給ひ。天親尙も憤をまし。即ち七十眞實論を造りて。外道の  
造る所の僧法論を破し給ふ。其論文を石に觸るに。石面に汗を流し。終に微塵の如く碎けて。  
一句も答ふる事能はず。是によつて諸の外道等大に憂ひ。我身を害するよりも甚しといへりと  
ぞ。さる程に天親は師の爲に讐を報ひ耻を雪たまふこと。偏に高德のいたす所也と衆人みな座  
快し國王屢天親の徳を賞し三洛沙の金を賜ふ。天親此金を三分にわかちて。阿踰闍國に三寺を  
建立し。一に比丘尼寺二に薩婆多部寺三に大乘部寺等なり爾後天親正法を成立し先に毘婆娑の  
義を學びて既に通じ。後に衆人の爲に毗婆娑の義を講す一日講すれば一偈を作りて。一日説所  
の義を攝す。赤銅の鏤を刻て以て此偈を書き。醉象の頭の上は標し置。鼓を撃ていはく。誰人  
か能此偈の義を破せん。若破する者あらば當に出來るべしと。斯の如く次第に六百餘偈を造り  
毗婆娑の義を攝し悉く盡せり。一一皆銅の鏤に刻て象の頭上に置こといづれも同じ。爾あるに  
これを破する者なし。即是俱舍論の偈なり。偈足りて後に五十斤の金并に此偈を以て罽賓國の  
諸の毗婆娑師に寄與ふ。彼人々大に歡喜し。我正法已に廣く弘通せりと謂ふ。但し偈は言略  
にして意味深ければ盡く解すると能はず故に又罽賓國の諸師天親より贈る所の五十斤の金に



又五十斤の金を添都合百斤とし。天親に餉り。偈は盡く解し難ければ。長行を造りて此偈の義を詳かに解し給はんことを乞。天親これを承諾し。即ち長行を作て偈の義を偈し。薩婆多の義を立てし。佛所あれば經部の義を以てこれを破す。名づけて阿毘達磨俱舍論といふ。論全く成て後罽賓國の諸師に寄與す。罽賓の國王正勅日王ふかく皈依まし。太子婆羅秩底也婆羅譯して新とす。秩底也譯して日とす。此日太子をして法師となさんと王原來おもひ給ふにより。天親に就て戒を受しめ。王妃も又出家して天親の弟子と成給ふ。太子後に王位に登り給ひ母公と同く天親を留めて阿踰闍國に住して其供養を受んとを請給ふ。天親即ち之を許す然るに新日王の妹の夫の婆羅門を婆修羅多と名づく。是外道の法師にして毗伽羅論を立て天親の造り給ふ俱舍論を破して云く天親の立る所の論と。我毘伽羅論とは大に相違へり。天親若毘伽羅論を能解せば是を破せよ。若解ること能はずば汝か論を壞るべし。天親の云く我若毘伽羅論を解せずんば。豈よく甚深の妙義を解せんやと。仍て論を造りて毘伽羅論を破す。三十二品始めより末まで悉く皆壞る。是に於て毘伽羅論つぶれて唯俱舍論のみ在。國王實して三洛沙の金を天親に賜ふ。王の母公も兩洛沙の金を賜ふ。天親此金を分て三分となし。丈夫國と罽賓國と阿踰闍國とに。各一寺を建立す。偈又此論壞られし外道の婆修羅多まばく慙忿りて。如何ともして天親を伏せんと欲るにより。使を天竺に遣はし。僧伽跋陀羅法師に阿踰闍國に來りて論

を造りて。俱舍論を破せんことを請。此法師承引て阿踰闍國に來り。兩論を造る。一に光三摩耶論一万偈あつて唯毘婆娑の義を述す。三摩耶譯して義類とす。二に隨實論十二万偈あり。毘婆娑の義を救ふて俱舍論を破す。論成て後天親を呼で更て共に面上にこれを論決せんとす。天親は其破すといへども俱舍の義を壞ること能はざるを知て復彼と面上に論決せず。有智人は自ら其是非を知べしといへり

抑天親は先に遍く十八部の義に通じて。妙に小乘を解す小乘を執て是とし。大乘を信せず摩訶衍はこれ佛説に非すと謂へり茲に又天親の兄たる阿僧伽法師は。既に此弟の聰明人に過識解説廣にして。内外に該通するを以て其論を造りて大乘を破せんことを恐る。阿僧伽は丈夫國に住せり。使を阿踰闍國に遣はし天親に告て曰。我今疾篤くして死期に臨めり。汝急に來るべしと。天親しばく驚き使と俱に道馳て本國に皈り。兄阿僧伽に對面ありて。病の容子を尋ねたまふに阿僧伽のいはく。我今心に重病あり其病の本は外より來るにあらず。汝よりして發る所なり天親又問て云く我より病の發すると宣ふこそ不審し。其故具に聞せ給へと。兄のいはく是別義にあらず。今汝小乘を執し大乘を信せず。常に毀謗を生ず其惡業に依て必永く惡道に淪んで無量の苦を受べし。我それを恒に愁ふ其苦積りて既に命全からざらんとす。天親是を聞て大に驚き即ち兄に願ひて大乘の深意を説きかせ給へと。阿僧伽其時大乘の要義を懇に説示し給へば。天



親原來聰明にして。殊に深識なる程に。此時に於て大乘は理應にして小乘に過るを悟り知り。是れより兄阿僧伽に就て遍く大乘の義を學び。後には兄の解給ふ所の如く悉く通達を得て解意既に明かにして。前後を思惟するに。悉く理と相應して。乖背と有ることなし。始て小乘を失とし大乘を得とするを覺り若大乘なくんば三乗の道果なし。斯まで尊き大乘の法を毀謗して信樂を生ぜず。此罪業必惡道に入ることを恐れて深く自ら其身を咎め。先非を悔て兄の所にいたり數回其愚迷を陳。先の愆を懺悔せんと欲す。いまた如何して免さるゝことを知らず。せめては三世の諸佛への言譯に我昔大乘を謗しも此舌ゆへの事なれば今此の舌を割てもつて其罪を謝せんと宣ふ。兄阿僧伽之を留め汝今千枚の舌を割とも更に誹謗の罪滅ぶべからず。其罪を滅せんと欲せば。今まで誹りし其舌をもつて直に大乘經を讀あげ普く世に弘通せば。自ら其罪は滅ぶべしとしめしたまへば。天親實もと心づき給ひ夫よりして大乘を證したまひ。阿僧伽法師寂し給ひて後。天親方に大乘論を造り諸の大乘經を解釋し。華嚴。涅槃。法華。般若。維摩。勝鬘等の。諸の大乘經論悉く。これ天親の造る所。又唯識。釋提。大乘。三寶性。甘露門等の諸大乘論を作り給ふ凡此天親の造り給ふ所は。文義精妙にして。見聞するもの信求せざることなし。故に天竺及び餘の邊土に至るまで。大乘小乘を學ぶ人悉く天親所造の論を以て學本とす異部および外道論師等。天親の名を聞との畏伏せざる事なしとぞ。阿踰闍國におひて遷化した

まふ年齢八十。迹を凡地に居すといへども。理實に思議がたしと也

付法藏因緣經第六曰。尊者闍夜多臨當滅度。告一比丘名婆修槃陀。汝今善聽。昔天人師於無量劫勤修苦行。爲上妙法。今已滿足。利安衆生。我受囑累。至心護持。今欲委汝。當深憶念。婆修槃陀。自言受教。從是以後。宣通經藏。以多聞力智慧辨才如是功德。而自莊嚴。善解一切修多羅義。分別宣說。廣化衆生。所應作已。便捨命行。高僧讚嘆鈔云。天親菩薩はじめは。說一切有部に於て出家受學す。有部とは佛入滅の後佛弟子二部に分つ。大衆部と上座部となり。上座部は迦葉を上座とする故に十の部師あり。大衆部に八の部師あり。根本の上座大衆の二部を加へて二十部とす。今の有部は上座部の中の第一なり。天親此部に依て出家して。小乘を受學して。大乘を誹謗したまふ。後に无著(阿僧伽)の許に詣して大乘を習學し。大乘論百餘部を作り給ふ其中に淨土論一卷を造り給ふ。是を無量壽經優婆提舍願生偈と名づけて淨土の三經通伸の論なり。此論に一心皈命を彰はし自ら願生西方し。人を勸めて専ら極樂往生を願はしめたまへりと云云。又云天親菩薩は釋迦如來像法の中に出世し。一論を説て願生西方し。横超の誓願を彰はし他力の一心を示し。世尊我一心皈命盡十方无碍光如來願生安樂國と偈頌を造りて。人をも勸め



自らも報土往生を願ひたまふと云々

九表記云天親菩薩始小乘論五百部後に大乘論を五百部造りて世に弘め給ふ。合て千部の論を造り給ふ。故に千部の論主といふ也。されば天親菩薩の本意を顯さんと思ひ給ひて。往生淨土論を造り給へり。扱その淨土論に。禮拜門。讚嘆門。作願門。觀察門。廻向門の五念門を釋し給へり。此五念門は往生淨土の修行なり。然れば此五念門を釋し給ふといへども。假令五念門の名を知らざれども苦しからず。一念歸命の信心の中には。五念門も三心も皆悉く具りてあることを知らしめん爲に淨土論の初に。世尊我一心歸命盡十方無碍光如來願生安樂國と書給へり。是の如く一念歸命の信心を勧めたまふと云々又曰天親菩薩自己の智慧にては上諸佛の御意に叶ひ。下衆生の心に叶ひ侍るやうに成就すべからず。願はくは如來の御心に叶ひ衆生の機に應するやうに佛力を加へて。此五念門成就なさしめ給へと。天親菩薩の心願を釋迦如來に告て。如來の神力を蒙らんが爲に世尊と呼出して心願を告給ふ也と云々

### 三國七高僧傳圖會天竺之卷 終

### 三國七高僧傳圖會震旦之卷

#### 曇鸞大師傳

續高僧傳第七(義解篇)曰。魏西河石壁谷。玄忠寺釋曇鸞。或爲鸞。未詳其氏。雁門人家。近五臺山。神迹靈怪。逸于民聽。一時未志學。便往尋焉。備觀遺蹟。心神歡悅。便即出家。內外經籍。具陶文理。而於四論。佛性。彌所。窮研。乃至

曇鸞大師は北魏の代の人にして。始は四論宗たりしが。後に菩提流支三藏の教によりて。四論の講説を聞き。聖道萬行を捨て本願他力に皈し。一向專念の宗風を弘め給ふ。北魏とは南北朝の魏の代なり。南北朝とは。晉。宋。齊。梁。陳。隋。の六代を南朝とす。又六朝とも云。此とき同時に北朝に六代あり。後魏。東魏。西魏。後梁。北周。後周等なり此時天下二に分れて楊子江より南を南朝とし北を北朝として各都を建て天子と號し。互に天下を諍ふて戦ひやまず。されば曇鸞は北朝後魏の人にして第六の主孝文帝の承明元年丙辰に生れて東魏の孝靜帝(後魏十二代畢つて東魏西魏と分る)の興和四年壬戌に滅す。夫より八年過て北齊おこり又高齊とも云。曇鸞の在世南朝にては。宋。齊。梁の三代を経るなり。尙異説ありこゝに略す。又四論宗とは三論宗のことなり。中論。百論。十二門論。の三論を依る所とするゆへに



三論宗とはいひ。又智度論を加へて四論宗といふ也。則ち中論八卷は龍樹菩薩の作る處の論也。百論二卷は提婆菩薩の作る處の論也。此提婆は。付法藏二十四祖の時は第十五祖にして迦那提婆大士と稱す。姓は毘舍羅。南天竺の人なり。龍樹菩薩に謁して付法ありし也。十二門論一卷は龍樹菩薩の編給ふ論なり。大智度論百卷これ亦龍樹菩薩の作る處の論也。曇鸞此四論によつて。佛性常住の義をあきらめ常に四論を講し給ひしとなり

前に出す高僧傳にいへる如く釋の曇鸞は其姓氏詳ならず。震旦山西大同府鴈門といへる處の人にして。其家五臺山に近き邊りにあり。未志學(十五歳)ならざる内に五臺山に登りて。文珠の淨土たる靈場を尋ね。其遺跡を拜して菩提心を起し。即出家し修學し給ふ。内典外典の經籍とあれば道書。儒書天文地理を始めとして。廣く佛教に通達し給ひ。別して四論の佛性に心を碎き給ふ。一時大集經を讀給ふに。其詞義深密にして。容易開悟がたき事を恨み給ひ。此經を詳に注釋を加へし書をつくりて。衆を導んと思ひ給ひて其文言を著したまふに事半を過ること。不慮氣疾を發し。止を得ずして權に筆を停め給ひ。周く醫療を加へ尙も保養のために。汾州(山西)秦陵の故墟に至り。城の東門に入て上青宵を望み。忽ち天門の洞に開くを見給ひ。六欲天(四天王天。忉利天。須臾摩天。兜率陀天。樂變化天。他化自在天)の次第階位。上下重復歴然として齊く見給ひ。これに依病頓に平癒せしかば。即ち前に書したまふ注釋を作り繼

んと欲して。熟思めくらしたまふやう。夫釋尊四十九年三百六十餘會の説法。甚以て廣多なり其上菩薩の論。人師の釋誠學ぶべき經論釋多し。又此身のはかなき事を思ふに。呼ばは吸を待ずして死する世の風なり。普く經論を學び盡し解釋成就なさんと短命にては及ひがたし本草の諸經具に正治の法を明す。長年の神仙世間に往々あり。所詮仙術を習て長命不死の法を得なば佛教を崇めて志願の注釋を満足せば是又善ならずやと思ひ立たまひ江南といふ地に。陶隱居と號る仙人ありて。方術其妙を得て海内普く崇敬す。故に曇鸞これに従ひて仙術を學ばんとて北魏の地を出て南朝の都に至り時の帝に拜謁し奉りたき由を達せらる。此時南朝は梁の武帝の大通年中なり。所司等北國の虜僧曇鸞と聞て。いかなる子細あらん哉と疑ひて種々查照をなすといへども更に異なる事あらざれば頓て奏聞を遂たりける。是は所謂戰國にて若や他邦よりの問者にやあらんかと疑ふが故なり然るに帝きこしめし是は必ず國を規ものにはあるべからず。重雲殿に入べしと宣ふにぞ頓て引路をなしにける。此重雲殿といふは其構許多にして。門の數又廿餘あり。千迷道とて甚紛らわしき方より誘ひたり。帝は先殿中の隅に於て細牀に卻坐し袈裟を覆ひ納帽を被き給ふ。曇鸞宮殿の前に至りて後を顧みたまふに承對者さらに見へず。傍を見たまふに。高坐を構へて上に机を飾りたるありて外に坐なし。曇鸞進んでこれに昇りて佛性の義を立ること三度。帝命して宣く。大檀越佛性の義。深略にして疑ありとて。帝みづから



帽子をとつて便すなはちまばく問とたまへば曇鸞どんらんまばく答こたへたまひて。問答もんたうに稍時せうじうつりぬ。かゝりし程ほどに帝ていのたまはく。今日けふ既に暮くれに及およべり明日あした猶なほ相見あひまゆべしと。曇鸞どんらん即すなはちち坐まを下くだりたちうやうやしく禮らいをなし徐々じょじょと出給いでたまふ。時に廿餘にじふごの門かど一ひとヶ處ところも誤あやまりなく出たまふ。帝ていこれを歎なげありて。大おほに嘆訝なげして宣のたまふ。そも此こゝ千迷道せんみだうは年久ねんきうしく殿中てんちゆうに侍つかふるものすら。常つねに往還ゆきかへりに迷まなるに。彼か法師ほふし始はじめて來りて。更さらに迷事まよことなし。正ただしく凡人ぼんじんには有あべからずと。頻しばしばりに感心かんしんしたまひつゝ。明あ旦あしたにいたりては大極殿だいごくてんに迎むかへ入れ。帝てい禮接らいせつを厚あつくしたまい由よして來るところを問給とふ曇鸞どんらん答こたへての玉たまはく。野僧やそう佛法ぶつぽふを學まなばんと欲ほするに年齢ねんねいの短みづかきを悲かなしむ故ゆゑに遙々はるかと此國こゝくにに來りて陶隱居とういんこに從したがひ仙術せんじゆつを求もとんと致いたすなり。帝ていのたまはく此仙世こゝのせんせいを友ともとせざる隱遁者いんどんしやにして。近頃きんぎん數回すうかいよべども來きらず。心こゝろに任まかせて方々はうはうに住す。尊師そんし先書簡せんしよかんを以もつて機嫌きげんを尋たづね。而しかして至いたり給へど。曇鸞どんらんみかどの命いのちに隨したがひ。書しよを以もつて尋たづね給たまふ。陶隱とういん乃すなはちち答こたへ去き月げつ耳みみ聞き音聲おんしやう以もつて辰眠ちんみん受う文字もんじ一將いつしやう田でん頂禮ちやうらい歲さい積せき故ゆゑ使し應おこ真ま來き儀ぎ正ただ爾なんと云い々々さる程ほどに曇鸞どんらんはすなはち彼山所かさんしよに至いたり給たまふに陶隱居とういんこはこれこれを請しんし入れ大おほに欣然きんぜん。便すなはち仙經せんきやう十卷じゆくわんを以もつて遠とほく來きるの心こゝろに酬むかふ。曇鸞どんらんこれこれを授たまり去きより還路かへりぢに浙江せつかうにいたる。此こゝに鮑郎ほうらう子神しんといふ者もの有あり。彼か浙江せつかうに浪なみを涌わすと七日しちにち。曇鸞どんらんその大おほ濤たうの初はじめに值給あひひて。渡わたることを得えず故ゆゑに曇鸞どんらん彼神廟かじんぼうに往ゆて。信しんをこらして祈告いのちたまうやう若新じやくしん處ところのこととせば。まことに廟ぼうを再營さいえいして禮謝らいしやすべしと。須臾しゆゐして江神かうじん忽たち形かたちを現あらす。其容貌すがた二十

計はかりなり曇鸞どんらんに近ちかづき告つていはく。貴僧きそうもし渡わたらんと欲ほせば明朝みんちやうを待給まちへ。必ず穩ゆたならしむべし是こゝに因よて曇鸞どんらんは翌朝あくるあしたに至いたりて見給み給たまふに禱猶なほ烈れつしといへども。怙然こゝろとして安靜あんじやうなり。嗚なて舟ふねに乗のりじて容易たやすわたり給たまひ南朝なんちやうの都みやこに還かへり武帝むていに達いたして具つぎに由縁ゆゑんを奏そうし給たまふ武帝むてい感あましく動うごして江神かうじんの爲ため更に靈廟れいぼうを建營けんえいし給たまふ斯しかく曇鸞どんらんは帝ていに暇いとまを乞こひ。南朝なんちやうを立て本國ほんこくに飯かへり北魏ほくゑいの境かみに至いたり。陶隱居とういんこが教せしむこととく。名山みやまに入いて修行しゆぎやうし。仙術せんじゆつを得えんと欲ほするにより。洛外らくがいを巡めぐり此彼こゝかと勝地しょうちを毛もらみ給たまふ折せから不圖道ふとだうにて北天竺ほくてんぢゆくの乾陀けんた會國くわいこくなる三藏さんざう菩提ぼだい留支りゆしに值給あひへり。曇鸞どんらん携かたまふ仙經せんきやう十卷じゆくわんを出いし。目めより高たかく指舉さしあげて。此こゝ是こゝ長生不死ちやうしやうふしの仙經せんきやうなり。佛法ぶつぽふの中に於おて長生不死ちやうしやうふしの法ほふありて。此土こゝの仙術せんじゆつに勝まさるもの有あり。と尋給たづね給たまへば。此時こゝろ留支りゆし三藏さんざう心に思おもひ給たまふやう。長生不死ちやうしやうふしの仙術せんじゆつを習まなひ修しゆして八苦はつこ充滿じゆうまんの世界せかいに久ひさしく存ぞんらへ。色相輪廻しよくさうりんゑの苦くるしみを受うるまでなり。更さらに出離しゆり生死しやうじ頓證とんじやう菩提ぼだいの仙經せんきやうにあらず。然しかるに曇鸞どんらんは色相しよくさう相續さうじよくの仙經せんきやうを。至極しよくのやうに尊たうめるは。皆みなも淺あましき人哉ひと。あら穢じき人ひとを見みたるとかな。あら拙ちやくき詞ことばを聞きとよと。大地だいちに唾つばを吐はき。懷なつかしより。觀無量壽經くわんむりやうじゆを出いし云いく。是こゝは此西天こゝのせいてんの大仙演說だいせんえんせつの長生不死ちやうしやうふしの法ほふなり。之これに依よて修行しゆぎやうすれば。命いのちに限りなき無量壽佛むりやうじゆぶつとなれり。縱たとひ仙術せんじゆつを學まなび長生ちやうしやうの法ほふを得えたりとも少時せうじの間ま死しせずして。終つひには死しして三有さんゆうに轉りん廻くわいするのみ。吁あいふふなり。此こゝに心こゝろを翻ひし我教わがきやうにまがひて。當まに生死しやうじを解脫げだつする事ことを得えらるべ



し。と念佛の功德をくわしく語り給ふに曇鸞實にもと。領解しつ。念佛往生の深意を授かり。直に陶隱居より授けし仙經十卷をば焼す。それより四論の講説を永く止。念佛三昧の身となりたまひ。讚阿彌陀佛の偈を造りて安養淨土の依正二報の功德を願はし。天親菩薩の往生論に注解をなし給へり。實に此仙經は多くの辛苦をなし求給ひし所なるとは。時亂世にして敵國への往來自由ならざるを。種々に心を盡し。遼々江南に赴懸望し得たる仙方を。流支の一言の示教に依て。忽ち先非を悔みて焼す。多年習學し給ふ聖道万行をふり捨他力の大道に皈し。一向專修の眞門に入給ふこと。宿善至來とは云ながら此即曇鸞の改悔同心。一念發起の時節平生往生の現われと言へし

菩提流支三藏は。北天竺乾陀會國の人なり。元魏の南臺洛下永寧寺に住す著す所の經三十九部百二十七卷淨土傳來相承の宗祖なるが故に。天親菩薩の後。此三藏に皈すと二藏義に見たり按ずるに流支三藏曇鸞大師に授る所の淨教は。南山(唐高僧傳作者道宣)の說によれば觀無量壽經と云。又雲棲(阿彌陀經義疏作者)の說によれば。阿彌陀經といへり。近世の日溪(江州日野正崇寺法霖)は大無量壽經といふ。蓮如上人の正信偈大意には。南山の說によりて觀無量壽經とし給ふ。然るに三論の系譜には。流支天親の淨土論を授くとあり。淨土論は流支の將來にして自これを譯。而して此論を曇鸞師に授く。故に曇鸞此論に注解を著し給ふ

らん歟。後人尙考べし

魏の帝王曇鸞大師を崇めて。神鸞と號け給ひ。勅を下し并州の大巖寺に住せしめ其後汾州北山石壁の玄忠寺に移住せしむ。又介山の陰に往て。徒を聚めて淨業を蒸む。今鸞公巖といふ是なり魏の興和四年に卒し給ふ春秋六十有七臨終の日に至りて虚空より花降くだり。幡天蓋等寺の宇を覆ひ香氣四面に薫じ。音樂の聲まげく。寺に登る許多の衆人みなこれを見聞す。事の由を帝に奏聞す。勅して汾西秦陵の文谷に葬りて。靈廟を營建し。並に石碑を建て師の高徳を録し給ふ。今も尙存在すと云々(已上續高僧傳の大意)

淨土論下云。沙門曇鸞法師は并州汝水の人なり。魏の末高齋の初猶在せり。神智高遠三國の人皆その徳を知る。衆の經卷に詳なると人外に獨歩す梁國の天子蕭王恒に北に向ふて曇鸞菩薩と禮したまふ。天親菩薩の淨土論を注解し。裁て兩卷とす。又無量壽經奉讀七言の偈百九十五行並に問答一卷を撰集して世に流行せしめ道俗を進めて決定往生諸佛を見奉ることを得せしめ常に龍樹菩薩に臨終の開悟を請給ふ。誠に所願の如く。一夜聖僧の像を現じて忽に來りて菴室に入て云く我は是龍樹なり便ち説て曰く。已に落たる葉は枝に附べからず。未だ束ねざる粟は倉の中に求むべからず白駒隙を過く。暫くも留むべからず。已に去るものは反がたし。未來追べからず。現在今何かあらん。白駒廻るべき事難し。法師妙に言旨に達す。是終りを告るなりと



知る。これに依て即ち夜中に諸方白衣の弟子及び。寺内出家の弟子に告ぐ。今既に命終すべしと。三百餘人一時に雲のごとく集る。曇鸞沐浴して新しき淨衣を着し。手に香爐をとつて西に向て坐し。門徒に教誡して西方の業を索む日の初出の時。大衆聲を齊しくして。彌陀佛を念す。便即壽終したまふ。寺の西五里の外に比丘尼寺あり。並に是門徒なり。早朝に堂に集りて粥を食する時。空中に微妙の音樂聞へ。西より來て東に去るを見る。其所に集る衆人皆これを奇異なりとす。中に智者ありて大衆に告て云く。法師和上一生人に教へて淨土の業を修せしむ。今此音樂東に向ふて去ものは必ず是法師を迎ひに來るなるべしと。食訖て頓に法師の所に訪らんとて既に寺を出んとする時。又音樂空中にありて東より西に向ふて去るを聞尼僧等相與に彼に至つて師を訪ふに。果して入滅ありしを見る云云

淨土往生傳上(云)上略(一)夕總正持誦見一梵僧一掀一昂而來入其室一曰吾龍樹也。其所居者淨土焉。以汝有淨土之心一故來見汝。曰何以教我我樹曰已去。不可及未來。未可追現在。今何在。白駒難與廻言訖而失。憇以所見勝異一必知死生之期。戒矣。即集弟子數百人一盛陳教誡言。其四生役々。其止無日。地獄諸苦不可。以不懼。九品淨業不可不修。因令弟子齊聲高唱。阿彌陀佛。憇乃西冥目。頓顙而示滅。是時道俗同聞。管絃絲竹之聲。由西而來。由西而隱。魏

曰此誠佛子之真修其所皈也。有在矣。勅葬汾西之文谷。仍條其生平所習。以立碑焉。瑞應剛傳。新修往生傳上龍舒淨土文。五樂邦文類三。佛祖統紀(二十八)。蓮宗寶鑑。四歸元直指集。上諸上善人詠往。生集一等到出たり皆大に同し

安樂集の下に曰。曇鸞法師康存の日。常に淨土を修す。亦毎に世俗の君子あり。來て法師に呵て問て曰十方佛國皆淨土とす。法師獨意を西に注む豈偏見を生ずるに非ずや法師對て云。吾は既に凡夫。智慧淺短して未地位に入されは。念力均くすべけん哉。草を置て牛を引恒に心を槽糠に繫べきが如し縱放全く所皈なきを得んやと。復難者紛紜すといへども法師獨決す。是を以て一切道俗を問ことなく。但法師と一而相遇者。もし未正信を生ぜされば勸めて信を生せしめ。若已に正信を生ずる者には皆すゝめて淨國に皈せしむ是故に法師命終の時に臨んで。寺の傍左右の道俗。みな旛華院に映ずるを見。ことごとく異香音樂迎接往生を遂るを聞と云云

曇鸞大師の一代の化度の風は。先第一に天親菩薩の往生淨土論は。文句甚だ略簡にして愚昧のものには取惑ふ所多きが故。其論に注釋を加へて。往生論注といへる上下二卷の書を作り給ひ。自力他力の深義廣大無碍の一心の所由をねんごろに示し給ふ。此論注の注の字は灌といふ文字にて水をそそぎ掛れば物きつばりと顯るゝ如く。淨土論の中に教化したまふ天親論



主の思召の臆を探り出して示し給ふといふ意なり。又解といふこと前にまば／＼あり。此解の字はどくといふ文字にしてもつれたる糸をほどきて見せる意なり文字の作たるをいへば。角扁に牛に従ひ刀に従文字にして唐土におひて牛の料理をなす時に。下手なるものは思ふがまゝに切ざるのみならず時を移して手際あしく。尤是其料理の仕方ならひありて。骨のつがひ切處を覺しものは。早くして骨と肉と能分りて其手際いさきよし唐土に庖丁といふもの。此料理に妙を得たる者あり。故に牛を解刀を庖丁といふなり。莊子曰。庖丁文惠君の爲に牛を解て曰。臣か刀十九年。解ところは數千牛にして刀の又新に研たるが如し云云。されば數多の牛を料理なせども刀の刃の損することなしといへり。其牛を解よりして轉に來りて何事によらす物のさつはりと。手際よく筋道の立ことをば此解の字を用ゆ。又淮南子にも屠牛一朝の解を吐く。九牛而刀もつて毛を判すと。料理の上手をいへり。夫よりして愛を解。或は思を解などいへることに遣ふも。みなもつれたる糸の如くなるを解ことゆへ判也。講也説也釋也と字注せり。今も淨土論の自力他力の道理。往相還相の二回向の謂。一心皈命の安心を明に決判し講釋し給ふ曇鸞大師の注釋の解にあらざれば天親菩薩の論判は恐なるものには。義理分明ならざる也

再 說曇鸞大師は釋尊入滅の後一千四百二十五年。後魏の孝文帝の承明元年丙辰に誕生し給

ひ。東魏の孝靜帝興和四年壬戌に春秋六十七歳にして入滅したまふ。即日本人皇三十代欽明天皇の三年に丁る

曇鸞大師往生論の註をつくりて。論の不如實修行相應を釋して。三信三不信相對の釋を設給へり。此釋は原論の一心。皈命の一心を釋するより起りて。三信は他力の一心の細釋にして他力の信心なり。三不信は自力の信心の相なり論に稱名憶念すれども無明由在て所願を滿ぜざる者あるとは如實修行相應せざるに由るがゆへなりと云へり。不如實修行とは自力雜善の修行をいふ。如實修行とは他力信心の行をいふ也。故に注に不如實修行を釋して。又三種の不相應あり一には信心淳からず若存若亡するが故に。二には信心一ならず決定なきが故に。三には信心相續せず。餘念 間が故にといへり。第一の不信は信心の弱之信心堅固ならず。或は煩惱重く罪障の強きに身を卑下し。又信の甲斐なく行の怠につけて。本願を危み。若善心も起り妄念もうすらぎ。念佛のいさましき時は往生すべしと思ふ斯のごとく或ときは往生すべしと思ひ或ときは往生すべからずと思ふ故にあるかどすれば無なり無かと思は有。故に若存若亡といふ。第二の不信は自力雜善の執情やみがたく他力往生の正念落つかず。故に慥に往生決定と思ひ定むる心なきなり。第三の不信は或は雜善をまじへ或は助業を勵み。或善本起行の念やまず。斯のごとく餘念雜るゆへに信心相續せざる也。此三不信は自力の信



なり。老かれはかやうの自力根性を振すて、一向一心に稱名念佛して。佛恩を喜ぶを三信とも他力の信とも一心皈命ともいふ故に注に三不信を釋し己て此と相違するを如實修行相應と名く。是故に論主建に我一心と言りと言へり。是によれば論主の一心と言ふは他力の信心也と云

道 綽 禪 師 傳

道綽禪師の傳は續高僧傳第二十四(習禪篇) およひ瑞應剛傳。新修往生傳中佛祖統紀(二十八) 諸上善人詠往生集一等に出たり大同小異あり茲には續高僧傳の大意を以て著すなり。抑禪師は釋尊滅後一千五百十一年に唐の并州の晋陽汝水縣に生れたる。則後周(北朝)の武皇帝の保定二年壬午と云々

按ずるに此年後周滅して。後梁の明帝天保元年なり南朝の陳の文帝天嘉三年に當る蓋後周の代に生れて。化を唐朝に盛にす。故に唐の道綽禪師と云なり

道綽姓は衛氏弱齡とき俗間に在て閭里に於いても 忝讓を以てすと云て。人を敬ひて侮らす少長ともに其禮節を専らとす人みな是を稱美せり。十四歳にて出家し。廣く諸教にわたり。殊に大涅槃部を宗として弘傳し給ひ。講ずること二十四遍(涅槃宗は日本に將來せず其大概をいへ

ば天台宗に比すへし彼宗に五時八教を立るに法華涅槃は同醍醐味にして一時とするを以てなり) 晩に瓊禪師につかへて空理を修行し給ふ。瓊禪師大に嘆美まてこれを愛す四方その德に沾ひ。その名遠近に高し。衆人えばく尊敬せり。一時汝水石壁谷玄忠寺に登り給ふ。此佛刹は曇鸞大師の建立にして。則文谷に鸞師の碑あり道綽こゝに詣で初めて碑の銘をよみて大に慚謝していむく。曇鸞と吾とそその智をくらぶれば。月と星との如く。其德行をいへば珠と瓦とのごとし。其曇鸞師すら尙四論の講説を聞て。本願他力をたのみ。仙經を燒すてふかく淨土に歸し給ふ况や我淺智をやと。すなはち碑前にひざまづき。回心して淨業に皈し。あふきねがわくは滅後の弟子と思しめされ。哀愍覆護し給へど。在るが如く心願しつ。夫よりしては是まで修學し給ひし。涅槃宗を速に捨て。鸞師の往生論注を指南とし。此玄忠寺に在住し自行化他し給ふ。嘗て行道し給ふとき。僧ありて道綽佛を念じ給ふ珠數七寶の山のごとしと見る又西方に靈相を見こと數回なり。此によつて盛徳日々に増り。榮譽遠くおよんで。道俗子女赴く者山に充り。恒に觀經を講ずること二百遍。人みな手には珠數を指。口に佛號を唱ふ。毎時退散のひいき林谷に彌れり或は邪見にして信せず。是を毀謗するものも一回道綽の相貌の柔和なるを見て。氣をのまれ皈伏す曾て 貞觀二年四月八日をもつて將に命の盡んとするを知て。普くこととのよしを衆に告ぐこれを聞つたへて來もの山寺にみつ。此人々皆曇鸞大師七寶の舟に乗來



り。道綽に告て云。汝淨業すでに成して往生すべき堂成就す。然れども餘命未盡すとのたまふを見る。并に化佛空中にましく天華を散すを見る。群參の道俗其天華を袖たもとにうくるに薫れる香氣いふべからず。又往生證據のために乾ける地に蓮華を挿て試給ふに。萎まざること七日におよんで猶鮮なり。其餘の善相記するに違あらず年七十に及んで齒あらたに生ずると本のことし。爾のみならず氣力健にして容色盛なり。淨土の法門を談述したまふに理味奔流にして辨舌懸河の如し。又人に彌陀の佛名を念ずる事を勸るに。或は麻の實大豆小豆等を用て數を取らしむ一回唱ふる毎に便一粒を置き、斯の如して數百万石を積人あり是も事によせて慮を攝め縁を静めんと爲すなり。道俗その風を慕ひ之を修する者多し。又道綽自ら常に木藥子を珠數として。諸の四衆に遺へて其稱名念佛を教へまば、禎瑞を呈し具に行圖を叙る。淨土論兩卷を著し遠く龍樹天親の法門を談じ近くは曇鸞惠遠の心をのべ大に淨土を尊崇し。明に昌言を示す文旨要を該諸の化範を詳かにす。その化導を業もの年をかさねて益さかんなり。道綽淨土を宗としてより。坐するに常に西に向ひ晨宵假にも西を後にせず。六時篤行敬行はじめより行を缺さず。行住坐臥に念佛止となく日々に七万を以て限とす。沙門道撫といへる名勝の僧京師より來りて玄忠寺にいたり道綽に謁して淨土の行業を同ふし共に淨教を弘通せり。道綽今年八十四にして神氣明爽なり(已上續高僧傳の大意也)

道綽禪師は西河といふ所に生れ給ひ。晉陽文水縣の石壁谷玄忠寺に住し給ふ故に西河禪師と號し。又後玄忠と號す。玄忠寺は曇鸞大師の建立と云々淨土論下目。沙門道綽法師は并州晉陽の人なり。乃ち是前高德大德法師。三世已下の懸孫の弟子にして。涅槃經一部を講ず。常に總法師の智德の高遠なるを讚嘆す。自ら云相去と千里懸殊と尙講説を捨て淨土を修し。已に往生するを見る。况や我小子の知どころ解するどころ何ぞ多として此を將て徳とするに足んと大業五年より已來即講説を捨て淨土の行を修して。一向に専ら阿彌陀佛を念ず。禮拜供養相續して間なし。貞觀已來有縁を開悟せん爲に。時々無量壽觀經一卷を敷演して。並士の晉陽。大原。汾水。三縣の道俗を示誨す。七歳已上ならびに彌陀佛を念ずるとを解る。上精進なる者は。小豆をもつて數として彌陀佛を念ず八十斛あるひは九十斛を得。中精進なる者は五十斛を念ず。下精進のものは二十斛を念ず諸の有縁に教へて西方に向て涕唾便利せず。西方に背て坐臥せさらしむ。安樂集兩卷を撰て世に行わる。貞觀十九年歲次乙巳四月二十二日。悉く道俗と別れを告ぐ。三縣の内の門徒別に就て前後斷す。數を記すべきと難し。廿七日に至て玄忠寺におひて壽終す。ときに白雲西方より來るあり。變じて三道の白光となる。自房の中に於て徹照通過して終に訖る。乃ち滅後墳陵を焼時復五色の光三道空中に現じて日輪に映し遶る。めぐり訖て乃ち止む。復紫雲三度墳の上に於て現す



るあり遺從の弟子 同此瑞を見ると云々。又淨土往生傳に依に前に高僧傳に見えたる道撫法師は。久しく玄忠寺に有てその後寺を去給ふ時。道綽禪師と互に離別の情をのへ淨土の再會を期して。他國に赴き疎遠なりしが道綽の往生したまふことを三日過て聞給ひて曰。吾常に行をもつて道綽に先立んと思しに何乃ち後るゝや吾一息の巧を加へて。見佛の期を追べしと。即時に彌陀の尊像の前にて頭を叩き發露懺悔して退きその往生の座に就て忽に終ると。瑞應剛傳。新修往生傳。佛祖統記。諸上善人詠等の傳みな大におなじ。又善導和尚といふは道綽の御弟子にして。晋陽の九品道場にして。觀經を開演したまふ時。始て師弟の契約あり。即ち觀經を授與し及び。淨土の法門を相承し給ふ。まかるに善導和尚は不待時の別祝にて。忽に三昧發得して出定入定了了分明なれば。散心の眼前にも淨土の聖境を拜見し給ふ。况や入定の日は彌陀如來に對面し給ふ。道綽は師なりといへども。赤三昧を發得たまはず。是故に或時善導大師に問ひ給ふは。我は決定して往生を得てんやと有しかは。善導大師すなはち一莖の蓮華をもつて。佛前の乾ける地に挿みて七日の間行道念佛せんに。若蓮華萎み憔悴すんば往生決定ならんとあれば。道綽禪師願て教に任せて。一莖の蓮華を佛前に挿て七日行道し給ふ所に七日か間此はな果然として萎み悴けず次第に色鮮なり道綽大に歡喜し。偈は我往生決定なりとて。彌念佛し給へり(唐高僧傳瑞應傳新修傳)

の大意)

一説にこれに付て不審あり往生の障は疑心より甚しきはなし。夫道綽禪師は三信三不信を懸に釋して。他力の信を人に勸めたまふ。然に往生を得へきや得まじきやと尋給ふは疑心なり。善本修習若存若亡する。疑佛智とて往生の障とす。何に況やかくの如く大疑心は往生の障なるべしといふに。尤然なり但疑心に二あり。安心の疑は實に往生の障なり。起行の疑は往生の障とならず(具如三心要集淨土宗要)今道綽の疑は安心の疑にあらざり。起行の疑にあらざり是疑に似て疑にあらざり。その故は信心決定の人往生に於て勝解作意を起すといへども。未眞實作意を得ず。茲をもつて聖教の道理を聞ては。決定して疑はずといへども直に淨土の聖境を見ず。又佛の告を得ことなし。然るに眞實に往生を大切に思ふ故に。其もすれば加様の疑あり往生を大切に思はず唯人なみくの願心なれば此疑はなし譬ば貪欲の深き人。他人より金銀を得る約束をして券契を受取るときは。其金銀を受取こと少しも疑を生ぜずといへども。未手にとらされば若や失却をせんかと用心して。日夜朝暮心にさし挾て。寤ても覺ても忘れざるが如し又无欲の人は忘れたるが如くにして言出すこともなし。往生を願ふ心もこれに同じ。されば善導は淨土を貪せざるは無上解脱の障といへり。是一大事の往生贖劫の大慶なれば行住坐臥に心にかけて。思めされしは甚有がたき事なり。又曰或時



善導に告て宣ふは願くは師定に入て道綽は決定して往生すべきや否やを。阿彌陀佛に尋給へど有りければ善導大師即定に入て觀念し給ふに御丈十丈計の阿彌陀佛出現し給ふを觀見し給ふ。是に依て問給ふは道綽の現に念佛三昧を修す。決定をして往生を得てんや又何の年月にか往生するを得んと有ければ。阿彌陀佛の御答に樹を伐には連に斧を下せ。縁なければ共に語るとなけん。家に還らんには苦を辭すると勿れと云り又道綽に三の罪あり此三の罪を懺悔せしむべし一には佛像經卷を櫛櫛の下に安置し。自は深房の奥深なる處に居す。二には起立塔寺等の功德を營によつて受戒の出家。比丘大僧を驅使ひ策役す。三には屋宇を營造するに蟲の命を損ひ傷る道綽むかし此罪を犯す。久しくして懺悔せず故に罪益重し。第一罪は二百五十戒の中の衆學。第八十五の安佛下房戒を犯せる罪なり今時の行者平居坐臥の處に佛像を安置して褻瀆の罪を得る。在家無戒の者にても。恭敬修を欠ゆるに念佛の信者の作業にあらず祖師の教に背く。况や道綽大僧の身とし犯戒の罪なれば。十方の佛前に於て第一の罪を懺悔すべしと云。第二の罪は具足戒の中の墮地戒の所制を犯すの罪なり道綽むかし寺を造り塔を立るときに受戒の比丘大僧を驅つかふて律制に順せず。俗士の奴婢を役するが如し。諸の比丘衆道綽に驅つかはれて心ならず犯戒すること多し。賈一人に歸するなれば。皆道綽の罪となる故に四方の僧の前にて第二の罪を懺悔すべしと云。第三の罪も又波逸提の中の墮地

戒を破るの罪なり。是又比丘大僧の宜しからざる處なり故に一切衆生の前にて第三の罪を懺悔すべしと云。志かれども此三罪は具戒の犯罪の罪なれば道綽の智行兼備たる身上にては趙壁の瑕のごとし。今時の出家の擧足。下足。一語。一點。念の起。不起。三業。悉く犯罪ならざるなきとは雲泥の違なり但無戒の僧の上にては只業罪のみにして制罪なし道綽の御身にては違制罪を加ふる故に反つて今時の僧より重し。併ながら此三罪を懺悔せよと佛勅あるをもつて見れば其外には罪業芥子ばかりもなき事あらわれたり。又曰道綽の三罪は往生の障となるや若然りといは念佛の功德逆惡尙滅す况や其余の罪をや若此三罪實に往生を障へは。經論誠說皆妄語となり。罪惡凡夫は往生の望を絶すいかゞ心得べきやと云にこの義に附て古來よりさまざま説あり。その中に實に往生の障とはならぬども如來抑止門の方便なりといひ又は道綽は上品往生の祝なり故に三罪障となる若下品の往生なれば三罪障とならずといふ是等は他力眞宗の意にあらず又或説に三罪は業事成辨の障にして往生の障にあらず(淨土述聞鈔)此義甚深なり道綽この三罪ありて往生せざるに非ず。只是三昧發得の障なり。若凡夫なれば平世に業成せざれども隨終に見佛し業成して往生するゆゑに更に歎く所にあらず。又道綽は善知識の御身なれば作業の上にも不相應の行儀あれば道俗の手本となるゆゑに隨分つゝしみて如法に勤め給ふべし若爾あらざれば衆生濟度の方便に害あり故に往生の障りには



あらねども如來の大慈方便にて懺悔せよと言ふなるべし  
 道綽禪師は。曇鸞大師面授の弟子にあらず。曇鸞は梁朝の人。道綽は唐の世の人にして年代  
 一百餘歳を隔たり然れども玄忠寺にして曇鸞大師の碑文を見て淨土に皈し。曇鸞を師として  
 尊崇したまふ。是依用相承にして直授相承にあらず。異説には七寶の船中にて曇鸞より。淨  
 土の法門他力の安心を相承し。三國傳來の疑思十念を口授し給ふといへり。高僧傳統紀等の  
 諸傳に載ざる所之。漢人傳ずんば和人なんぞ老らん哉只これ異流の末學牽強附會の説にして  
 取にたらず絶倒するに堪たりと云々

善導大師傳

善導大師は隋の煬帝の大業九年癸酉に生れ。唐の高宗の永隆二年に往生したまふ。されは隋  
 の代に生れ給ふといへども。唐朝に於て化益盛なる故に唐の善導和尚と號す。姓は朱氏にして  
 泗州の人なり(瑞應傳)或は臨淄の人也(新修傳)と云へり。幼くして密州の明勝法師にしたが  
 ふて出家し。常に法華維摩の二經を誦したまふ明勝法師は三論宗にて。法明大師の門人の嘉  
 祥大師と同室の學者なり。一時西方淨土の變相(曼陀羅なり)を見て嘆じて曰何にして質を遺  
 棄に託し。神を淨土に接しむべきと。欣求淨土の心を發し給へり爾後具足戒を妙開律師に受

るに及んで。共に觀經を見て悲喜交嘆じ給ふは。是實に佛道に入の津要なり。余の行業は  
 迂僻にして成じかたし。唯この法門のみ速に生死を超えるの法なり。今まで可様の佛法に逢ざる  
 ことを悲しみ。今と云今宿善到來して。他力の法に逢ぬることの嬉しやと大によろこひ給ふ善  
 導或時心に思惟し給ふは。凡佛の教は隨祝得益にして。祝欲に隨て設くる教なれば若祝法相應  
 せぬときは。勞して功なし。然れば吾に有縁の法を求めんと思ひ給ひ。則ち經藏の中へいり我に  
 有縁の法あらは。授けたまへと眼をどち一心に手にまかせて探り給へは。觀經を得たり。諸  
 は有縁の經にて有そと大に喜び給ひ讀誦し習學し給ふ。爾後道綽禪師の晉陽にて觀經を演説  
 したまふを聞て。貞觀十五年(年廿九歳)に千里を遠しとせすして。道綽の所にいたつて志を  
 展たまふに。道綽すなはち觀經を授けたまふ是觀經は有縁の經なる上に。今また道綽より相承  
 したまへは。因縁の深厚なる事をよろこひ。夫より觀經によつて三昧發得し定中に於て淨土  
 の依正の。莊嚴を拜見し給ふに。出定入定さわりなしと云々。又東都の釋英法師花嚴經を講  
 すると四十遍。道綽禪師の道場に入て。三昧に遊んで嘆じて曰。自恨多年空文疏をたづね  
 て。身心を勞する耳何ぞ期せん念佛不可思議なりと。善導曰經に誠言あり。佛豈妄語した  
 まはんやと。又善導平生常樂乞食する毎に自責て曰釋迦尚乃分衛善導何人ぞ。端居にして依  
 養を索ん。乃至沙彌ならびに禮を受ず。彌陀經を寫すこと十萬卷淨土の變相を畫き給ふこと二



百鋪。見る程の塔廟修理を加へざるはなし。佛法東行より已來。未だ善導の如き盛徳ある事なし(瑞應剛傳の大意)

新修往生傳中に曰唐の貞觀中道綽禪師方等懺を行ひ及び淨土九品道場に觀經を講ずるを見て。大に喜て曰これ眞に佛道に入の要津餘の行業は廻り遠くして成し難し唯觀門速に生死を起るの捷徑。吾これを得ると。是に於て篤く勤精して頭然を救ふが如く。續て京師に至て四部の弟子を驚かし。勸めて貴賤を隔ず彼屠沽の輩に至るまで。普く開悟す。又堂に入ては合掌し跪きて一心に念佛して力の竭るに非ざれば休まず。寒冷にも汗を流し此行狀を以て至誠を表す出ては則人の爲に淨土の法を説て。もろくの道俗を化して道心を起させ淨土の行を修せしむ。まばらくも利益せざるとなし三十餘年廢處を設けず。まばらくも睡眠せず。洗浴を除き。また曾て衣を脱ず。般舟。行道。禮佛。方等を以て身の勤とす。戒品を護持して毫末も犯さず。目を擧て女人を見ず一切の名利心に念を起さず假にも。綺詞戲笑せず。往處争て供養を申。飲食衣服の四事豈なれども皆自納めず。もつて他に施し。好食あれば大廚に送りて徒に供養し。其身は唯麤食をくらひ僅に身軀を養ひて足りとす。乳酪醃醢みな飲瞰せず。あらゆる親施は將て糞紙として阿彌陀經を寫すこと十萬餘卷讀くところの曼陀羅三百餘又破壊せし伽藍および故き塔塔の類ひ。みな悉く修理を加へて營造し。燈をば

し明をつぐと。歳常にたゆるとなし三衣瓶鉢を人に持せず洗はせず。尤始終改るとなし。又諸の有縁を化度して常に自ら獨行し大衆と共に歩行給わず人と連立ゆけば世間の話などありて。行業を修する妨有ゆへなりとぞ。其誓く禮謁を申て法を説を聞。あるひは道場に預りて親しく教訓を承け或は曾て見聞せざれども。其教義を披き尋ねて淨土門に入り。或は展轉して淨土の法門を授り共に修するあり京師諸州の僧尼男女。或は身を高き岸より投じて命を捨又は深き淵に命をすて或は高き樹の枝より墮。或は身を焚て供養する者。畧四方に聞ゆる者百餘人又妻子を捨て。阿彌陀經を誦すると十萬より三十萬遍に至る者又阿彌陀經を念じて。日に一萬五千より十萬遍にいたる者および。念佛三昧を得て淨土に往生するもの數を知るべからず或は善導に問て曰。念佛して實に往生を得るやと答曰汝か念ずる所のごとく汝か願ふ所を遂べしと對へ已て。善導すなはち自ら阿彌陀佛を念じ給ふ。斯の如く一聲したまへば。則一道の光明あつて其口より出十聲百聲光明又此のごとし。善導人に謂て曰此身厭べし諸苦逼迫して情偽變易すると誓も休息なしと。乃ち住する所の寺の前なる柳の樹に登り西に向ひて願て曰願くは佛威神驟もつて我を接し。觀音勢至亦來て我を助け。我この心正念を失はず。驚怖を起さず。彌陀の法中に於て以て退墮を生ぜざらしめよと。願畢て其樹上より身を投じて自ら絶す。時に京師の士大夫誠を傾け。歸信して咸其骨を收め。以て葬る高宗皇



帝其念佛の口より光明出て又捨報のとき精至かくの如きを知り、寺額を賜り光明寺と號すと云々。淨土往生傳中。淨土寶珠集四淨土文五。樂邦文類三。蓮宗寶鑑四。佛祖統紀二十七。淨土指版集下。諸上善人詠往生集一。等みな善導大師の傳を載て。全く上に擧る新修淨土往生傳と同じと云々

諸此善導大師は。前にも語る如く。幼少にして。密州の明勝法師に従ひ出家し給ひ。法華經維摩經を修學し給ひ自ら思やう佛經の教門若干にして道一途にあらず若其機に契はざれば。勞して功なしと。夫より經藏に入らせ給ひ。目を閉手にまかせてこれを探り。我有縁の經をどらせ給へと念じて。淨土の觀無量壽經を探り得給ひ。大に喜び觀經の十六觀法に於恒に思惟して唯西方に心を注給ひ終南の悟真寺に迹をといめ。後に道綽禪師に見えて。専ら念佛一行を自行化他ましく。六十九歳にて寂を示し給ふ。

さる程に善導大師は御師匠道綽禪師より。弘願他力の眞面目を授り給ひ御自身の往生は決得し給へども。觀無量壽經といふは十六の觀法を説たるゆえにさしも名高き天台大師を始として。淨影大師嘉祥大師など云高僧方みな自力の眼より觀經を見損ひ。自力修觀の經と見給ふ故。さぞかし末世の愚痴なる衆生自力に迷ひ。折角に彌陀超世の本願に値ながらたとへば飯櫃を枕にして餓死するに齊しく。空しく生死に流轉せんとを憐給ひて十方諸佛

に證據を乞願わせ給ひ觀經の四帖の疏を作り。古今を指定すると大言を吐て末代濁世の衆生往生の道に迷わざるやうになし給ふ。御一代の製作は觀無量壽經疏四卷。法華讚二卷。往生禮讚一卷。觀念法門一卷。般舟讚一卷。臨終正念訣一卷。勸化徑路修行頌一首等なり。現に世に行はる就中觀經四帖の疏は。第四卷の尾に。自ら感じ給ひし靈相を記して曰。敬て一切有縁の知識等に白す。余は既にこれ生死の凡夫智慧淺短なり。然るに佛教幽微にして敢て輒く異解を生ぜず遂に即心を標し。願を結んで靈驗を請求めて方に心を造すべし。盡虛空遍法界。一切の三寶釋迦牟尼佛。阿彌陀佛。觀音。勢至。彼土の諸の菩薩大海衆及一切莊嚴相等に。南無歸命し上る。某今此觀經の要義を出して。古今を指定せんと欲す。若三世の諸佛釋迦佛。阿彌陀佛等の大悲の願意に稱はば。願わくは夢中に於て上に願ふ所の如く一切の境界を見るところを得んと佛像の前に於て願を結び畢りて。日別に阿彌陀經を誦すると三遍念佛三万遍して。至心に發願す即當夜に於て西方の空を見らる。上の如きの諸相境界悉みな顯現す。雜色の寶山百重千重種々の光明下地を照す。地金色のごとし中に諸佛菩薩あり。或は坐し。或は立。或は語り。或は黙し。或は身手を動かす。或は住して動かさる者あり。既に此相を見て合掌して立て見る。良久老くして覺。覺已て欣喜に勝す。こゝに觀經の義門を認む。是より已後毎夜。夢中に常に一僧ありて來て玄義の科文を指授す。而して更又見ず後時



下書をしおはつて復更に至心に七日を期として日別に阿彌陀經を誦すると十遍。念佛三万遍。初夜後夜に彼佛の國土の莊嚴等の相を觀想して。誠心一に經法の如くす。當夜即ち三具の磔輪道の邊に獨轉するを見る忽ち一人白駒駝に乗來りて前んで勸めらるゝあり。師當に努力て決定往生して退轉することなかれ。此界は穢惡にして苦しみ多し。貪樂を生ぜざれと答て言大に賢者の好心の視誨を蒙る。某命の畢を期として敢て懈慢の心を生ぜずと云云。第二の夜阿彌陀佛身眞金色にして七寶樹の下の金蓮華の上に在して坐し給ひ。十僧圍繞して亦各坐す佛樹の上に天衣かゝり繞るを見る。而を正ふし西に向ふて合掌し。坐して觀奉る。第三夜兩の幢千極て大に高くして。幢は五色を懸く。道路の縱横人を觀ること礙なきを見る。既に此相を見已りて即便休止して七日にいたらず。上來あらゆる靈相は本心。物の爲にして。己身の爲にせず既に此相を蒙りて敢て隱藏せず。謹て以て義の後に申呈して聞を末代に被らしむ。願くはこれを一切の衆生に聞しめて。信を生せしめ。有識觀者をして西に歸せしめん此功德を以て衆生に回施して。悉く菩提心を發し。慈心を以て相向ひ。佛眼を以て相見。菩提の眷屬として眞の善知識とならん。同淨國に歸して共に佛道を成せん此義已に證を請て定果ぬ一句一字加減すべからず。寫さんと欲する者は。一經法の如くせよ應に知るべし。と書置たまへり尤是より前の高僧方の佛の正意に違ひ給へるといふには非ず是は上にいへる如

く。淨影大師天台大師等の高僧。觀經を見損ひ。佛の正意あらわれず。五逆十惡具諸不善の惡人女人を本とし給へる超世の願意をあらはず上品は大乘の善人など云て假にも極惡の凡夫の爲の經とあらざる爲未來世一切衆生爲煩惱賊之所害者。釋迦の正意も隱没して顯れざるを。善導大師古今を指定ましく淨影天台等の謬解を糺し。佛の正意二尊の腸を探りて。注釋したまふなり。誠に善導大師一代の化導を案ずるに其自行をいへば。頭然を拂ふが如く佛前に向ふて念佛したまふには。寒天に汗を流し力を盡して暫くも休まず。三十餘年の間一夜も寢所に入たまはず。帶紐脱て安かに臥給ふとなし。行水の外衣を脱給はず三十年の間日をひらきて女人を見ず一切の名利を離れ假にも戯れの言なく。あだことを言問あれば佛念をとなへ。眠る間あれば稱名相續したまふ。實にその行狀の堅固なること双ぶ人なしと云へり。問云その行狀は全く聖道の行にして。横川大師の外儀の相は異りと言ひ。又男女貴賤悉彌陀の名號を稱ずるに行住坐臥もゑらばれず。時處諸縁も隔なしといふに相違するに非ずや答て云。是は畢竟僧分の行儀なり。尤その頃は聖道盛なるときゆゑに。行狀嚴ならざれば人の信仰なきが故に。先自行を堅固にしたまひ。化他の邊にいたりては龍樹をはじめ各異るとなし。故に我等愚痴身といひ自身は現にこれ罪惡生死の凡夫とのたまふ。往生の信心に於ては更に我等と替ることなし又僧俗とも信の上の行義にいたりては放逸無慚なれといふには非ず



取わけ女は高慢心ふかき者にして。近く時は不遜なり。餘に心易くなすときは敬ひを忘れ御教化までを輕しめ侮る。淺ましきことを思ひ知らさん爲に。斯のごとくしたまふなり。たどへ妻帯の宗門たりとも坊主頭に類被りして。遊女の手を引見舐らしく色町をそめくなど。放逸無慚の耻さらしといふべし。當時すら尙しかり。况や聖道門の威儀嚴重なる時節に。世に出給ひし善導なれば隠につけ顯につけ。深き思めしあると也。斯德行すぐれ給ふゆゑに。前に云新修往生傳にいふごとく。大師の遊行し給ふ所毎に。道俗男女諍競ふて。供養する故に。飲食衣服みち／＼たれども受給はず施主を勸めて大厨へ贈り大衆に供養し。御身は塵品のみに用ひ給ふ又金銀の類は皆阿彌陀經を寫し給ふ紙墨筆等の料に用ひ。十万余巻を書給ひ。絹畫具を調へ極樂の曼陀羅を三百餘も畫き給ひ又寺道場の修葺の料に諸方へ寄附し給ふ。又平生托鉢に歩き給ふを。弟子の人々諫申て。此烈しき勤の上に托鉢までし給ひては御身も續き給ふまじ。是は止り給ひて然るべしと申上ければ頭を振て。いな左にあらざ淨飯大王の太子。三界獨尊の釋迦如來すら常に分衛し給ふ。善導なんぞ居ながら供養をうけんやとて托鉢し給ふ又往還に人をつれ給はず。常に獨歩したまひ連あるときは世の話にまされ念佛に怠るゆへなりとぞ只稱名を路連にすれば大勢連よりも心便りありとのたまふかほとに勸め給ふゆゑに。御教化にあふもの早く淨土へ参りたしと高き所より身を投げ。深き川に身をまづめ。

捨身往生するもの百餘人に及ぶ又妻子をうち捨阿彌陀經をよむもの十万余より卅万遍にいたる。又念佛五万三万より三十万遍を稱るもの數をえらざと記せり。又自ら念佛し給ふには一聲／＼に一轉つゝ。佛身光明を放ちて。善導の口より出たまふ。尤善導の化導深切なりといども。末世の衆生疑ふかきゆゑに。是を晴さん爲に經藏を盲探しになし給ひ。又十方の諸佛釋迦彌陀二尊に證を請給ひ四帖の疏を書給ふには毎夜／＼。一人の僧來り給ひ玄義の科文を指授し給ふ。是則極樂の教主阿彌陀如來の指圖に依處にして善導が了簡にあらず。寫して拜見せんと思ふ徒は。佛經の如くに敬ひ一句一字も増減すべからず。説のまゝ信ぜよと宣まふ。觀經は釋迦の直説。それを阿彌陀如來の御指圖によつて。書たる程にとある。三昧發得の善導の御教化にしていづれに疎はなけれども別して大切なる御教化なり上に云ごとく天台大師妙宗抄を作りて觀經を注釋し給ひ。淨影嘉祥みな注釋を加へ給へども唯十六觀法を説給ふを佛の本意とのみ心得て隱影の實義を知給はず下々品の臨終の十念にて往生すと説給ふは。散亂の念佛にあらず正しく觀念の功德の勝たる故なりといふ。若きからは今日の衆生平生より定水を凝せば。識浪頻に動き。心月を觀すれば妄念の雲覆ふて靜る暇なし。况や臨終斷末魔の苦み。火の車に腰をかけたる者。何ぞ觀念に堪ん。然るに善導大師佛の正意を疑ひ給ひて。汝若不能念者稱南無阿彌陀佛とあれは觀念すると能ずば。火車にて南無阿彌



陀佛と口に稱へよ往生するぞと。善知識の勧めを聞て。如是至心と稱へるばかりの往生ぞと心に受たる一念に往生一定して。具足十念の稱名は。はや往生治定の上の佛恩報謝の稱名。さればこそ下中品には聞已即生と説たまへり聞一念に錢湯變じて涼風となり。爐炭化して光蓋となり。劔の樹は七寶樹林。火の車は金の蓮華。牛頭馬頭の獄卒は。觀音勢至二十五の菩薩と轉じて。花々しき往生を遂るは。十稱の念佛ぞと釋し給ふ現在火車の迎を受し極重の惡人なれども臨終の十念にて往生すと説給ふは別時意の方便にして今直に往生するにはあらず。遠生の結縁なりと攝論家より難ずる故に善導大師會通し給ひて。今此觀經の十稱の稱佛は十願ありて。十行具足せり。云何具足する南無と云は歸命なり。亦是發願回向の義。阿彌陀佛と云は即その行なり。此義をもつての故に必往生することを得と釋し給ふ。凡夫の稱ふる力にあらず本より六字の名號に願行具足し給ふを聞て。信ずる一念に發願回向し給へる大願業力の働なりと明らめ給ふ。前々の高僧の上にとりても古今楷定の疏を著わして佛の正意を顯すものは。善導獨といふとも妨あるべからず此觀經は曇鸞大師へ菩提流支三藏より付屬の經にして。道綽神師安樂集の據も又觀經なれども耽と望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名と恐れもなく突出して。弘願他力の本意をあらわし給ふは。善導一師なり。尤此觀經は大經とは違ひ。自力の眼よりは分り難き經なり凡三部經の說相をいわば。大經は十五夜の月に一

點の曇なきが如く。弘願眞實の月明らかに見ゆる相其に村雲のかゝりて月に曇のあるが如きは阿彌陀經のすがた。眞門の月は見えてあれども。未自力の曇ありて。弘願の月を定散の黒雲に覆れたるが。則觀經の說相ゆゑに。此經には隱彰顯密といふことありて顯說の方は丸く。自力の觀念彰の字となりたる時。その定散の村雲の中に在す弘願の月がちらちらと光を見せて是本法藏比丘願力所成と。四十八願の月影を見せ。念佛衆生攝取不捨と十八願の月眞丸に顯れ。又若念佛者當知此人是人中芬陀利華とらんと影を拜ませたり。全く夜明の月の入際に汝好持是語持是語者即是持無量壽佛名と。村雲はさらりと晴て。南無阿彌陀佛の滿月となりて。西の空に隠れ給ふ。其月の實時を見附たる人は古今になりしに。善導これを明らかに見出し給ふに尤龍樹天親の二大士。曇鸞道綽の二師とて。是を知給ぬにはあらねども明に示し給ふは其中にわけて勝れ給ふ之。論語の中に德行には顏淵閔子騫等と四科を立て書たれども。顏淵閔子騫のみ徳實にて曾子子路等が不徳なりと云へるには非ず。皆々徳は備たれども。就中勝れたる方を取て上たる者なり。往昔釋尊十大弟子の中に天眼第一の阿那律頭陀第一の迦葉。神通第一の目連。智慧第一の舍利弗などいへり。されは舍利弗は。智慧ばかりを具へて神通なきといふにはあらず。智慧ほどには神通を得ざるなり。目連もあなむく神づうを得たるほどには智慧はなきなりゆゑに其中にすぐれし方を擧て第一と稱するなり。大論の四



十五卷目に。釋迦如來無熱池といふ池の邊にて御身および弟子達の本業因縁を既給ふに。五百の羅漢みな其會に列給ふ然るに舍利弗一人參着なきゆゑ釋尊目連に命じ呼來るべしと官ふ佛勅を蒙り烏の飛が如く祇園精舎にいたりて。佛勅の趣きをつけ給ふに。折ふし舍利弗は袈裟を縫ふて居給ひしかば。暫く待給わるべし。此袈裟を調へて行へしとなり目連こゝろ得さらばとて待給ふに。其時うつれども埒あかされば。待遠思はれ手をもつて彼袈裟をずつと撫られければ。忽袈裟の仕立調たり。いざ出來たれば參り給へと急給ふにその時舍利弗。目連の神通を試んとて。一條の帶を大地に落し。其帶を取て給はれ。夫をして同伴すべしといふ。目連何氣なく其帶に手をかけ給ふに。大須彌山の如く。地に引つきて動かず。忽目連禪定に入て大神通を起し上んとし給へども大地震動して動かず。此時如來の所に居たまふ憍陳女何ゆゑ斯は大地の震ひ候やと如來に問奉られしかば。釋尊宣やう。是は祇園精舎にて。舍利弗の帶を上んとて目連が大神通を振ふ故に斯震動すれども。何にして目連が力にて上る事は成がたしと言しと有然ば舍利弗にも斯神通は有といへども。其一分くは當て稱する時は目連を神通第一とし。舍利弗を智慧第一といふが如く何に疎はなしといへども。觀經のうへにて彌陀釋迦諸佛三佛の正意を顯すとは善導大師の御手栴といふべし或問曰。善導大師三十餘年睡り給はぬと大師は爾るべし。但睡眠は欲界の衆生になきこと能はず故に觀經に

唯除睡時恒憶此事とあり。大師の睡眠せざるは機を失するの過あらんか。答て曰く大師の睡眠せざるは勵み勤めて眠らぬには非ず。三昧發得して。常に三昧正受は入定散自在なる故に。自ら睡眠し給はず上二界（色界無色界）に睡眠なきが如し。しかれども欲界の衆生には睡眠欲あり。何ぞ睡ざるとあらんや。こゝを以て大師の往生禮讚に。唯除睡時常憶念といへり。又或人法然上人に。念佛のとき睡におかされて行を怠侍るといかゞして此障をやめ待らんと申ければ。目の覺たらんほど念佛し給へと答られける。甚尊とかりける（徒然艸）又善導大師は目を擧て女人を視給はすと云へり。是別して轉業の過を防ぎ給ふことを明かにす。故に黒谷七ヶ條の中にも此行狀の趣本律の制にも過たりと言へり。問曰大師の女人を見ざるは身過を防ぎたまふばかりか。寶積經に。一見女人失眼功德といひ。縱見大蛇不可見女人といへり若爾らば大師の自行は爾るべし。恐くは化他を失せん。他方本願の正意は極惡の女人を度する大悲の至極を顯はせり。都て女人は百惡長（藥師本願經に出）にして障道の因縁なり。故に經には五障三從のさはりを説（法華に五障を明す大論九十九に三從を明す又超日明三昧經に並に五障三從を明す妙樂の五百問論下二十四丁にこれを引り。又外典の中に三從を明す）人師は十惡を數ふ（南山の淨心戒觀法上廿二歸元眞指下四十九大藏一覽四卅四號並に女人十惡を明す）或は女人は地獄の使能斷佛種子とも



云り。此を以て彌陀の別願。極惡を化すといへども。女人は定めて往生すべからずと疑ふべし。故に別して女人往生のために。三十五の願を立給ふ是則深重の大悲の至極にして女人を捨給わす。爾れば善導大師の自行は恐くは聖道めきたる御ふるまひにして。他力眞門の正意にあらざるべし。答て曰超世本願の不思議重障の女人を濟ひ給ふと理在絶言なり。但善導の女人を見給わざるは彌陀の大悲に違背し。女人を捨給ふには非ず又身業の過を防ぎ自行を慎給ふにも非ず元より彌陀同體の大悲のあらわれ給へる御出世なれば善導の女人を見給わざるは女人を憐み給ふ大悲の説法なり。其故は重障の女人往生するは本願の大悲止ことを得ざる故なり。假令信ありて念佛すればとて女人をよき者と云にはあらず。然るに今時の女人たまた念佛する時は善本修習の思つよく。自力雜善の執情さかんなり。まして知識に親しく近より。得法投機するときははしたり貌にて他の不信者を護り我賢しと云増上慢を起すもの多し。法然上人に戒給へり。此さかしき心よりして安心もかけ。自力定散の機となつて往生せず彼兼好も。女の性はみなひがめり。人我の相ふかく貪欲甚しく。物の理をしらず只迷の方にもはやく移り。詞もたくみに苦しからぬ事をも問ときは言す用意あるかと思れば又淺ましきとまで問すがたりに言出す。深く欺り飾れる事は男の智慧にも勝りたるかと思へば。其こと跡より顯わるゝを知らず直ならずして拙き者は女なりと云々（徒然草）又女人を出家

して誦經念佛し若は受戒持齋せる者は彌慢心を發し。人我を高ぶり無戒の出家を見ては。誘惑るもの多し己か失は願みず。空腹高心して信心は少もなし。されば百歳の老比丘尼たりとも。今日初發心の沙彌の足をとつて。禮せよと佛は宣へり。今時の比丘尼の發心修行は法滅の因縁なるを知らず身を高ぶりて實に淺ましき事なり。毘尼母經の意。女人は心詣ひ曲りて。法器にあらざるとて出家を許し給わす。釋尊の姨母憍曇彌（摩耶夫人の姉きみ也）阿難に近づきて出家を願ひ給へども釋尊許し玉はず其時憍曇彌五の恨を擧て釋尊を恨みたまふ。是によつて如來止事を得ず出家を許したまふ。此時同時に女人多く出家せり。されば如來の正法一千年住すべきを。女人に出家を許すゆへに正法五百年にして滅すといへり。しかれば女人の出家は法滅障道の惡縁とはなれども。三寶紹隆の善縁に非ずかし。尼僧頂きを撫て慙愧すべし故に善導大師は他力還相の大悲をあらわし女人を見給はざる故に諸の女人身を願て慙愧し。實に一代教の中にも嫌われて在々處々にも擯出されたる女人なれば破たる石は再び合するとも。火の中に蓮を生ずるとも女人は永く成佛せず。しかるに彌陀如來超世別願の大悲ふかく。佛智の不思議をあらわして女人成佛の誓を成し給ふ故に。一念發起のところに不思議の願方として往生を治定し臨終の夕には變成男子の姿となり紫磨黄金の屑こまやかに三十二相の形いづくしく忽彌陀大會の中に入り。彌陀同躰のさとりを願わし無上涅槃の佛果を



證せんと。ひとへに他力の佛恩なれば。南無阿彌陀佛くと稱名を喜ばしめん爲に善導の目を擧て女人を見給わざる也。然ば女人たらん者は。吾身の拙く障り重きとを改悔して。佛恩の稱名をよるこぶべし

斯て善導大師一代の行化すでに終り。唐の高宗皇帝の永隆二年辛巳三月廿七日(帝王年代録に出)或十四日(新修傳に出)春秋六十九歳にて往生したまふ。日本四十代天武天皇白鳳十年にあたる(洛東禪林寺には毎年三月十四日善導忌を修す真宗には三月廿七日と定む)

右入滅に付て二説あり。新修往生傳の意は。一時住し給ふ長安の寺院(後光明寺と云)において淨土の變相を寫し給ふに急に催促して成就せしむ。ある人其ゆゑを問へば則曰く吾まさに往生せんとす。住すると兩三夕のみと忽然として微疾ありて室を掩ひ。怡然として入滅し給ふと言へり。又蓮宗寶鑑および新修傳の意は忽ち人に謂て云く此身厭べし諸苦逼迫す。情偽變易暫くも休息するとなし。吾將に西に飯らんとす則光明寺の前なる柳の樹に登り西に向發願し終りて其樹上に於て端身立化し。身を投じて絶すといへり。端身立化とは柳樹の上に立て。合掌發願し終れば。靈神化して淨土に生ず。神已に去る故に尸地に落を。身を投じて自絶すといへり。京都の士大夫歸依仰信して。骨を收めて葬る。高宗皇帝其念佛すれば口より光明の出を知り。又捨報の時精進至誠なることを叡聞し。寺の額を賜は

りて光明寺と號せり。斯の如く兩説ありといへども大權の聖者の入滅は祝縁に隨ふて見を異にす。龍樹の入滅に二説。天親往生の二説。縁に順ふて化を説く。一准すべからずといへり。但捨身といへばとて。今時無智の僧の縊れて死するの類ひにあらず。傳文を見てある(尤善導の在世に京都諸州の僧尼士女或は身を高嶺より投じ。或は深泉に身を沈め或は自ら高き枝より墮。或は身を焚て供養せし者百餘人に及ぶといへり。又長安の屠兒(牛鹿を屠りて産業とする者)京寶藏といふものあり。善導大師の人を勸めて念佛すると。長安城に滿るによつて。人々肉を斷て買ものさらに無し程に。京寶藏瞋て。善導を害せんと欲し。刀を持って寺にいたる。師これを見て西方を指示し給へば即淨土の相を現す。是を見て忽改悔し。一念發起して自ら高樹に上り念佛すること十聲その樹より墮て終る。衆人化佛の天童を引て寶藏が頂門より出るを見ると西方略傳に見えたり。此のことく捨身するもの有といへども。末代の下祝に於ては慎むべき事なり。自害往生。入水往生等は念佛者のよろしからざる所なりとて源空上人深く戒給へりされは生ては念佛の功をつみ死なば淨土に參りなると。安らかに宣へるぞありがたし

諸傳に善導は彌陀の化身なりと云に付て古より二説あり。一には化身とはいへども無而歎有の化生にあらず。胎生をうけて生じ給ふ。諸傳には父母の生所をいはざれども、瑞應傳に



姓は朱氏泗州の人なりと云。新修傳には臨淄の人なりと云へり。二には無而歎有の化生にして。胎生にあらず故に父母生處もなしといへり。志かれども。胎生と云を勝れりとして化生の説をどらず。父母生所を傳に云さるは諸傳にその例多し。又俱舍論に依るに釋迦如來胎生を受たまふは舍利をといめて利益せんためなり。化生には骨なし。志かるに善導は捨身遺命し。骨を收て葬れり此故に化生にあらず母の胎内に宿りて生れ給ふ故に朱氏の子となつて生れ給ふと瑞應傳にいへり物じて善導大師世に出給ふと云は阿彌陀如來は衆生に代りて願行を圓滿し。十方衆生の往生を躰として。正覺の阿彌陀佛となりたまへは正覺の外に往生なく故に一心に彌陀に皈命し一向に念佛して本願に任する時は心安き往生なれども一切の衆生本願非本願の差別もなく。正行雜行を分たず。自力他力の界を辨まへず。此をもつて本願の方は何の煩もなく成じ給へる往生なるを。よしなき自力の執心にはだされ。雜行雜修自力善本を勵みて。空しく生死に止まることを悲み。永劫五劫の辛勞も其甲斐なしと思召。阿彌陀佛同躰の大悲やむことを得ず。生死の園に示現し。煩惱の林に回入し。隨類應化の形を志めし。惡人女人の先達と成て。執土に往生しやすきことを教化せんために出世し給へる御身なれば直爲彌陀弘誓重。致使凡夫念即性と釋して在家も出家も善人も惡人も男子も女人も諸の雜行雜修を振捨て。一向一心に彌陀をたのみ生れのまゝにて念佛せよと勸め給ふこと

なれば無而忽有の化生して出世し給ひては。一切衆生が悛退の思ひを生ずるとなく。中く教化を受まじき也故に生死分段の肉身を受。流轉迷妄の凡夫となりて。自力雜善を捨て一向に念佛して佛恩を喜び給ふゆゑに胎生をうけ給ふなり。又長安城の瀧に。金色の四句の偈あられわれ大師化生せりといふこと淨土安心集の中に引り。是大なる偽にして笑を千歳に残せり。此こと委しくは光明大師別傳の注に見えたり。一旦に言盡べからず志あらんものは彼傳を披閱へし。又半金色の尊形は南無阿彌陀佛の六字を表せり名躰不離の故に。六字即ち彼佛躰也。されは腰より上の墨衣の南無の二字。即我等が皈命の色心なり。下の金色は阿彌陀佛の四字。すなはち助け給ふ佛躰なり。法也報土得生の行躰なり志かれれば凡心佛心機法一體の南無阿彌陀佛を表顯して半金色にて化生し給ふとなん(淨土門口決)

三國七高僧傳圖會震旦之卷終



三國七高僧傳圖會本朝之卷

源信僧都傳

本傳曰 釋源信。姓は卜部氏和州葛下郡當麻郷の人也。父は正親。母は清原氏夫婦に子なし。同郡の高尾寺なる觀世音を祈ること三年。母の夢に僧來て美玉を授ると見て懷妊す。此よりして母舉止必ず禮を正しくし葷腥を食せず天慶五年に生る。天性穎悟風姿凡兒に秀づ。父母甚これを寵愛す。七歳のとき父を喪ひしに。遺言して曰汝必ず出家修道して。わが菩提を助けよと。夫より日來常に是を念じて措かず。或日齋戒して高尾寺に詣て。觀音の前に誓て曰く。我必ず父の遺命を奉じて出家せん願くは大悲照鑒し給へと。夫より日々に詣て。其尊像を拜すること三年。又日々に瓦の塔を作ること。一千基に滿て以て父の追福に薦む。歳九歳にして夢に高尾寺に詣て。經藏の中に入て見るに。許多の鏡ありて。大なるあり。小きあり明なるあり。暗るありて。同しからず。しかるに一僧ありて其鏡を取て源信に與ふ。源信うけて是を見給ふに。小にして而も暗るものなり。源信の曰。我は大にして且明なるものを得んと欲す。僧のいはく但持てかへり横川に至て是を磨けよと宣ふと見給ひて夢覺ぬ。甚怪みて母にかたるに母のいはく。鏡は智慧なり。其明なるものは磨くに及ばず。今汝が幼ふして智慧なし

其小にして暗るが如し。若叡山に登りて心の暗を磨かば。智明らかに發して其思ふ所の考を得べしと。源信聞て喜び給ふ。時に此郷に二流の川あり。南は濁り西は清たり。日々に多くの小兒と俱に其流の傍に嬉戯れ給ふ。かへりし程に一個の僧ありて。鉢を持來りて流に洗ふ。源信の曰其水は穢れ濁れり。清きかたにて洗ひ給へと。僧戯に答て曰く諸法本淨不淨なし何ぞ清濁を論せん源信の曰。既に淨不淨ならば。何ぞ洗ふとを用ひんと言捨て。俛て礫を數ふ。僧愕然たりしが。源信の礫をかぐふるを見て問て曰一より九に至るまで皆つ音あり。唯十ばかりつ音なきは如何。源信曰五の數に二つの音ありと(後に源信の言によりてうの川を津川と云つ)一僧これに肝をつぶして益奇とす故に其父母をよび居所を問ふに答曰幼少にして父を喪ひ唯老母のみあり。家は此より東北の村にあり。貧乏して客を待すといへども。師は世外の人なれば。辱來臨あらば伴奉るべしとて。遂に此僧を連て案内しつ。我家に歸り母に此由を告。僧母に對て曰く。此兒甚だ奇き器量なり後必ず大徳とならん。これを吾山の(叡山のこと)なり此僧は叡山の(大廻萬の行者なりと云)良源の弟子となさんやと。母過し頃の夢を憶合せて大に喜び。我かねて出家させたくねがふ所なり。貴僧よろしく計らひ給れかしと答僧數喜びつ。約して叡山にかへり良源上人に如此々々のよしを告ぐ良源も俱によりこび。人を大和國に遣はしてこれを迎ふ。此時母あたらしき衣を裁てこれを着せて。告て云やう。汝謹て良源上



人に事て修學し。空しく光陰を送るゝなかれ他日學問成就して。名を四海に聞へば。我乃汝を召すべし。若然らざれば是を永の別と思ふべし。務て父母の未來の苦を救ひ拔んば。是汝の力なり。恩を棄無爲に入。是眞の孝行とす汝それ戀よやとて。又一の錦の囊を與へて曰。中に阿彌陀經一卷あり。是は汝が父の常に身を放し給はざる者なり。今汝に授く。是を誦て父の菩提を薦よと。源信なくく是を受て。終に母にわかれて使の人に伴はれ叡山に赴ぬ。斯て程なく江州に着し。比叡山に登り良源上人に謁す。良源見て大に喜び。華々として教授し給ふ。此時始て自ら先の夢を解して。切礎して怠り給ふことなし。十三歳にして剃髮し戒を受て法諱を源信と號す

良源姓は木津氏。江州淺井郡の人也延喜十二年九月三日に生る(最應瑞あり)十二歳にして叡山の理仙に師とし事。法性房尊意に見へて受戒し尋て顯密の秘奥をうけ。早く博學の名を得たり承平五年維摩會に赴き南都の義昭と對論す。始は良源の年少を侮る。後義旨深宏なるを聞て。衆徒みな驚けり。清冷殿に於て法華講を啓く。應和三年八月廿日廿の名徳を召して分て南北互に講問せしむ(南都の法藏と叡山の覺慶と對論して南都勝つ)良源と法藏と對論す。藏負て閉口す一時梵網戒品を誦し。數句にいたつて光口より出。康保三年八月天台座主に補せらる山務を領する事二十年天元四年大僧正となり輦を聽さる。永觀三年正月三日彌陀を唱へ

て滅す年七十四。其容貌道德雄強にして。自ら鏡を把て影を寫して曰く。我像を置處かならず邪魅を辟んと。此によつて摸印して天下民屋の扉に黏る。謚を慈慧と賜ふ。以て叡山中興とす。則ち叡山第十八の座主にして。世に慈慧大師と稱し俗に元三大師と號す右に所謂南都の義昭。法藏。叡山の良源は。時の人は是を三沙門と稱す。然るに三人ともに正月三日に寂す奇なりと云々

偕も源信は學業大に進み。其名世に轟けり時に村上帝の天曆十年六月勅に依て八講師となる。源信いまだ年十五なり機辨泉の湧か如くにして宮中を鳴り動かす。勅命によつて。布帛を賜りて賞し給ふ。源信は時の面目世の聞へ何事か是に如んや。源信母を喜ばしめんと思ひ。彼布帛に文を添て母公の所へ遣わし給ふ。母公文をひらき見給ひ。御衣をいたゞき給ふ事を喜び給ふといへども。源信の名聞利養の意を永く止めて。無上菩提心を相續なさしめんと思ひ。すなわさ返書に云く。御身を出家になせしは。父の菩提を訪わしめ。母か生死の愛河を渡すべき船後とも頼みしに。さわなくて名利を本として。何の用にも立ざる御衣を送給わるるや天眷の榮は母が志にあらず。希ふ所は。名利を捨る事。増賀上人の如くして。能父母を救わん事を呼われ老たり生て此事を見ん事又難からざらんやと。源信これを聞てますく清素の行を篤ふし天祿年中横川に屏居し給ひて。戒節を堅ふし。専ら修學し給ふ。



叡山に東塔西塔横川とて三塔あり其中にて横川を首楞殿院といふ。此に在ける故に楞嚴の先徳ともいひ又其南に別院ありて恵心院といふ。この寺の院主となり給ふにより恵心僧都とも號す

源信一日勸進往生の偈を作りて母公に送り給ふ。正 勸ニ安樂國一 傍 謝ニ生育恩一の句あり。又同士の衆僧とも願を發して。涅槃經を寫すとおのく一卷なり。西塔の實因(當時の名僧之)是を聞て隨喜して自らとも一巻を寫す。是に於て東西の兩塔助寫する者數多にして遂に十五部を得たり。慶讚の日各寫す所の經を以て横川に集る。實因も弟子數十人を率て來りて其會に預る。然るに實因は原來說法に聞ある僧なれば。大衆等おもふやう今日の講師は究て實因たるべしと然るに實因講師の役を辭して源信に推る。源信固く辭して實因に勸む。實因また辭退して云く。師もし座に昇り給はずは。すなはち今日の法事息べし。我も又歸りさらんと。互に辭退して時を移す。止事を得ずして源信高座に昇給ふに。布の直綴布の袈裟にて。その儀貌溫潤なると云べからず大衆等稱して云く。今の迦葉なりと源信まづ此經に値るの喜をのべてみづから感涙に咽び給ふ。坐中みなともに感涙を催さざるなし。實因寺に歸り人に語りて曰。源信の德義よく人の心を感じ動かさしむ吾曹の及ぶ處にあらずと。其推量にたがわず。解行ともに其德あまねく四方にあらわる。大藏經をみると凡五遍。大乘小乗の法門みな其奥儀

を究給ふ。五種法師。四種三昧などいふ。天台の奥儀一として蓋練せざるはなし。其源上人の門下高弟凡七十人就中神足四人あり。尋禪。覺超。覺運源信等なり其中に於て源信は又魁たる者なり。一年伊勢大神宮へ詣で給ひ。七日の間誓を立て。出離の要路を定めし給へと祈り給ふに。七日滿ずる夜の夢に。美しき貴女神殿の扉をひらき出て。つげ言ふやう。出離生死頓證菩提の爲には。末世の要法彌陀を念ずるに如はなしと。此より後別して念佛を精修して。安養に生ぜんことを期す。嘗て六波羅密寺の光勝(空也上人なり)にまみえて問て曰。我極樂淨土を願ふ志深く侍り。往生は遂べくや否やと尋たまふ。空也答て云く。我は無智の者なり。いかでさやうのとをことわり侍らんや。但し智者の申侍りし事を聞て是を案ずるに。なかは生せざらん其故は人六行觀を修して。上界の定を得んと思ふとき。下地は塵なり。苦なり障なり。上地は靜なり。妙なり。離なりといふことを信じて。下地の賤きさまを厭ひ上地の妙なるを願へば其觀念の力にて次第に進みて悲想悲々想ままで至るべしといへり。然れば極樂を願ふも又同じ事なり。智慧行徳なくとも穢土を厭ひ淨土を欣ぶの心切なれば。なかは往生を遂さらんと宣ひければ。源信是を聞て。實に理究り侍るとて。涙をながし掌を台せて飯り給ひしとぞ。空也上人名は光勝未姓氏を詳にせず尾州國分寺に於て薙髮し。沙彌たりし時より自ら空也と稱す。少して佚遊を好み。天下を殆ど修行し過る所の道路多く利濟をなす。劍を荷ひ險



を鑿。石を拾ひて濕にしき。破れたる橋を再興して架。廢たる寺を修覆し。水なき地には井を穿ち。其水必す甘冷なり天慶九年京に入。市中に於て彌陀の名號を唱へて觀化す。人よんで市上人といふ。天曆九年天台のぼり。坐主延昌に従ひて得度し。同五年自ら十一面觀音の像を刻み。六波羅密寺を建てこれを安置す。播州揖保郡峯合寺に住して。一切經を看讀す。又雲林院に在し時。松尾明神來現して空也の衣を假給ふ。嘗て云く與羽の二州は佛の化いたつて少なりとすなはち佛像經論を負て彼にいたり。法を説く化に順ふ者多し。圓融院の朝天祿三年九月逝すと壽七十

永觀元年九月源信年四十二歳はしめて故郷に販りて母公に見え給ふ是より先に數回書を送て販らんことを乞給ふといへども。母公許し給はずして云鳥すら猶その子を思ふ况や人に於てをや。然れども母にひかれて其道業を廢せんことを欲ふが故なりと。是によつて母公を念じ給ふと甚だ切なり。因て思召には久しく音信なし。假令仰に背くとも。一たひは訪ひ奉らざんば有べか<sup>もぞ</sup>。若我先に死せば後悔なんぞ及ばん所詮母の許し給はずとも。何ぞ行かざらんやとて。發足したまふ途中にて母公の書を持來る使あり。其書に疾甚だ重し。師はやく來て臨終の善知識となり給へと有。源信あわたくしく販りて夜に入て宅に着母公に謁へ給ふ。母公且喜び且泣て曰。いづれの日か師を呼で對面せんと思ひしが正に今此時なり。幸に相見るとを得たり。宿

縁の有ならんと源信の宣く念佛し給ふや否や。母答曰く何ぞ敢てこれを忘れん。然るに身心勞れて自警るに力なく。又勸め勉るものなしと。源信即ち念佛の功德淨土の莊嚴を具に説き馨をならして唱首となり念佛し給ふ。母公大に喜び給ひ。聲を勵して俱に念佛し給ふこと凡三百餘遍。身心苦しみなく。安祥として往生し給へり源信の曰嗟呼我をして行を砥しむるは母なり。母をして終をよくせしむるは我なり。是母。これ子。共に善友なり。蓋宿世の契なりと。諸人みな嗟嘆せり。永觀二年十一月往生要集本末六卷を草稿す明年四月全く成就す。善導の釋義を祖述し。助るに經疏の文を以てす。淨土の衆行を叙るといへども肝要は念佛一門に販す又空也の言を憶して。厭離穢土。欣求淨土を先とし給ふ。時に夢中に觀音大士あらわれ給ひ。微笑て金蓮華を授く。毘沙門天寶蓋を捧げてこれに従ふと見給ふ。又一僧の夢に毘沙門天二個の天童を引連て來て告て曰く。源信の製る所の往生要集は一見一聞の備。ことごとく無上菩提を證せん。一偈を加へて世に流布せしむべしと。此僧源信に如此の由を告るこれに依て源信一偈(七言四句)を加へて世に傳給ふ朝廷を始め下方民にいたるまで。風に靡く草の如く其化導を慕ふ。時の人稱して眞の佛復び世に出給ふと言あへり。圓融院の皇后。藤の詮子源信を請じて宣わく。要集の作實に盡せりと謂つべし然れども庸愚の徒猶未だ其趣を會得せず。願くば書にあらわして是を示さば解し安くして利益廣からん。と因て源信定に入こと七日にして眼前に十



界の相を見て。畫工をしてこれを圖せしむ。源信および眞源覺運覺超等おのゝその畫圖の上に讃をせり。もつて之を皇后に奉る。帝及び皇后は喜び給ひて敬覽まし。紫宸殿に安置し給ふ。然るに夜深更に及べは悪趣の苦みの聲喧々として聞事あり後宮の官女達大に恐怖き給ふ。是に因て源信に還して數敬感あらせられしとぞその圖今現に江州坂本來迎寺に藏して什寶とし世に十界の圖と稱す。これ其權與たり

十界とは一に地獄界。二に餓鬼界三に畜生界四に阿脩羅界。五に人間界六に天上界。七に魔聞界。八に縁覺界。九に菩薩界十に佛界（以上十界則ちこれを圖す）

寛和二年正月。源信作るころの往生要集を以て。宋國の台州の周文德によせて贈る。文德これを天台山の國清寺に寄附す則ち當寺の經藏に納む。此經藏の中に。架三段あり。上の架には佛經を置。中には菩薩の論を置き。下には高僧達の章疏を安ず。初に此往生要集を下の架に置しが。いつの間にかは上の架にあり。怪く思ひて是を下せは還り上る斯のごとくすると數回なり。因て僧徒評議をなし。終にこれを上の架に安ず。宋朝の人共に謂て云く此集極めて佛經と相應するゆへにまかあるかと感嘆せり。宋の帝此要集を見給ひて。大に源信の徳を稱して欽慕し乃東に向ひ。日東楞嚴院源信如來と稱し日本小釋迦如來と稱し給ふとなり。時に寛弘三年寂照（源信の弟子）宋國に至るに。帝勅して源信の眞影を見んことを望み給ふ。寂照承て日本に皈

り。源信に如此の由を告。源信延圓阿闍梨をしてこれを寫さしめ。宋國に贈り給ふ。宋の帝つくく敬覽まし。眸子の容子頗る卑し。是は眞にあらざかし。其眞寫なるものをま

ま欲すとて是を還し給ふ。源信その賞鑿を感じて自ら畫き贈り給ふ。帝これを敬覽あつて。嘆して宣はく是れ全く眞像なりとて塔廟を建立して其影僧と要集とを安置し。敬ひ給ふ。正曆

年中宋の朱仁聰舶を汎て日本に來り。越前國敦賀の港に着し。此に泊る此仁聰は博學にして内典外典に通ずと聞及び。源信同門の寛印とつれだち敦賀に至り仁聰に見へ給ふ。仁聰壁に展た

る畫像を指して曰。この婆珊婆演底主夜神は海路守護の爲に持渡る處なり二師知るや否やと問。源信直に筆を採て華嚴經の善財讚嘆の偈を畫の上に書給ふ。其文に謂く見汝清淨身。相好

超世間と書了て後を顧みて。寛印に次を書べしと言ふ。寛印乃ち書していはく。如文殊師利。亦如寶山王と。仁聰さば驚き嘆て云く。二師の賜は大藏經の函なりと。乃ち一の椅子を

設て饗應し。又國産の珍種を贈る長保二年八月弟子寂照復宋國に至る源信天台の法門に廿七

少條の疑問を作り寂照に持せて。四明の智禮法師に決斷を求給ふ。又辟支佛の髮を以て贈る。智

禮此問書を見て大に嘆じて曰意ざりき東域（日本）に斯る深解の人を出さんとは乃答への釋を作

りて還へす。是よりして船の往來する毎に音問あり（此問答の事四明教行錄の四に出）然れども其答の釋。源信の意に稱わすといふ。同三年三月十五日地藏院に在して端座し稱名し給ふに。



忽ち聖衆來迎、感ず。紫雲室中にみち異光目を奪ふ源信これを圖し給ふ。斯て地藏院の傍に一字を建立し。紫雲山と號し聖衆來迎寺と名く。繪像をその中に安ず今尙存せり。又一年不二の岡に於て彌陀佛兩峯の間に現し給ふを見て。これを圖し給ふ今世に山越の彌陀の像といふ。洛東某の寺に源信圖する所の。山越の彌陀の像を藏む。其畫像の上に兩偈を題す。其辭に云く。弟子天台僧源信。正曆甲冬十二月。講圖阿彌陀化導衆生之相。渴仰慈慈發願而言。佛光照耀。聖衆來迎。上品蓮臺。願得往生。上求下化。萬德究竟。□文珠願。□普賢行。久慕西方素無貳。彌陀誘引有時行。光芒新自眉間起。音樂忽教耳界驚。永別故山秋月送遙望淨土夜雲迎。直乘願力吾先去。便導衆生盡往生。嘗て亦迎接會を創給ひ(或は迎講といひ又遼供養とも云)自から法樂に備へ給ふ。これを見聞の隨喜して。おのゝ勝縁を結ぶ。一日華臺院にましくて。此遼供養を修行し給ふに。眞の佛來て手を授るを感じ給ふ源信乃ち密に其像を堂の扉に圖し。且是を版木に彫刻し紙にすりて施し給ふ。此遼供養の佛會今に至て西林院。當麻寺。天橋立等の諸所にて修行せり。原は此源信より始る所なり時の帝源信の高徳を嘉し給ひ。屢恩遇を加へ給ひて内供奉とし。十禪師に補し。法橋少僧都に叙任す(一日天曆十年八講師たりし時僧都に權任す)然れども素より名利をいとひて迹を幽閑にかくし著述をもつて身の職とまたま蓋佛恩を報ずとなり。所謂往生要集

彌陀經略記。一乘要決。要法門。對俱舍抄。因明相達注釋并に疏等凡七十餘部一百五十卷ありておのゝ世に行はる。天台の教法此時盛りとす。さる程に笈を負ひ業を受んと。四方より來る者屬の如く集。寬印紹良嚴久等みな當時の同門たり。海内稱じて惠心院の僧都といふ。覺運と法義を角立す。後世惠心擅那の二流と云は是なり。覺運は泉州大鳥郡の人なり。姓は巨勢氏幼して廩山に上る。天稟奇相にして舌を出せば鼻を超たり、慈惠僧正これを見て必國寶とならんといふ則ち慈惠僧正に事ふ時の皇后の御産を祈らしむるに御安産ありしを以て僧都に任せらる是を檀那僧都と稱す一流を立。源信は原來慈惠僧正の入室の弟子となり。その生質英敏にまします。雪の窓の前には五時八教の奧儀。鏡を掛て明にし。三觀十乘の妙理は掌を指て委く磨給へは僧正も他に異に思召。一山も重くもてなし奉り。宗の法燈となり給ふへきとそ申ける。案にたがはす天台中興の法將として。芳名異朝まで流布しければ。惠心院の一流と稱して万世の龜鑑となりたまふ。或云其源僧正教門をもつて覺運に屬し。觀門をもつて源信に屬すと。これ故あるとなりとぞさる程に覺運を檀那の一流と號し源信を惠心院の一流と稱す三流小異あるがゆへなり。源信嘗て門人に語ていはく。俱舍因明は穢土に於てこれを究め。唯識は淨土を期す宗義は佛果を俟と。彼一乘要決は。衆生皆成佛の旨をあらはし。定性無性の執を破すと。夢に馬狂龍樹



の二大士頂を摩て讚嘆し。傳教大師合掌し告て。吾山の教法今汝に附屬すといふを見給ふ。又八塔和讃を作て。普く諸人に施し給ふ。深義解し易く。遠近これを慕ふて唱ふ。に攝津守源滿仲仕へを致して。攝州多田の別荘に住居す。素よりその性勇敢にして常に遊獵を好み。殺生を樂みとす其息の僧源賢これを諫むといへども用ひ給はず因て源賢。源信にたのみて謀る。源信。覺運。院源と共に多田の別荘を訪ふ。滿仲云く嘗て諸師の道名を聞およびこれを慕事久し。幸ひに今日の來臨。老父がよろこび何事か是にしかん。別室に誘ひ數聲應あり。滿仲嘗て彌陀の像を圖し。法華經を寫し給ひしを出して見せしめ。又釋迦の像を出して併に慶讚を乞ふ。各其意に隨ひて之に讚す。斯て院源講師となつて。法要を論說す滿仲聽聞して忽ち心をひるかへし。只管先非を悔み。終に日を撰んて祝髮受戒せんとを乞給ふ。源信の曰則明日は吉祥なりと。蓋しこれは其志の變せんを慮りて斯言しとなり。乃ち滿仲その言に隨ひて翌日薙染し法名を滿慶と號す。其僚屬數十人これに従ひて出家す次日源信密に覺運。院源と談ひて。迎接會を執行す。滿仲不圖異樂合奏し。聖衆來現するを見て驚き感泣して。地に下つて禮拜し給ふ是によつて信ますく堅く遂に滅罪のために。寺を多田に建給ふ(今の多田院これなり其始は法華三昧院と號せしとぞ)

源滿仲は清和天皇の曾孫にして六孫王經基の子也延喜十二年四月十日に生る實名を以て世に

顯る。曾て鎮守府將軍正四位上陸奥守に任ず。村上帝天德四年寇盜あつて夜滿仲の宅に入。滿仲これを射殺し遂に其黨を索得たり。冷泉帝の安和二年左大臣源高明太宰府の權帥に左降せられ。時源繁延等叛心あり。滿仲ひそかに奏して乃ちこれを捕らふ。其黨甚多く。殆天慶の亂の如し滿仲其弟滿季と共に。藤原千晴及び。其男久頼並に僧蓮茂等を執る。皆其罪に伏す其後貞元二年八月十五日歳六十六にして剃髮し法名滿慶と號して多田の院に居す。長徳

三年八月廿七日卒す年八十六と云々  
將軍平維茂。源信に謁して止觀をまなび。淨教を受け。預め臨終の助念を約す時に病發して既に危かりし程に。使をもつて源信を招請す。然るに源信事あつて赴くと能わず。之によつて迎接圖(菩薩來迎の圖也)を使者にわたへて云く。此畫像に對し身心を修攝せば。是に加ふる事なしと。使者かへりて維茂にまかしの由を告る維茂大に喜び合掌して。像を禮し即逝去すといふ  
平維茂は兼忠が子也伯父前將軍貞盛の養子となり。字を餘吾といふ。故に世に餘吾將軍と稱す武名を東州に赫かす。一旦身を池水に潜め。急遽の難を避け。その寇奥州澤勝の諸任を殺すことを得たり又信州戸隠山に入り妖賊を退治す。其勇銳の氣以て觀るへしと云々

都文士は一條帝に仕へて。位三品に至る。儒行をもつて名あり。常に佛法を勸と甚し。老て重病に悩む其子宰相高明。源信を迎へて父に教諭せしめんとを乞。源信乃ち往て文士に對して謂て云



く。我公に托<sup>たく</sup>たき事あり。故に態々<sup>たて々</sup>來たる所不圖公重病なり。因てこれを言べからずと。文士の曰くいかなる條にや。疾<sup>やま</sup>ども苦しからず具<sup>つぎ</sup>に告給へと。源信云く此頃佛閣を建立せり。公の詩を得て。もつて壁<sup>かべ</sup>に貼<sup>はり</sup>置<sup>お</sup>度<sup>ど</sup>もへりと。文士云く其望たまふは何の詩なるやと。源信云く九品淨土の相を賦<sup>よ</sup>せんことを欲ふと。文士の云く。我さらに其相を知らず。粗<sup>ぼ</sup>その旨を語りたまへと。源信則<sup>つひ</sup>詳<sup>こま</sup>かに逆惡往生のおよひ因果應報毫髮も錯<sup>たが</sup>はざるを説く。茲<sup>こゝ</sup>にいたつてさしもの文士も忽ち邪<sup>よこしま</sup>をひるかへし正<sup>ただ</sup>に飯<sup>い</sup>し。終に念佛して逝<sup>せい</sup>去<sup>き</sup>すと云々

少内記慶保胤は文に於ては當時雙<sup>なま</sup>ふものなし。寛和年間出家して法名を寂心と號<sup>がう</sup>す。源信に就て西方淨土往生の要決を受。一日參坊して師に謁<sup>まを</sup>んとするに源信其時水想觀に入給ふ。是によりて。齋の一室一圓に變<sup>へん</sup>じて水となる。寂心<sup>しやくしん</sup>まばくあやしみ傍<sup>かたわら</sup>に有あふ枕をとつて彼水中に投こみて飯<sup>い</sup>りける。翌日又寂心參りて師にまみゆ源信曰く我昨日水想觀に入とき。汝水中に枕<sup>まくら</sup>を投<sup>な</sup>ぐ。其まくら我胸に中て痛太し。今又水想觀に入べし。其枕を取除べしと。結<sup>けつ</sup>迦<sup>か</sup>趺<sup>た</sup>坐<sup>ざ</sup>して定に入たまふ。容漸<sup>ようぜん</sup>に滅<sup>め</sup>て室中一圓の水となり稍<sup>やが</sup>て彼まくら浮<sup>う</sup>ひ出たり。寂心直に取除く。源信次ひて本身を顯<sup>あら</sup>しいまは痛<sup>いた</sup>さりて快<sup>こころよ</sup>しと言へり。如是坐禪<sup>ざぜん</sup>禪法にも自在を得給へども自力の成<sup>じやう</sup>じ難<sup>がた</sup>きとを悟り予が如き頭魯<sup>くわんろ</sup>のもの。豈敢てせんやと宣ひて。西方の往生を願ひ給ひ。一切の群生を勸<sup>すす</sup>め給ふ。眞如觀<sup>しんじやくわん</sup>を修<sup>しゆ</sup>するに。文珠菩薩身<sup>もんじゆぼさつじん</sup>を現して。實相<sup>じやくさう</sup>を南溟<sup>なんめい</sup>の濱<sup>ひん</sup>に説給ふ。又源

信の道德高くして。普く神明感應あり就中吉野山に詣給ふとき權現<sup>ごんげん</sup>巫<sup>まじ</sup>に託<sup>たく</sup>して法義<sup>ほうぎ</sup>を開示し給ふ。源信宗儀<sup>しゆんしゆぎ</sup>を問給ふに一々具<sup>つぎ</sup>に對<sup>たい</sup>ふ。又加茂の神祠<sup>しんし</sup>に詣給ふに。深更に及び明神戸帳の中より。和歌<sup>わか</sup>の下の句を吟<sup>ぎん</sup>じ給ふ。其句に

「常<sup>つね</sup>なき世<sup>よ</sup>には心とむむる 源信とり敢<sup>あ</sup>ずその上の句を繼<sup>つぎ</sup>ていは、  
「月花<sup>つきはな</sup>の情<sup>なさけ</sup>もはてはあらばこそ、此<sup>この</sup>ときあら面白<sup>おもしろ</sup>し」と篋<sup>か</sup>の中より。嘆<sup>たん</sup>賞<sup>しやう</sup>ましますこそ。外に聞えしを。寂心かたわらに有て共にこれを聞しと也

又西海道<sup>さいかいだう</sup>を巡<sup>めぐ</sup>りて名山<sup>めいざん</sup>に登<sup>のぼ</sup>り。靈窟<sup>れいくつ</sup>を探<sup>たづ</sup>り給ふに。神人<sup>しんじん</sup>影<sup>かげ</sup>のごとく從<sup>したが</sup>ひ道路<sup>だうじゆ</sup>を守護<sup>しゆご</sup>し給ひ或は深夜<sup>しんや</sup>に獨坐<sup>どくざ</sup>して法義<sup>ほふぎ</sup>を思惟<sup>しゆい</sup>し給ふに。證文<sup>じやうぶん</sup>を尋<sup>たづ</sup>んと思召<sup>おも</sup>召<sup>め</sup>は忽火<sup>こつか</sup>來<sup>き</sup>て机<sup>つくえ</sup>の上をてらす。其餘<sup>その他</sup>あまた冥應<sup>めいおう</sup>あれども。匿<sup>かく</sup>して語りたまはず

寛仁元年源信疾に罹<sup>か</sup>り給ひて。念佛<sup>ねんぶつ</sup>まばらくも怠<sup>おこ</sup>り給ふことなし。隣寺<sup>りんじ</sup>の僧夢<sup>そうむ</sup>に金色<sup>こんしき</sup>の付空<sup>ふくう</sup>より下給ふ。源信合掌<sup>がうじやう</sup>し微笑<sup>びごう</sup>てこれと語り給ふと。又或が夢に源信蓮華<sup>れんげ</sup>の上に臥<sup>ふ</sup>し給ふ。其傍<sup>かたわら</sup>に數<sup>あま</sup>方の蓮華<sup>れんげ</sup>を生<sup>な</sup>ず。人有て問曰此蓮華は何の用なりやと尋<sup>たづ</sup>るに忽空中<sup>こつくう</sup>に聲<sup>こゑ</sup>あつて云く。これこそ極樂淨土<sup>ごくらくじやうと</sup>よりして。妙音菩薩<sup>めうおんぼさつ</sup>の來現<sup>らいげん</sup>し給ふ所の蓮華<sup>れんげ</sup>なり。當<sup>ま</sup>に西に向<sup>むか</sup>ふて去<sup>い</sup>るべしと。往生<sup>じやうじやう</sup>の二三日已前<sup>にじさんじついぜん</sup>より。病惱<sup>びやうなう</sup>ごとく治<sup>ち</sup>して身軀<sup>しんく</sup>平日<sup>へいじつ</sup>の如し。一旦院内の諸衆<sup>しよしゆ</sup>を召<sup>め</sup>て告<sup>つ</sup>て云く。今生<sup>こんじやう</sup>の相見<sup>さうけん</sup>今日限<sup>こんにちかぎ</sup>なり。宗教<sup>しゆきやう</sup>に於て疑<sup>ぎ</sup>わしき事<sup>こと</sup>あらば。是<sup>これ</sup>を問<sup>と</sup>ひて決<sup>けつ</sup>せよとさる程<sup>ほど</sup>に。



大衆且問且泣。源信一一に辨釋し給ふ。既にして氣息疲れ給ひて、大衆を退かせ。獨上足の弟子たる慶祐を留めて謂て曰。我一乗の善根事理の功德を以て。極樂世界に回向す。而して今二天童降りて告て曰。我は彌勒菩薩の使なり。師は法華を持して善一乗を解す。此功德を以て當に天宮に生ずべし。よつて數万の天子拜して迎んとす。故に我等先これを報ずと。われ答て曰く。兜卒天に生ぜんと希はざるに非ずといへども。我平生の志願は彌陀の佛國に生ずるにあり。冀くは彌勒慈尊の力を加へて我を西に往しめ給へと。天上にかへり我願意を申上給へと。是によつて天童空に昇去。忽ち觀音大士來現し給ふ是我素よりの意を失わさる所なり。汝よく是を記せよと有ければ。慶祐涙をなかし隨喜す。源信すなはち定印を結んで端坐し。而善圓淨如滿月の偈文を唱へて念佛して往生し給ふ此歲（後一條院寛仁元年）六月十日寅時なり。壽七十六（僧と成給ひての年間六十四年とぞ）衆徒悲み號ぶ聲。寺院を動かすばかりなり。時に天の音樂空中にひいき。異香四方に薫じ。或は音樂の聲西より來り。あるひは東より西に去るを聞く。草木みな悉く西に靡く源信嘗て三井寺の慶祐法師に親しく談ひ。互に先達て往生するもの必ずその生るゝ所を告べしと約したまへり。此曉慶祐後夜の行法をつとめんとて。堂の椽側に出て阿伽の水を營みたまふに。忽ち源信白雲に乗じて告て云く。我は是故佛靈山の聽衆化縁すでに盡て今本土に還ると見る（一に我は本極樂久住の大士化縁已に歸て本國に還歸すと或は傳ふ

是源信の辭世の頌也と）因て使を横川に遣し源信を訪ひ給ふに。師すでに今晚命終せりと。其後一時楞嚴院に於て往生要集を講ずるに。夢に神僧の形を現はし告て曰く。我は是源信今極樂界に新華聚菩薩と名づく。汝要集を講ずる隨喜に勝ず。故に來て告といへり。抑源信若年より淨土の業を修して暫くも懈らず。自記して曰く一生の念佛總計二十俱胝遍と。弟子その記を遺れる篋の中に得たりと。又常に佛像を彫刻し。或は畫くこと數へがたし。又千躰佛を造りて諸國に頒ち安置すること凡三十八ヶ所あり其餘傳へ持もの殆ど海内に遍しと云々

者又往生要集は始て厭離穢土欣求淨土の旨を志めし。菩提心を勧め給ふ故に前にいへることく。十界の相を始にあげ。次に極樂の往生に就て。十樂を擧たまふ。されは源信の在世に於ては。圓融帝の御后藤の詮子御所望によつて。地獄餓鬼畜生等の形勢を繪にあらはし。慈覽にそなへ給ふに帝をはじめ奉り局方にいたるまで。拜見まし御感のあまり。紫雲殿にかけおき給ふに毎夜深更におよんで。地獄の責苦餓鬼のくるしみ。各聲を發し。宮中の諸人肝を消し魂を失ひたまふ。故に惠心院へ返させ給ふ。まことに厭べきは三界六道の分野なり故に經には三界安きとなし猶し火宅のごとしと説たまへり。三界とは地獄。餓鬼。畜生。修羅。人間。天上。是を三界六道といふ。又穢土ともいふ其中に人間天上は善趣とし。地獄餓鬼畜生修羅を四惡趣といふ。尤厭離るべき所なり。此故に集にまづ八大地獄を始めとして。十六の別處に至るま



で。委しく是を示されたり。六道生死の人間界は隔生即忘の故に前生のとを知らず。未來又尙知るとなきか故に動もすれば有無の二見に墮し。或は己がきらざるを以て佛説の三世の因果を信ぜずして。徒に悪業を造りて。空しく三途に沈む。佛これをわはれみ給ひて慙に教へ大經には現に王法の牢獄あり。此世に今眼前に罪を犯す時は。王法これを免さず。火罪斷罪等あるにあらざや。顯明之罪人得而誅之。陰伏之奸鬼得而誅之と現に顯たる罪は人の誅する所なり。竊に公の責にかゝらざる心口意の業は己が魂よく知りて。未來の誅を受。皆人の知る所に非ず。公に牢獄をかまへ。征罰の律を定めて待給ふには非ず。尙善人を入る牢獄もなく。又罪なき者を行ふ征罰もなし。皆是自業自得にして。自ら作れる牢獄。みづからなせる征罰ならざや。此理をもつて來世の獄苦の遁れ難きを知れど。佛は意を苦しめ。教諭まします。是を以て源信の其佛語に依給ひ。多くは正法念經の意によりて。六道の苦相を具に示して。厭離穢土を勸め給へり。志かるにわれら若し厭離の心を起すといへども。自力修道は源信尙及びがたし。是以て往生極樂の教行は濁世末代の目足にして。道俗貴賤誰か飯せさらん。偏に彌陀の誓をたのみ。専ら念佛して極樂往生を願ふべしとなり。誓とは弘誓といふこと。廣普緣名之爲弘。自要誓其心一名之爲誓と釋して。第十八の願の十方衆生は弘字の意。善人惡人男子女人。かたちはいかなりとも。心は何程淺ましくとも。我淨土に生れさせずは。河

彌陀とは呼れまじと仰られしが。廣普の緣といふもの。誓の字は自要誓其心一四十八願一一に此通を成就せずんば。法藏比丘にて朽果べし。此願満足せずんば阿彌陀と云佛には成へからずと誓給ふを誓といふ。その不取正覺の言は四十八とも有といへども若不生者の言を置給ひしは第十八願ばかりにして。餘の四十七願は此十八の願を信ぜしむる爲の。欣慕の願にして。若不生者不取正覺。我誓願を信じて。我名を稱ふるものを極樂に生れさせずば。阿彌陀と呼れまじとある肝心の誓約なり故に第十八願を押立て勸め給ふなり。尤源信僧都は。天台の宗風を身に觸給ふといへども化他の爲には念佛を本意とし給ふ。故に其宗風を改めずして。念佛往生を勸め給ふ。則源信僧都は極樂久住の菩薩にして還相回向の出世にまします。自行といひ化他といひ。行住坐臥に他事なく念佛して往生極樂の思ひ常に絶ず。此をもつて往生要集に云く飢て食を思ふが如く。渴して水を追が如く或は頭を低て手を舉或は聲を擧て名を稱ふ。外義は異なりといへども。心念常に存して念々に相續し。寤寐に忘るゝと莫れと言へり。寤寐とはねてもさめてもなり。されは源信は出離生死の一大事を。心懸ること行住坐臥に油斷なきゆへに。一時楞嚴院の下部。山より薪をとりてかへり來るに對て問給ふは此僧は此たひ極樂往生すべきかと言ふ。下部こたへて云すやうは問へき者に物を問は尋常のならひにて候ふ。われもし彌陀の親類にてもあらは御坊の往生極樂をば知り候わめと申。源信言わく。されはわれは



出離を一大事とおもふより。心ならずして問しなり。汝が申處もつとも道理にこそと言へり。次の日下部山へ行ずして有りければ源信云く何とて汝山へは行さるぞと有ければ。けふは雨がふりそふに候ふと云ふ汝は昨日我往生を問ふ。彌陀の親類ならぬは知らずといへり。今は雨もあがるに雨ふるべしとは龍王の親類にて有かと言へは。下部されは候ふ。愛宕高尾の峯に雲のしるをもつて雨のふるべきを知り雲のかしらざるをもつて雨の降まじきを推量せり御坊も所によりて後生を御知り候へと申けり(淨土厭欣抄)實に下郎の言も取に足れり。源信斯の如く出離生死の菩提心ふかくまじませば。賤き下部にも往生を尋ね。または所々にて辻占などを聞給ふと常にして西へ傾く月に往生の心いやましになり管絃絲竹の音に。來迎の音楽を思ひ心を澄して常に念佛し給ひける

續拾遺 浦やましやかなる空の月なれば心のまゝに西へ行らむ 源信  
新拾遺 夏ころもひとへに西を思ふ哉衰なく彌陀を頼むみなれば 全

一説に源信僧都隱遁の後名利の二字を大字に書て。居間の壁にはり常に禮拜したまふ。人との故を問ふ。僧都云我名利の修學を好みて晝夜怠らす。學ひける故に遂に出離の難きとを知り。名利は怨となるを辨へしにより斯道心堅固の身となれり。爾れば名利は恩極めて重ければ。常に禮するなりと言へりとぞ。又西行法師の撰集抄に云惠心僧都横川にて御身没ける

に。胸の間に青蓮華三本侍りけり 忝なくも。此事世に聞わしかば。君より彼蓮華を召れけるに。北嶺の衆徒詮議して進らすまじき由。固く辭ければ。されは一本奉れと命下さるゝ時。學徒心得て一本を進らせてけり。残り二本文珠樓に籠侍りぬ。君の召れたる蓮華は。御堂の大殿(道長公)は帝の外祖にていまかりける程に其御方へ傳りけるを。宇治殿(頼道公)の御代に。平等院の寶藏に納められ侍りけりといへり。實に有がたき例なり。是僧都平生往生の信心淺からず一生不退に稱名し給ひしにより。佛智回向の御慈悲の顯たる也。されは此界一人佛名を念すれば。西方に便ち一蓮生ず。但一平常に不退ならしむれば。此花還て此間に到て迎ふといへり法照禪師は彌陀の化身。善導の後身なると天下に知らざる者なし。其人此事を説たれば。信するに堪たり。又蓮は佛座にして法なり心は祝なり心に蓮の生ずるは。祝法一鉢の佛智の顯はれたるなり。

源信僧都自畫自讚の文にいはいはく

三惡道を出て人界へ生をうくるとは大なる歡なり。身は拙なけれども畜生には劣らまし。家は貧しけれども餓鬼には勝るべし。思ふこと叶わずとも地獄の苦にはくらぶべからず。世の住うきは厭便なり。信心淺けれども本願深き故往生疑なし。妄念は本來凡夫の地躰なれば妄念の外に心はなきなり臨終の時までは一向妄念の凡夫にて有なりと思ふて。念佛すれば



淨土に參へし。蓮臺に乗する時にころ妄念をひるがへして悟とはなるべし。妄念の中より申出る念佛は濁にうまぬ。蓮の如くにて往生決定疑なし

三國七高僧傳圖會本朝之卷横川終

○續日本紀云元明天皇和銅六年。割備前六郡始置美作國云云

拾芥抄云。用野。苦南。苦北。吉野。加三。四郡。爲三十一郡云云(今無用野郡)英多。吉野。勝田。南。勝田。北。桑南。桑北。苦東。苦西。大庭。真島。當國

一宮中山神社(苦西郡にあり祭神大己貴命貞觀十七年四月神階正三位)

同二宮高野神社(同二宮村にあり祭神鷓鴣管不合尊延喜式神名帳に出づ美作國十一座の一)

攝社漆間神社(本社の傍にあり祭神神宮立石氏の祖神なり是則漆間の元國の先祖の靈神を祭る所なり委は立石氏の事記に詳かなり)

源空上人の傳にいわく神護太夫元國は當高野神社の大宮司なり或は神戶太夫ともあり兩名とも大宮司のとなりと云立石氏はもと豊後國立石の住人なり後漆間を領するをもつて家名とす

當社高野の神境は作陽最第一の勝地なり。前に飛泉ありて。白浪あだかも馬の駈るか如く。或は淵にとまり。堰高く浪打てゆる音喧しく松村に響けり。後は檜杉の大樹鬱茂して森々たり。神門は飛驒の匠の造るところ門守の立像は頗る古作にして幾世といふとをしらす。右大將頼朝卿の時。梶原源太景季普請奉行として當社を修補す。後世尼子。毛利。赤松。森等の家々より再興有(古は社領八十石ありしと聞ゆ)馬場條長くして左右に櫻の列樹あり。傍に雲



梯杜の古跡ありて千歳を経たる棕の大樹繁茂し左右に莖りて下枝に杖し。恰も生花の如し根に石の玉垣を造りし碑石を建(森家の儒臣江村俊幹の文なり慶長五年と鐫す)此地近世迄は大樹陰森として晝といへども冥々たりし。是れ雲梯の杜の古跡の證なりとぞ。樹下に小池あり(万葉集に菅の根を詠し古跡也)大鳥居の額は。高野。大明神の五字二行に書す弘法大師の筆なりとぞ(弘法大師在世の時社頭廢せしを中興有しと云)南方廣く久米の更山をみわたし。右手に嵯峨山ありて下に大堰あり。幾ど都の嵯峨に彷彿たり。河下に誕生寺(源空上人誕生の舊跡なり稻岡の庄柄社村にあり寺領五十石の伽藍なり)に至る横渡り有。河上の淵に男岩女岩といへる雌雄の靈石あり。男の方は龜頭の如く陽根に似たり。女岩の方は少し低く陰門に似て男岩に隨ふが如し。満水るときは折々隠るゝことあり。此淵にのそみて天王鼻といへる地あり。いにしへ後鳥羽院此所より久米更山を窺まし〜て御製ありし名所なり。又此河の水源は伯因の國界なる高山より出とぞ下は十八里の間流れて備前國金岡に出て海に入。又馬場の鳥居前より十八丁東には古松左右の街に連々として菅細手と號す。津山の城下の入口也。社頭の西二十丁計に院の庄といへる地あり。元弘の亂に後醍醐天皇隱岐國に遷幸の時行宮の古跡にして。所謂備後三郎高德志を官軍に通じ。此行宮に潜び入。庭上の櫻樹の皮を研りて。二聯の句を書て云く。君莫忘句踐。時非無范蠡。而して其志を顯すと云云其

古木枯朽て。後世尙裁つぎて世々に榮へ。晩春の頃爛熳たり。且つ傍に碑石を建つ。(森家の儒臣江村俊幹の撰なり)○此等の條はこの巻にかゝらざる説話なれども古をしのぶ癖により餘紙にまかせて記添のみ。看客疑惑すべからず

○本朝孝子傳云。貞觀年中美作國久米郡の人秦豊永。天性孝順。幼にして能親につかへ親死るの後常に墳墓を守る。位三階に叙し課役を蠲き門閭に表し衆庶に知らしむと云々。案ずるに源空上人の母秦氏の祖是ならんか



# 三國七高僧傳圖會本朝之卷本

## 源空上人傳

本傳曰。釋源空姓は漆間氏美作國久米郡稻岡の庄の人なり。父は時國母は秦氏。其子なきを以て共に佛神を祈る。母の夢に剃刀を香と見て覺て妊とあり。是を夫に語る。夫の曰汝の妊とて必男子にして後。帝の戒師となるべしと。母則ち心を佛乘に皈して。口に齋葷を斷て身を慎み。長承二年四月七日。午時に生る。其時天より二の幡降くだりて其奇瑞を呈す。頭打して穢あり。眼黃にして光あり。性世の見と異にして。小兒の戯を喜ばず。起居舉動尋常ならず動もすれば西の壁に向ふ癖あり

一説に云。元祖法然上人は。美作國久米南條。稻丘の北の庄（一書云稻岡の庄柄社村）の人也。父は廳官左衛門尉漆間の時國。母は秦氏の人なり。抑時國の先祖を尋るに右大臣元光より六代の孫。式部大輔元俊。陽明門（一書に陽明院とあり誤なり）にして内藏人頭兼高を殺害せし罪科によつて。美作の國へ配流せらる。爰に當國の廳官神護大夫漆間元國一人の女子を持。彼婿として男子を設る重國と號す。其子を親國といふ。其嫡子に時國と號て外祖の家をつぐ。彼時國の先祖は流人として所帯なしといへども。財寶乏しからず眷屬室に滿て繁昌

す。爾有といへども。歳すでに三十に餘きて一人の子なし一時時國妻。女に相語て曰。我一人の子なし一期つきてのち後世を訪ふものなし。又其跡の絶なん事の悲しさと云ければ妻女自らも此ことを歎き候。おからばいかならん。遊君遊女をも相語らひて。君達を設けたまへ自乳母して育奉らんといふに。時國いはく夫は然りといへども。同くは汝か腹に設てこそ二人の中に育みたけれど。妻の云くさらは昔より今に至るまで。佛神に祈ることの叶へばこそ物語にも傳ふらめ。勝尾寺の勝如上人横河の惠心僧都。共に祈て設給へる鍾愛の子ときけば。我その悲願に漏べきに非ずとて夫婦心を一にして。同國菩提寺といへる山寺の救世觀音に詣て。一七日の祈願をこめ。丹誠を抽んで祈りける程に。七日滿する夜の夢に貴僧忽然とあらわれ。大なる剃刀を妻女へあたへ。是を飲べし必子を設ること。告給ふにより。危きなから口を開きて。刃を香と見て夢さめしが。是よりして懷妊の身となりしかば妻女は時國にねがひて。新造の別室に引こもり。日毎に沐浴し新しき衣を着し。身に香水をぬり。口に生息もの五辛の類ひを食せず。精進に身をつししみ。月盈て長承二年四月七日午剋。母公なやむとなく。安くと男子を誕生したまふ。此とき後苑に大樹の棕の木ありしが天より白幡二流降下て此棕の梢にかゝり紫雲たなびき館を覆ふ。鈴の音天にひびき白幡赫さわたり七日を経て白幡天に昇り紫雲漸に去ぬこそ。此棕の大樹星霜を経て風に傾き終に倒るといへ



ども。異香常に薰じ奇瑞絶るとなし。人これを崇めて佛殿を建て誕生寺と號し。御影堂を造りて念佛怠ることなしと云云

昔應神天皇御誕生の時は。八流の幡ふり下る其故に八幡大菩薩と號す是本朝に入正道の弘ま  
るるし也とそ。入正道とは。正見。正思惟。正語。正業。正命。正精進。正念。正定  
等なり。爰に上人誕生の時しも二流の幡くだりしは。後年に佛教を難行道易行道と二に分た  
まふ前表ならんかと云々(正源明義抄の大意)

又一書に曰く彼時國の先祖は。仁明天皇の後胤西三條右大臣の末孫。式部太郎源の年。陽明  
門にして藏人兼高を殺す。其科によつて美作國に流さる。此に當國久米の押領使。神戸大夫  
漆間の元國が娘と契りて男子を生せしむ。元國男子なかりければ。彼孫を以て子として家を  
嗣しむる時。源の姓を改めて漆間の盛行と號す。盛行の子重俊。重としの子國弘其子時國な  
りと云(前の説に大同小異あり)

上人幼名を勢至丸と號す(或は三徳どのと名づくと云々)二歳になり給ふ秋。七月十四日善導  
大師遷化の日に當つて南無三寶ととなへ給ふ。そも檟椶の中より竹馬に鞭を擧るまで。更に泣  
號給ふとなく。恰成長の者の如くにして頗る性質聰明。やゝもすれば西の壁に向ひて默然と  
しておはします習あり。天台大師の幼き時の行狀に違はずとなん。さる程に翠帳紅圍の中に貴

み。松風蘿月のもとに仰ぐ。桃李万歳の春をむかへては萬花を折て膝の上に敷れ秋帳千年の意  
のまへには明月を詠じて夜を明したまふ。かくていつしか勢至丸七歳にならせ給ひ。小弓の遊  
びをし給ふにも。常の稚兒には遙に勝り。その外の遊戯悉く他超給ふにつき父母の鍾愛一かたな  
らずおはしける。此に當稻岡庄の預所に。明石源内武者定明とて白河院の北面伯耆權守源長  
明が嫡男あり。其身は堀河院の瀧口の武者たり。然るに漆間の時國は。聊わが先祖を慢するの  
心ありて定明に従がはず。對面せざりけるほどに定明深く之を恨み終に保元七年春三月十八日  
の夜定明五十人ばかりの士卒を従へ。時國の館に討入たり。折ふし爾るべき勇士は皆他に行て  
禦ぐものもなく。以下の雜人は逃去て影だにも見えす。時國ひとり起あひて。小袖の端折太刀  
ぬさかさし。對ふ敵と散々に戦ひけり。敵は八人此方は一人變暗が猛勇と叶ひ難くを覺へたり  
然れども王莽が街をかまへ。藤山が威を震戦ひければ前に進みし三人を。忽ち斬伏たりしか  
は。此ありさまに辟易し。しばし後に退きたり時國も數ヶ所の疵を蒙りて。殆と危ふく見ねたり  
ける。此とき勢至丸は九歳なりしが母諸ともに篋の中に匿れて。手馳し小弓をもつて父の敵  
とねらひつゝ。其夜の大將たる武士を射るほどに過たす眉間に中る。小事なれども痛手といひ  
其疵よりして計策の露れんとを恐れて。即時に此を引退く。是に依て從兵等も共に從ひ引しか  
ば。勢至丸母に對ひ敵ははや引ぬと覺へ候父の安否を伺ひ奉らんと。内に蒐入尋れば。豈料ん



や父は敵五六人を討とめて。敵の上に伏たりける。然れどもいまた事きれず。苦き息の下より。今一回汝を見まほしと。思ふ心を命として。今まで存命ありつるそと涙ながらに語るにぞ勢至丸は涙にくれながら。今夜不意に討入し敵は見知りて候といへば時國大きにおどろき。我らに暇と老らざる敵を汝は何ゆへまりたるぞと勢至丸こたへて曰證に手を負せ候ふなり。是は白河院の北面伯耆權守長明が子。明石の源内武者定明にて候ふと時國聞て諸はと黙頭かしこき汝が行状かな。是につけても今老はし世に存命て有なば。成長の後を見んものを露の命の消なんと殘あしやと涙をながしかきくとき給へば集り來れる從類眷屬。とも袂を絞りける。さる程に勢至丸は親の敵を討ばやと勢ひ猛く出給ふを。時國これをとめ汝は親の敵とおもひて。定明等を討とらば。血で血を洗ふ理り。本の血は落るとも今の血又染べし。時國が定明等に討れんと是過去の因縁なり。彼を親の敵とて討ば又汝が身に來らんこと一定なり。されば生死窮りなく。輪回たゆること有べからず。定明を討んと思ふとゆめく有べからずと諭し給へば。勢至丸は只管に涙にくれておわしける。此に時國の舍弟に奈良本の金吾時貞といへる有て。斯と聞より馳來り此形勢に齒がみをなし。勢至丸に對ひて諫めて云やう此場及ひ何にして敵を討たでありつるそと噴あらしき面色に。勢至丸答て云く多門天の吠戸羅城。入對威王が无育城たりとも。父の強こもりたりと承らば。討むかふへく候へとも。父の制止の重ければ力なく候と

て。又も涙にくれたまふ。貞時は立上りさらば汝は來るべからず。我は是より打立べしと。二百餘騎の兵士を相具し明石が館に押よせつ。関をとつと擧たりける然るに何の音もなく南の庭より煙たちのぼり物おともせで見えしかば。其邊のものに事のよしを尋れば。明石どのは今夜頼死せさせ給ひて只今茶毘せられ候とて。皆々愁にまつみ給へりと聞ゆ。時貞即時に内に入て見まわせば棺の火も未だ廻らざりしかは弓にて箭をはねのけ棺を破りて死人を見れば。眉間に射られし矢疵あり。諸は此一矢にて明石は死せし者なりとて。首をとりて馳かへり。勢至丸に是をわたせば。勢至丸これを父に見せて云く是ぞ先刻小弓にて射たりし定明が首にて候ふとのたまへば時國これを見給ひて

後れてもあるへきものか死出の山人もそれには先だちけり  
 斯詠じつゝ又云く。汝は觀音薩埵より申受たる一子なれば。必とも法師と成て。佛教に歸し。我々の菩提をたすけ。自ら後世をも求めよかしと遺言しつゝ西に向ひ合掌して佛を念じ保証す。年三月十九日四十三歳にて朝の露と消給ひけり妻室勢至丸が歎き譬んに品なし諸斯て有るべしに有ざれば菩提寺の學頭觀覺得業を招請し引導師として暮山の野邊に送り。東岱の煙となしをわんぬ七日々々の念佛誦經怠らず。歎きの中に光陰うつり。一百日にもなりぬれば。五輪塔をいとなみて。佛事斜ならず。哀なりし事どもなりき。



一書云勢至丸小弓をもつて是を射給ふに。定明が目の間に立ちにけり。此疵隠なくて事顯  
 なは。時國か一族怨を報せんこと必定なりと定明逐電してながく常庄に入らず。夫より勢至  
 丸を小矢兒と名け。見聞の人々感せぬといふことなし期て定明逐電の後隱居の心靜にし  
 て。作りし罪を悔後世の苦を悲み念佛怠ずして往生の望を遂く。其子孫みな上人の流れを  
 受。淨土の一行を旨とせり。小兒凡人にあらず。豈怨敵を恨むる心あらんや定明疵を蒙る事  
 よつて跡をかくし往生をとげ。子孫もまた淨土門に入ること。是知識のたくみなるべし凡夫敢  
 てあやしみをなすことなかれと云々

勢至丸は父時國の遺言に。必あだを報ふことなかれ怨をもつて怨を報は。怨いづれの時に  
 か息ん。唯ねがわくは極樂に生ずることを祈りて以て自他の利益を圖るべしと有しによりて。  
 深く菩提心を發し給ひける。其年の冬彼菩提寺の院主觀覺得業勢至丸を弟子とせんと望まれけ  
 る。素より父の遺言なれば。母子ともに固辭ことなく。得業に伴ひて菩提寺に登りて學文す。  
 得業はじめて佛經を授るに。一度聞たまへば則覺るのみならず。能其義理を解し。一字教  
 ゆれば十字を知り。一義を教れば多義に通じ更に忘ることなく。學文の性あだかも流るゝ水  
 よりも速なり凡九歳よりして十三歳まで菩提寺に住して習學するに和漢の文書にくらから  
 ず。諸の經論章疏に於ては通を得たるが如しとぞ。

一説に云く菩提寺の院主觀覺得業といふは。原延曆寺の學徒なりしか。大業の望の達せざる  
 の恨みて。南都に移り法相を學して所存を遂ぐ。勢至丸の母秦氏が弟なりければ上人の少男  
 なるうへ。時國の遺言の事ありければ弟子とせられしなりとぞ

觀覺得業はつくく勢至丸の行狀を鑑みて。いかにも凡人にあらずと覺しかは徒に草澤の塵に  
 雜ん事を惜み勢至丸に對ひて云く。汝はあたら學文の器量なり。田舎にしては其深理を究んこ  
 と覺束なしそのゆへは。はかくしき明匠とてもあらざれば。所詮本山にのぼりて學文あれかし  
 と。勢至丸こたへて。いかさま師の命に順ひて本山に登りて勤學いたし候べしと領掌あり  
 しかは。得業は勢至丸を伴ひて里にくだり。母公に告て暇を乞ひて本山にのほらんと。稍て母  
 公の宿所にいたり如此の條を語られける。母のいはく本山とは何地にはべるや。得業云愚僧の  
 本山は南都に侍れども聊據なき故あれば山門は他山なれども。知己の僧徒住せらるれば。彼  
 方に登山せしめんと思へりと母のいわく。夫はしかるべからず聞及ぶ比叡山は是より行程十日  
 ばかり遠方のよし。されば我子を見まく思ふとも容易は叶ふまじ又使の者を遣すとも。往還も日  
 數を経て生死のほども期し難く。得業のしらせ給ふ程の事を學ばせ給は。何の不足か有べき。思  
 ひよらざる事にとて歎き給へば得業もこれを推量り是非の言もなかりしが勢至丸は諫て云く受  
 がたき人身を受逢がたき佛法の教にあひ。眼前の無常を見て。夢の中の榮華を厭ふべし。就中



父の遺言。耳の底に止りて心の中に忘れず。はやく比叡山に登りて速に一乘を學ぶべし。但し母世に在ん程は朝夕の禮をいたし孝行を盡さんと思へども有爲を厭ひ無爲に入るは眞實の報恩なりといへり。一旦の別をかなしみ永き日を歎を殘し給ふとなかれと呉々も慰め給ふに。母もやうく道理にふくし給へども。袖にあまる悲みのしのびがたくぞ見え給ふ。稍ありて倍いつの頃上り給ふぞと問給へは明日とぞ答へ給ふ母はとめて是はけしからぬ。日の吉凶もゑらみ。供の者をも揃へて出立すべしとのたまへば勢至丸頭をうちふり。自ら在家に候て。公方へ出仕等にも候は。尤日の善惡をもゑらみ候事ながら此度の登山は。隨分遁世の志に候らへば。供の者も山まで送りつけん程。一三人には過べからず。かやうの事はおもひ立こそ吉日にて候らへと言されければ。母も今は爲方なくて。終夜衣装を裁縫朝にいたれば涙なからに。勢至丸の髪を手づから結び。衣装を着せかへ。やがて用意も調へば馬に乘しめ從者三人を添られけり得業よりも同宿の僧一人從僧一人贈文をもたせて從がはしむ。時に久安三年の春勢至丸十五歳なり一説には久安三年の春二月十三日と云。正源朗義抄には天養二年三月廿一日。美作を立ち。靈佛靈社に參詣して。偏に學文の宿願成就せしめ給へと。祈誠おこたなす去程に聊日敷を経て。同晦日京に着。明れば卯月一日なり兒出立のぼらんとす。供の者等まうしける。流石山門は目恥かしかるべく候ふ。今日御髪をもげづり行水なども候らはめと言ければ。兒曰くさしも

母の今一日と止めさせ給ふに停まらて京に逗留せんとよしなし。行水せば何の詮かあらんとて出たちければ供の者等つぶやきく登りけりと云々(爾有時は上人十三歳の時にあたれり)さる程に勢至丸は日を重ねて京につき。即時に山に上り給ふに。下り松のほとりにて貴族の御出興に値奉る。見物の人にとへば九條關白忠通公と申す。急ぎ馬より下て木蔭に立より潜ひ給ふ。殿下車を駐て。使者をもつて問給ふは。兒異相なり。何國より何方へ往給ふぞ。勢至丸答て云く。我は美作國のものなるが。幼ふして父を喪ひ。山門に登りて出家し。父母の菩提を吊ひ。普く一切を利せんことを望み候ふと。殿下重ねて山門の本房はいづれぞ。答て云く西塔の北谷。持寶房の阿闍梨。源光の許へ登り候ふと。公宣く。勤めて努々怠り給ひを折あらば又再會すべしと約してこそは往かせ給ひけれ。さる程に勢至丸は馬に打乗登り給ひしとなり。或説に云忠通公館に飯らせ給ひ御子兼實公に語給ふやう。今日不思議の小童に値り眼黄にして光あり。頭に圓光の形ありて凡人にあらず。年は十五歳。西塔の源光を頼みて登山すと云。成長の後定めて高德の知識とならん。口惜き哉忠通年已に老たり。此人の化導に逢ふべからず。死後に於て汝必ず。此人の化導に依て出離すべしと慰に語り給ふ。故に兼實公別して上人に歸依渴仰ましませしとなん又正源明義抄には此とき上人にあはせ給ふは。月輪殿下兼實公にして勢至丸を御車の前に召れ。其故由を問せ給ひ。相かまへて學文に心をいれ大願學と



なりて。兼實か出家の師匠と成給へど。御約束ありて殿下は御通りあり去程に勢至丸は馬に打乗山に上り給ふて。供の者ともに言されけるは。汝等が言につきて京に滞留せば。争か一人の人の御目にかゝるべき。既に殿下の御出家の師匠とならば。一天の君の御師範とならんと案の内なり。天晴學文の門出哉とて。駒をはやめて登り給ひしと云々。何れか是なりや知らず。

斯て叡山にわけ登り。持寶房に著て案内を乞。源光取次の詞に順ひ。立出て對面し。何國より來られしと尋ね給ふに。同宿の僧の曰。是は美作國南都の觀覺得業。今は當國菩提寺に住山候ふが御狀の候とて贈文を捧げけり。源光披き見給へば。玉章久しく通せず。互に心に萬里を隔たるが如し。積愛の至りに依て拙狀を捧ぐ。貴殿いかん。抑正身の大聖文珠。聖客一躰。これを贈る頓主。

三月廿一日 進上源光阿闍梨御房 沙門三會已講觀學得業と書たりける文を見れば大聖文珠とあり。兒を見れば日に黒みたれど何とも異なる相なれば。いかさま兒の器量を感じて。斯は書たるものなるべしと。兒を止めて先試に止觀の要義を問給ふに。敢て滞る處なし。源光嘆じて曰く此兒の神器。我指南すべき物にあらずと。功德院の皇圓阿闍梨に附たまふ

一書にいわく源光試に先四教義を授るに。籤をさして不審をなす。疑ふ所みな天台の古き

論なりけり。誠に凡人にあらずとぞ申あへりけり。此兒の智慧勝れて名譽ありしかば。源光われは是愚釣の者なり。智者につけて天台の古き義をきわめしめんと云て。此兒を相具して。功德院の肥後の阿闍梨皇圓の許に伴なわれける。此皇圓は。栗田の關白四代の後胤三河權守重兼の嫡男にして少納言資隆の兄たり。隆寛律師の伯父光學法橋の弟子となりて當時の知識一山に秀たる人也阿闍梨勢至丸の智慧深き事を聞て。おどろきて云。去ぬる夜の夢に滿月菴に入と見る。今此兒に値べき告なりけりとぞ悦び申されけると云々。又正源明義抄には上人十三歳の四月朔日に。持寶房源光阿闍梨の許に至り給ふと有。斯て今夜其兒の器量を試んとて。四方八面の物語なとしつ。夜に入て後のたまひけるは童子は田舎にて何々かよみ給へると問給へば。勢至丸答て曰く。田舎のにて候へば。はかしく差たる物も誦せず候と。源光これによつて内典外典の物かすを悉く問給へば。凡そ御尋ねの分は誦わたして候と答へたまふ。借は大略残らずよまれたり。俱舎論はいかにと問給ふ。未だ誦せずと答へ給ふ。源光さらば事の初に。六百行の誦を教へ申さんとて。本書をひき一遍誦してさかせ。是を今夜の中におぼへ。朝源光に聞せ給へと云々。勢至丸うけ給り候と領掌しける。やがて臥さしめけり。勢至丸これを重ねてとはす。此程の旅つかれにや。前後も不知睡眠したり。いつしか夜もあけぬれば。源光は兒をおこしつ。夕誦きかせ參らせし俱舎の誦はおほへられしや



と有ければ兒はしばらく案じける故。源光はさればこそ。ゆふべ唯一遍讀み聞せしのみなれば。いかなる文珠も習はずしては叶ふまじ。況や稍て寢入たれば中々多くの誦は覺ると有べからずと思ひ給ふ處に。兒稍ありて云く少々覺えたりと存じ候ふ。本書をひかへて御覽候らへ誦して聞かせ申さんと云云。源光さらばとて本書をひらき見給へば兒も共に本書を見るかとおもひ給へば。さはなくして。本書の方は見むきもやらずはじめ諸一切衆生。冥滅拔衆生。出生死涅槃敬禮。如是如理師對。寶藏論我當說といふより。終の超勝五百應心待迦葉微羅釋三藏に至るまで。一字も脱さず六百行を空にさらりと誦せられたり。源光これを聞給ひ例令本々よみたりとも。六百行を空に容易よむべきか。大聖文珠の化身なり天晴我山の本願大師の再談し給へるやと怪しみ。胸うちさはぎ不思議のあまり。兒をすく／＼見給へば。頂き平にして黒き眼に黄なる光あり。是更に人間の種にあらずと感歎し。有無の言も出ざりけるさる程に。昨日送り來りし。僧俗已に下らんと促すに。源光返事を認め給ふ。其狀の文にいはいはく。

貴札の趣き明朝の霧を拂ひ。夫れ貴方に向ひて拜見せしめ候ひ畢ぬ。抑大聖薩埵の御登寺。もつとも一山の法燈。寂岳の昌榮なり。貧道淺智。愚案老耄たりといへども。明頭多輩にして習學本望たるべきか。頓首謹言。大阿闍梨源光請文と云云爾後源光兒に對ひてのた

まひけるは源光は是一文不知の者なり。然るべき禪房へも立入給へかし。無智の身なればをしへ奉るべき事なし。かくてましまさば後悔あるべしと。勢至丸のいはく。仰はさる御事に候へども。唯不便の仰せを蒙りたく候とて年月を送り給ふうち。既に十五歳に成給ふ（明

## 義抄大意）

偈も勢至丸は。西塔の北谷功德院の皇圓阿闍梨に附給ひて勤學し同年の十一月縁の髮をそりて衣を着し。戒壇院において大乘戒を受。法名を善信圓明と號す既に出家の本意をとげ。吾年頃の願望すでに満足せりと大きに喜び給ひける。爾後時々師の阿闍梨に乞て。僧衆の交りを辭して。跡を深山林藪に隱遁せんを願ひ給へども。皇圓さらに許し給はず。御邊は吾山の法燈。一山の明玉と人々よろこびあへり。何ぞ今日此頃の遁世とは思ひもよらず。たとひ隱遁の志ありとも先宗教を練達して後。其本意をとぐべきなりと。諫給ふに圓明も。實にわれ隱遁をねがふことはながく名利の望をやめて。靜に佛法を修學せん爲なり。此仰せ實にしかなりとて三箇年留學し給ふ。圓明の智慧深さとあまねく其聞えたかく。四教五時の廢立かゝみをかけ。三觀一心の妙理玉を磨く。立る處の義勢まことに師の教に超たり。皇圓いよ／＼感し給ひて學文をつとめ大業をとげて。天台の棟梁となり給へと平生いさめ言されしかども。更に承引給はず。尙これ名利の學文なるをいとひ。只管に隱遁せんを乞給ふ。皇圓その志のとめ難きをさつ



し。しからば暇を奉らん遁世し給へ。但し日本中に閑居をたづぬるとも西塔黒谷の慈眼房寂空の御房にはしかじ。夫へ参り給へよと心よく許し給ひしかば。圓明は殆ど喜び。稍て時をも移さず。師にくれくも禮をのべ。同宿の僧衆に暇を乞て黒谷にももむきたまふ。時に久安六年九月十二日生年十八歳にして。西塔黒谷の寂空の許にいたり給ふ

明義抄には久安六年八月廿六日。左の手に茶筒を持。右の手に茶筌を捧て既に遁世に出たまふと云云。又或書には皇間遁世をゆるしたまはずといへども名利の學文なるとをいとひ。忽ちに師匠の所を出給ふと云々

抑寂空上人と申は。大宮攝政殿の御子にして良忍上人の御弟子なり。京極太政大臣高衡公の御孫にあたり給ひて。中御門中納言家成卿。又小野宮殿等の伯父公なりとぞ。圓明十八歳にして此寂空の御房に参り給ふに折ふし。止觀の談議の最中にて老若五六人集りおはしけるが。圓明の來り給ふを見て申しあひけるは是に來る若僧は。當山無双の學匠の名を得たる。圓明公に候ふ。何さま法門を申し談ぜんとして参られ候とおぼゆといふ。圓明は御前の椽に畏りて侍り。寂空問て云く。汝は何れより來るぞと。圓明答て云く。定めて名字をば聞しめされても候らん。持寶房阿闍梨源光の弟子圓明と申す者にて候ふが。遁世の志し候ふによりて参りてさふらふと申し上ぐ。寂空重て問給ふ抑遁世といふは。過去の心か遁世して來るか現在の心か遁

世するか。未來の心か遁世するか。過去の心か來るといはは過去の心は去てなし。現在の心か遁世すると言は現在の心は不住なり。未來の心か來るといはは未來の心は未だ至らざるなり。佛心即魔界。魔界即佛心。一心爲一念遍有法界也と云へり。何れの心か遁世して來るぞと云々。圓明答て言く過去現在未來の心も遁世せず。無始已來今世流當來之所在煩惱流轉流湏面々若衆生有苦顯罪心といへる。此文の心にひかれて参り候とこたへ給ふ。時に寂空涙をながして言ひけるは三塔に學座多しといへども。寂空可様に問たるに。斯のごとく答ふべき徒は覺へず。御房はこの流轉滅滅の法門にはや落居せられたり。其名は何と名のり給ふぞと仰せければ。善信圓明と申し候ふと答へたまふ御房は實に法然具足の人なり今日より法然房と字し實名をば師匠の源光の源の字と寂空の空の字をとりて源空と名のり給へと仰せければ。今日より改名して。法然房源空とそ名のり給ひける程に寂空は密教を稟受して圓頓戒を傳へ給ふ。凡そ一切の經論。内外の典籍博く練。普く究めずといふとなし。保元々年の春源空廿四歳（或は云く保元二年春三月四日廿五歳）つくつく思惟し給ふは教法もし時に背かは何をもつて人を利益せんぞ。嗟峨の釋迦堂に一七日參籠し祈念し給ふと懇なり保元二年三月十二日南都の興福寺にいたり藏俊僧都の許にして法相の法門をまなび。六經十一部の論に眼をさらし。四分三性の法門に玉を磨きて。奥儀を究めたまへり。平治元年には中河の上人にあひ奉りて眞言の秘法を傳授し。四



曼三密の法門をさとり給ひける。永曆元年初秋には招提寺の鑑真和尚に傳戒を學び三聚十重十  
 无盡をあきらめ。應保元年四月に仁和寺の寛雅法印にまみえて三論を誦ひ。長觀二年の初冬に  
 いたりて慶雅法橋に謁して華嚴宗を學ひたまふ。鑑真寛雅慶雅の三師どもに其超絶を嘆じ。或  
 は供物を贈り。或は章疏を寄附すとたり  
 一時源空華嚴經を披き見給ふに。怪き青蛇來りて。机の上に蟠るを見給ふ弟子遠大に驚く。其  
 夜源空の夢に怪き女來りて告て曰く我は是天竺の無熱池にすむ善女龍王なり。上人の佛法守護  
 のため參る所なり。必ず怖給ふことなかれと示し終りてたちまち消ぬ。其のごとく夢さめ畢ぬ  
 とぞ。又法華三昧を修し給ふときは正身の普賢白象に乗して道場に現ず。又暗夜に書をよみ給  
 へば。光明を照して白晝の如し。又眞言觀門の時は道場に入て阿字觀を修するに。五相成身の  
 觀行を現はす大日如來は是周遍法界の理自性。清淨の本躰なり。非色非心の理かりに三身滿德  
 の形を示し。無言無説の佛。一實眞如の旨を説給ふ。斯のとく觀念したまふに。五輪種子の觀  
 にいりて。九相の一身は無常の成する所と觀じ。益して遁世の志しに進み給ふとぞ（或は云く  
 永万元年四月上旬近衛坂の西に卍菴を結び獨學の志しありて隱居し給ふと云是今の新黒谷の地  
 なるか）

上人既に聖道諸宗の教門に明なりしかば法相三論の碩徳面々に其義解を感じ。天台華嚴の明匠

一々に彼宏才を稱むしかれども尙出離の道に煩ひて身心安からず。順次解脫の要路をしらんた  
 め。寢食を廢てこれを案じたまふゆへに諸の論藏。三國相傳の聖敎和漢人師の所釋一々に  
 高覽ありしが。偶惠心僧都の往生要集を讀給ひて。是は源信已證の法門なりと心をとめて見給  
 ふ程に。はじめて往生の業は念佛を本とするを知り給ひ爾後黒谷の執恩藏に入て周く一切經  
 を見給ふと五遍。善導の五部九卷の疏。曇鸞道綽の章疏等を委く閱し給ふに第一遍に一代の經  
 論を聖道門淨土門と二に分つべきとを悟たまひ。第二遍には淨土門に於て專雜の二に行あるへ  
 しと察し給ひ。第三遍には大小乘の肝要は彌陀の本願名號の不思議なるべしと御覽あり。都言  
 三遍詮ずる處觀經の疏四卷にいはいく一心專念彌陀名號。行住座臥不問時節。久近念々不捨者。是  
 名正定之業。順彼佛願故といへる。此文の下より此度の出離生死。頓證佛果の道は彌陀の名  
 號に限れりと治定し給ひ。習學廿三年。獨學十二年の學業をさしをきて。安元元年乙未生年  
 四十三歳にして終に淨土門に入り。未代惡世の衆生極惡最下の凡夫の得道は彌陀の名號におさ  
 まると。堅固の信心に住し。専ら念佛を修し給ふ源空既に自行立るより。推して他に及ぼさん  
 と思しめせとも。如何あらんと危踏思し召れけるに其夜の夢に紫雲一國に滿ちて无量の光を放  
 ち。其光化して百寶色の鳥となり。中に高僧ありて腰より下は金色身を現したまふ。源空問て  
 曰く誰人哉と。吾は是善導。汝將に念佛を弘通せんとなす。故に來つて證明するなりと。覺て大



に喜び給ひ是によつて源空の志し決し給ふ一日、源空往生要集を講じ給ふに。觀佛三昧を勝たりとし念佛を劣れりとし給ふ。源空座に有てまばく是を難じ給ふ。源空はなはだ悲て不與なりしが。後にまたこれをおもふに其由あるを悟りて。源空をして代講せしむるに聞て益々これを敬ひ給ふ。源空臨終に。本尊聖教の類ひ盡く。これを源空に譲り給ふ。安元々年の春年四十三にして黒谷を出て。吉水に移住したまひ。淨土の一門を闡揚し大に眞宗を弘め給ふ一國の人風に靡く艸のごとく。其化導にしたがひ。高倉の帝禁中にまねかせ給ひ菩薩戒を授り給ひ。后宮妃女群臣多く戒を受るものあり。

一書に治承二年十月上旬源空四十六歳にならせ給ふ時。黒谷へ參り慈眼房源空に講し給ひ。久しく面會もあらざるを互に謝しつゝ御物語の序に源空のたまはく。貴僧實や此近年は念佛諸宗に超過せりと立給ひて自らも佛念に皈し。人に道心を勸るにも。念佛をもて生死を離れよ是に過たる法なしと申さるゝよし爾や。源空こたへて左候ふ此度の出離はひとへに念佛をもつて決定の業と思ひ定めて候へは。自ら修行いたすにも。他人を化益いたすにも稱名念佛を仕り候ふとありければ。其時源空の曰く。先師良忍上人も。觀佛三昧殊に勝れたりとこそ仰せられしとて聖道修行の甚深の容を仰せあるに。源空は念佛の諸教に勝れたる様を立たまふ。互に廣學にて數文釋をふるひて問答あり。源空の曰。機法相かなはく得道決定な

り。時機に相背かば凡夫所入難かるべし。造惡の惡人等觀佛三昧等の深理の法を望まんや。龍陀の願力によらずんば出離不定と存じ候ふ源空の云く凡夫として。聖人にならんと言は一向小乘なり。生死を離べからず一切善惡都莫思量なるうへは。諸法を一佛乘と開會するに何者か漏んやとて。大きに笑ひ給ふ。源空言はく。是は事新しく覺え候ふ八宗九宗の法門はいづれも勝劣なく候ふ。教のごとく修せば。其證をあらはさんと掌を返さんが如し。其段素より不審候はず。機法相應して凡惑ひとしく得道せん方は叶ふまじく候や。文證をもつて言上候はんなりと。源空かへつて腹立給ひ。汝は誰にあひて習ふ所の法門ぞ。流石に源空が智分は物にたとへば大海の如し汝學匠とおもふ共。源空が下ぞかし。我に向ひて斯ることを言すとて責給ふ。源空迷惑なる面色にて。是は法門にて候はで。一向諍論にてこそ候へ。あはれしかるべき判者たに候はく落居すへく候んものをと言ひければ。源空腹に居かねて。念佛勝れたらば汝ひとり言せ其處まかり立とて御傍なる枕をとりて投げ給ふ。此とき御前なる同侶達申されけるは。斯ほど仰せ候ふに先立せ給へと言ひければ。源空力なく立給ふとて善導和尚も上來雖說定散兩門之益望佛本願意在。衆生一向專稱彌陀佛名と釋し給へり。稱名勝れたりといふこと明なり。聖教をばよく御らん候らはでと言ふ。源空ますます腹をたて。醫王山王も御照覽あれ。自今已後師弟の義有べからずとて。様まで追て出給ひ。足駄



をとつて追さまに打たまへば左の耳の上にあたり。紅に血しほながれて逆給ひけり時に同宿の僧等。大方こゝちよきとにぞ思ひあひける人ごとに勝れたるを猜み劣れるを卑むならひにて此程餘りに學匠めきて有つるに。最きみよし。其上上人御誓狀ありて御打擲あるうへは。容易免し給ふと有ましとてみなく密語給ひける

同く三年二月寂空病に臥し給ひける由。源空傳聞給ひて。登山し給ひ忍ひて御房に參り給ふ。學秀僧都をよび出し言ひけるは。御違例のよし承り候ふ間御老體の御事にて候らへは。いかかと存し登山仕り候と言ふ。學秀僧都喜びていはく。上人此候とも仰せありしは。三百餘人の弟子の中に法然房は誠の大學匠なり叢空が怒たるをよも本意とは思ふまじ。されは偏念はあらじとぞ仰せられし。優しくも登山し給ふもの哉しはらく忍びて待せ給へ。首尾よく計ひ申さんとて傍の間に置いて稍て學秀は寂空上人の病牀を伺ふに。寂空目をひらき。燈かき立よとの給ひて偕各に對ひてのたまふやう人多しといへども法然房は心あるものなり。寂空は明日辰の一天に臨終すへきなり。法然房はいかてかしかるへきと仰ければ學秀の言ごとく。法然房は内典外典に通じたる學匠道心者にて候らへば。先達ていからせ給ひし事を聊遺恨に存せざるべし師病著に臥給ふことを。承り候へは。登山仕つり餘所なかり承はらぬ事は候はじ。しかれども先頃の御制文に恐れて。近房に候らんも知れず候ふと申すにぞ。寂空言く。あは

れ來れかし何事も言ふくめんどありければ學秀坐を立て稍まばらく有て出來り。折ふし法然房まいりて候ふと言されければ。寂空これへと仰ありて。源空御前に長る。寂空打笑給ひ。うれしくも來り給ひたり。去頃誓狀せし上打擲に及ひしかは定て無念にもひ給ひてよも登山はあらじと存じつるに只今來臨あると悦び入り侍る。一期の對面是ぞ限りなるへしとて御心底のともも吳々御物語ありて書記せんとて。硯紙を召よせて自筆に認め給ふ。當坐の人々今何をか書せ給ふらんとおもひあへり。是は聖敎の讓狀にして其文に云く讓渡聖敎之事比獻山西塔黒谷の經藏に置ところの五千餘卷の經論。北白河中山の經藏に置所の三千餘卷の聖敎殘るところなく讓與る也仍狀如件

治承三年己亥二月日

寂空判

法然房と書たり

此時にいたつて日頃源空を猜み謗りし。同侶見達に至るまで。此ありさまに皆一統に口を閉。智者と智者との論談子細ありけり。密照あひて偏執を失ひけり中にも淨憲法印は師の杖の弟子にあたるは法門の印形にして面目なりと感じ給へり。寂空御急病と披露ありければ。諸方より檀越の徒弟來集。凡そ四五百人もありけん。諸寂空上人其夜も明けければ。本尊にむかひ威儀例のごとくして即悟三昧に住して終におはり給ふ。滿座の諸人涕泣斜ならず。阿難尊者の恒河の邊にして。四十餘年の化義につきて。三昧定に入給ふが如し。時の哀傷師弟の餘波。共に盡しがたき事ともなり



斯て有べき事ならねば。御棺をまつらひ入棺し奉る。兩三日を経て既に茶毘し奉らんとする時。敝空御棺の中より。此棺の蓋をひらけと仰せ出さる各驚き騒ぎ周章て。空信學秀御棺を開きければ。棺の中より自ら起上り。御手を引れて出させ給ひ。源空にむかひ坐具をのへ。三禮をなし。源空本地身皈命大勢至化度衆生故於娑婆出現と三度となへたまひてのち御座になほり。諸人にむかひ涙をながし言ひけるは。法然房を炎魔王宮に御沙汰ありつるを聞て今こそ存じたれ。我未だ定に入らずして有し所に炎魔王王來現して。大日本國源空の本地敝空に拜せしめんとて誦して云く。源空本地身大勢至菩薩衆生爲利益。度々出現故と誦して去りにき。斯る薩埵の化身を罵り打擲しつる罪障を懺悔せんが爲に又蘇生するなりとて。硯と紙とめしよせて讓狀を別紙にかきて。四明天台の沙門敝空(判)進上法然上人と書なをし。源空に奉つり給ふ。偕敝空源空にむかひ十念相續して往生をとげ給ひけり。先には三昧相承して。即悟三昧に住して終り給ひけり。今度は念佛三昧に治定して禪定に入がごとく。御息絶させ給ひけり。觀念佛の兩益をあらわし。二度往生を遂させ給ひけるこそ尊しと云々(或は云く上人一向專念の身となり給ひしかは終に敝山を出て西山の廣谷といふ處に居をうつしたまひけり。又幾ほどなく東山吉水のほとりに閑なる地ありけるに廣谷の菴をわたして移りたまふ尋ねいたるものあれば淨土の法をのべ念佛の行をすゝめらる化導日々盛んに念佛に皈するも

の雲霞のことしと云々)

又一説に善導大師源空の夢に現じ給ふは。治承四年庚子源空御年四十八四月七日の夜の事なりと云。尤も夢想は高山の中程に源空いまして見給ふに。南北遠く西に向へり。峯より三重の瀧落て清水濤々として麓の大河漲り流る。其傍に大道の通驛あり。男女多く往反す。まかるに西の方を見給へば地より五丈ばかり上りて。空に一群の紫雲ありて。此雲飛來て源空の所に至り此紫雲の中より。孔雀鸚鵡および百寶の色鳥とび出て四方に翔り。其眼より光明を放ちて十方を照す。又其雲の中より一人の僧現る。其姿腰より下は金色にして上は墨染の衣なり。容顏微妙にして。老年六十ばかりなるが合掌を胸にあて、高聲に念佛したまふ其念佛の聲ごとく。口中より化佛しきりに出現したまふ。源空問て是は誰人にてましますぞやと。僧答て我は是大唐念佛興行の祖師善導和尚なり。汝專修念佛を弘る事たつときが故に來れるなり。今高山の頂きは是念佛三昧。万行万善の上々の頂きを表する處なり。三重の瀧は江河のながれ汝が勸化念佛三昧の法水法滅百歳の時まで利益あるべき瑞相なり。百寶色鳥眼より光明を放ち汝が頂きをてらすは。六方恒沙の諸佛。汝を護念したまふ謂れなりとて。十念を授け給ひ。眉間より光明を放ちたまひ。異香薫じわたるとみて夢さめたり。源空おもひめぐらし給ふは。是正して我念佛利益の。海内に普く流布すべき瑞相なりと。夫よりいよく



念佛の信心ふかくまじませしとなり

治承四年十二月廿八日本三位中將重衡卿。父平相國清盛の命によつて。南都を攻しとき。東大寺に火罹りて。大伽藍忽ちに灰燼となる是に仍て後白河法皇再興を企給ふに。舊例に准四方に勸進せしめんとす。然れとも事容易ならず苟も其人にあらざれば成功すべからずと大勸進の聖の評議有けるに。源空其選びに當り給ひければ。即ち右大辨藤原行隆朝臣を勸使として。大勸進職たるべきよし。官旨に云く。南都の佛法滅亡の條朕愁歎に思ふところ。上人いかてか同心せざらんや賊徒等七大寺を亡すといへども。余はしばらく闇。東大寺はこれ先皇の御願なり。十六丈の盧舎那佛一時に破滅す。御身量震襟として。置ところなく思しめす早く上人鑄仕を加へられ宜しく佛閣を建立し佛像を安置せられれば朕が喜悅のところ也先奉加し奉るとなり。源空宣下の趣きを聞き召。勸答申されけるは。御宣忝く仰せ下さるといへども。源空山門の交りを通れ。幽に住居いたすとは閑に佛道を修し。念佛を勤行せんが爲なり。且は年齢つゝまり來て。造營その期を辨へず候ふ。就中山林籠居の身に斯る大勸進最も憚り甚しく候ふ自餘の貴禪房へ仰せ下され候ふべしと。固く辭退申されけり。法皇源空の御答を聞き召。押て仰せ下されけるは。弟子等の中に然るべき器量の徒あらば。指圖申されよとなり。源空まうさく。若し俊乘房重源と申すもの此職を承るべきかと存じ候とありければ即ち勸使ありて重源を召さる頓て

參内仕る。是によつて大勸進職に補せらる。重源左右なく領掌し奉る間。後白河院の御奉加に云く奉加令むる佛閣造營をなすべき事。右奉加に至りては。東大寺。佛殿。金堂。講堂。戒壇院。來迎堂。鐘樓。經藏。佛閣寺。聖殿寺。鎮守。拜殿。湯屋大透牖。凡そ目錄斯のごとく。造營の間防州をもつて私領として。造功をなすべき匠の大王。侍從大納言種安に補す。宜しく諸人の助力すべし。奉行左少辨行隆に下知を加ふ。仍執達如件。養和元年壬丑四月日 參議 彈正少弼藤原朝臣泰定

俊乘房に奉る。御奉加の目錄奉行大工一紙にのせたり。重源これ給りて。源空の見參に入れまいらするに。奉加の趣きを見たまひて仰せけるは。天晴阿僧は權者かな是程の大勸進を受られけるとぞ言ひしと也

一書には此時の勸使は藏人信國と云々。又重源を澄源に作る  
俊乘房名は重源。姓は紀氏瀧口左馬允季重の三男。刑部左衛門尉重定出家す。平安二年宋國にわたり建仁寺の開山榮西禪師に彼土四明州にて遇て相伴ひ天台山上り。翌年の秋榮西と僧に吾朝に飯り。後源空上人の弟子となりて名を改めて重源といふ。東大寺の大勸進職に補せられ。即ち一輪の車を作る其大きき身を容る可にして車の左に詔書を貼り。右に幹疏を貼りて。州縣を巡行し。万民を勸め十餘年を経て成就す。元久二年六月五日寂す(或云六日)



壽八十六と云々。其後重源は伊勢大神宮へ詣て。三七日の間參籠し。我此度の重職わたくしの名利にあらず。偏に伽藍草創の爲なり。何とそ速に成就圓滿せしめ給へと。丹誠を抽で祈請をこめられける。しかるに三七日満する曉の夢の中に唐裝束をせし童子。方寸の玉を授け給ふと見て覺てみれば彼玉現に袖のうへにあり。重源あまりの尊さに感涙せきあへず是を得て首にかけ。諸國を勸進するに。綾羅金繡錢貨米穀金銀銅鐵絹布綿馬のたぐひ心に任せて出来ること風に艸木の靡くがごとし。

壽永元年七月上旬に源空上人。上西門院の招請により。七日の間御説戒あり沙彌戒。具足戒。少律義戒等の御説法あり女院をはじめ官女群臣感涙をもよほせり。しかるに一ツの小蛇。初より唐がきの上に蟠屈。七日の間動かす。ときく耳を側たて勢をなし。説法を聴聞なすかと疑はる。ひとく奇異の思をなしける。廻向結願ありて講會をはる時に。彼小蛇唐垣の上よりすべり落死しけりその小蛇の口より十二三ばかりなる童子唐裝束して鬢巾ひたるが天をさして昇ると。女院月輪殿は御らんあり。以下の人々の目には。蝶出て天をさして上るとみる。みる處は不同なれども。正しく蛇業を免れて天上しけりと感じける。いにしへ惠表比丘武當山にして無量義經を講讀せしに。聲をきく青雀歡喜苑に生せりと斯の如きことを思ふに此小蛇も大乘

の結縁によりて天上に生れ待るなるへしと云々

源空上人は既に聖道門を捨て淨土門に皈し。念佛三昧の大導師と成給ふ。されは惠心僧都要集を作り。念佛往生を勸め給へども。いまだ日本に淨土宗といふ宗旨なし。又禪林寺の永觀律師。往生講の式。往生捨因を編て念佛往生を勧めたまふといへども。是も又淨土宗といふ宗旨弘まるとなし。天竺大唐には淨土宗といふ宗旨あり。天竺にあるとは菩提流支の聖財論に出たり又唐土にあることは元曉の遊心安樂道。慈恩の西方要決。加才の淨土論に出たり。さる程に源空上人。天竺唐土に。淨土宗といふ宗旨のあるとを考へ給ひて。日本におひて念佛往生の宗旨を初めて弘め。淨土宗と號し。六十餘州に弘めて。他力の信心を勧め給ふ。念佛往生の太祖なり。

偕又源空上人の山門にて初めての師匠たりし。持資坊の阿舍梨源光は。慈覺大師の譜弟。慈惠僧正の徒弟にして。惠信の僧都。皇圓阿闍梨等にも弟子たり。則光學法印の寫瓶にて四明天台相生の流に於ては。天晴の明匠と稱する一流の長者たり。然るに斯る碩徳も諸宗の習學うすくおはしけん。又いかなる異樂に住し給ひけるにや此度の修行にては成佛すべからず。然れども人は生を更れば隔生即忘として。今佛法修行する處を忘べし所詮生を更めずして。彌勒菩薩の出世に値奉り。悟を開かんに如し。かゝれば長命せずんば叶ふまじし長命の術は蚰身にて



ころ有べし。何の國にか然べき池あらんとて。弟子等を諸國に遣はし見せしめ給ふ。時に東海道を巡歴せし。但馬の註記澄算といゆる小僧かへり登りて言やう。遠江國笠原庄に櫻の池とて候ふ。南は蒼海萬里なり。北は山林森々として海を去ること遠からず奥ある池にて候ふごまうす。源光これを聞きたまひ其領主は誰ぞのたまひければ徳大寺殿の所領と申す偕は源光が檀越なり。よも惜み給はじされども所存ありとて沙金百兩を與へ永代放文をとりて。去嘉應元年六月十三日命終の夜半に。掌に水を乞て是をたへて終に没せり。其後雨ふらず風吹かざるに。彼池にはかに水増り。大濤たつて池の中の塵悉く拂ひあぐ諸人耳目を驚かすよし彼所より領主に注進せしかば。時日を考へ給ふに。彼阿闍梨命終の時日に有けるとなり。當時にいたるまで靜なる夜は。池中に鈴の音聞ゆるよし言傳ふ源空上人の言く。智慧あるゆへ生死出がたきを知る。道心のゆへに佛の出世を願ふ。淨土の法門を知らざる故に斯の如く異樂に著し給へり。我淨土門を今七八ヶ年以前に見出しなば。なごか師匠に往生の益を授奉らざるべき。口惜き哉とて落涙し給ひしとぞ。御弟子等言く。聖道門の諸宗に依て生死を離るゝ道は候はずやと。源空言はく一代の諸教區々に皆殊勝なり。初華嚴の事理圓融。法界唯一心の觀。阿含の四諦緣生觀。方等の禪呵褒貶觀。般若の盡淨虛融の觀行。法華涅槃の唯一乘醍醐招拾の妙藥。顯密大少權實。みなくろの益甚し。斯の如く深理の法門は習學するといへごも是

を行し遂るとかたしされば源空はいづれも大略修行せしかども末世におよび濁世になりぬれば機分おとろへ得道かたければ時機相應して念佛の法に治定してひとへに彌陀の誓約を頼み奉るなりと仰ける。其後しかるべき弟子等四五人召具して遠江國櫻の池に至り給ふに池はすみて塵もなく草も茂らず漣漪たてり。上人はじめ徒弟ひとしく。阿彌陀經を四五卷念佛數百遍となへ給ひしかば。淺ましき大蛇のすがたにて水上に浮出給ふ。源空屢落涙し給ひ。願くは誠の源光にてましますば。本身に復して現せさせ給へ。斯のごとく異樂に住せさせ給ひけんと思案の甚しきなりと引導ありければ。蛇形忽ち水中にしづんで後行法の躰を現して。又浮み出給へり不思議なりし事どもなり(明義抄大意)

按ずるに源光寂し給ふ時嘉應元年と有ば源空の言ふ様を考れば凡安元年中の比なるべし又一説には功德院の阿闍梨皇圓蛇身と成。櫻の池に住給ふといへり功德院皇圓も叡山栢生法橋光學の弟子にして。源光の師匠たり。顯密の學者にて源空第二度目の師とす。何れか是なりやしらす

叡山の天台座主權大僧正顯真と申碩徳おはします。其初いまだ大僧都にておはせし時。承安三年生年四十三にして官職を辭し。菩提をもとめて大原に籠居給ひて。生死の出がたきをのみ嘆き給ふ。斯て春秋四年を経て又山に歸りて行法を修し。松の戸をとち潜に隱遁におもひをこ



らし給ふと八年ばかり常に永辨法印と。出離解脱のとのみ談ぜられけるに斯の如きとは源空上人に御尋有べき由申されけるにより。頃は文治二年の春。相摸房と云僧を使として。源空上人の許へ遣され。山へ御昇りのたよりに必ず訪らはせ給へ。申承り侍り度との候由仰られしかば。源空坂本へわたり給ひて斯と申されけり。顯真おはしましあひて。坂本にくだり對面し給ひ。問て云く。此たび如何して生死をはなれ侍るべきと言ふ源空いかにも御はからひに過べからず。顯真まことにしかなり但し先達にておはすれば若し思ひ定め給ふ宗あらば示し給へと。其とき源空上人云く自らの爲には聊れもひ定むる旨候らへば。唯はやく往生極樂をとけ候ふべし。顯真のいはく。順次の往生遂がたきに依て尋言す所なり。如何して此たび容易往生を遂べきや。源空の云く成佛はかたしといへども。往生は得安し。道綽善導の意によらば。佛の願力を仰ぎて是を縁とし。凡夫淨土に往生すと。其後たがひに問答言説なくして。源空別を告て歸り給ふ。斯て後顯真のたまふやう。法然房は智慧深遠なりといへども聊偏より執の失ありと云云源空此ことを傳へき。たまひてされば我しらざるを云へば必ず疑ひの心を發もの也と云々これを又顯真人傳に聞たまひ。まことに爾なり我顯密の教をはかつて稽古をつむといへども。しかしながら名利の爲にして。淨土を心ざらず道綽善導の釋をもうかがわず。法然房にあらずんば。誰人か如此ことばを出すべきやとて此言に耻て百日の間大原に隱居して。淨土の三部經天觀

龍樹の論文善導の五部九卷の疏。そののみならず五祖の釋論。章疏を閱し給ひ。義理を案じ給ふと良久しく。其後弟子等に對ひての言く。顯真既に淨土の法門を見覺たり。夫につきて不審多し。今たびの不審こそ法然房に談せずんば有べからず故に法然房を招請して不審を明さはやどの給ひければ各こたへ云く。出離の大事の御法門聖道淨土の折角をば。争か御一人して聞し召すべき。此邊の碩德達學匠たちを召聞しめされて。不審の條々を立仰られ候らへと言にぞ。さらは各はからひ候らへと仰ければ。相模の阿闍梨に廻文を書いて持せて廻らす。法然房の方へは侍從已講を使者として仰せけるは。先頃言せし淨土の法門この程大原に隱居して見覺え侍べる夫につきて諸宗の談ずる處相違の間。落居のために言す。必ず。其日立いたらせ給ふべしと法然御返事に云く。承知せしめ候ふ。参り承り愚案をともふすべしと云々さて顯真僧都の廻文につきて。文治二年秋八月上旬洛北大原勝林院の立禪寺に當日集會（本堂或は丈六堂と云）する八宗の碩學には。光明山僧都明遍（高野山）侍從已講貞慶（笠置寺解脫上人也法相宗にて天台淨土を兼學す）長樂寺の印西聖人。所々の遁世の人々には當所大原の本性房灌教（八宗の碩學也）嵯峨往生院の念佛房（天台宗）大原來迎院の明定房蓮慶（天台宗也）菩提山の中尾の蓮光房（東大寺の僧）蓮契上人師弟（十餘人を招く）山門久住の叢には。大僧正智海（天台碩德）權大僧都證真（天台宗）靜嚴僧都竹林房（眞言佛心天台碩德）權少僧都覺行。淨然法



印權少僧都空阿房。慧光房此外妙覺寺の上人。覺行僧都堯禪。菩提山藏人入道。佛心房安然  
(野山真言)長樂寺定蓮房(天台)八坂大和入道見佛(天台)松林院清淨房。櫻本の究法房。聖  
光房等也

(右は大原談義聞書抄大意)又明義抄には此外に淨賢法印。淨憲法印。仙義律師。學秀僧都。  
淨 寧法印。生馬の上人。松林院仰德房。觀佛房神樂岡の淨空房中山の信蓮房淨遍僧都。實  
惠上人。寬雅法印。慶雅法橋。醍醐の座主空範石山の僧都覺圓。高尾の慈蓮房。寶寺の求法  
房。仁和寺の勝願房。範顯僧正。顯真僧正。梅尾明惠上人を加ふ。就中明惠上人は。傳云く  
承安三年正月生る九歳にして高尾の文覺に従ひ。十六歳にして剃髮す十九歳にして梅尾山に  
止り。盛に賢首宗を唱ふと云云按るに文治二年は十四歳にして。未得度せざる已前なりしか  
れは此たびの論議に。集會あるべからず非といふべき歟

右證 眞 靜嚴等已下。山門の碩學三十餘人并に南都北嶺の有智二十餘人催しに依て參集す。覺  
行僧都堯禪。聖光房等を首領とし。諸宗の碩學二百餘人三井の大貳僧正公胤上首として門徒の  
學匠百餘人なり。其餘惣じて廻文に預からざれども。心ある老若大學匠三百餘人。あるひは偏  
執の徒もあり或はまことの道を嘆たまふもあり。彼是集會して列座あり。其餘聽聞の道俗貴賤  
二千餘人來集す。源空上人は斯のとく南京北嶺寺院邊土の碩德大學匠念佛偏執の人々。集會す

る程の大義とは夢々まろしめさず。唯後生菩提の爲に聖道淨土の相違自力他力の衆生の機分等。  
安心の所談と思めし御弟子も唯世の常の法談と心得。かゝる匠をば覺悟し給はされば。何の用  
にも立まじき。初心晩學の愚癡無智の入道等ばかり供せられたり。其中にも東大寺の大勸進俊  
乘房重源。隆寛律師皆空。安居院法印聖覺を上首として彼是二十餘人はかり。源空聖人は例  
の事と思召て。龍禪寺に至り給ひて寺門をさし覗き見給へば三百餘人の高僧二行に列坐せられ  
たり。發起の顯眞上坐して左のわきは大原の本性上人堪歎右の方には實範碩德。左右に別れて  
著坐あり弟子の人々是を見て。あわや此ほど在々所々にして。法然上人淨土の宗義を立させ給ふ  
ことのみ沙汰し。或は憤り難ずる徒の折を得て各同心し來集せしと覺えたり此たびの聖道淨土  
の勝劣大小權實の對判結句と見えて。いかなる文殊舍利弗の智慧なりとも叶ふまじ。三百餘人  
學僧は上人法門に結り給はし。我情の手枝をあてたてまつり永く淨土宗の旌戈を倒し折らんと。  
義定の氣色あらはれたり。實に古今稀代の宗論得道の折角なり源空一期の御大事これに過じと  
見え。御弟子達は我師匠今日を限りに失給ふべきよと思ひあへり。諸經の肝要一代至極たゞ此  
文にありといふと破れなぞと思ひて心も身も添ず。然る所源空御弟子等に言皆人は見を扶持  
し。髪をけづり手足を洗ひ。物を教へたて骨を折て弟子を持に源空は久しく骨をも折らで二千  
餘人の弟子を設たるぞとよろこび給ふ其時御弟子等此御詞に少し力を得たり。さる程に源空は



群り集ひし聽衆を。かき分けく入給ふ正而の脇の間より望給ふ。源空の御供の中に信濃國住人角張の七郎太郎入道成阿といふ者。上人の御袖の下より潜通りて上人の御前に立塞り。當坐の氣色を見れば上座せられたりける顯眞は高麗縁の疊二帖重て其上豹の皮を敷て座せられたり上人の御坐と見へて大紋縁の疊二帖重ねて敷たり是には人も座せざれば成阿思ふやう上人の御座には敷皮もなし。然れば一段さがりたり。いかに敷皮に對して敷ものやあると此彼を見廻せども物もなく如何はせんとおもひ煩ふ程に禮盤に二重縁の半帖あり是を見て成阿は末座なる若學匠どもの居ならびたる左右の袖を分けて。無禮ながらまかり通り候ふ。上人の御座まどけなく候ゆへ止を得ず候とて。こゝを通りて佛前なる禮盤の半帖をとりて上人の御座に重ねてしき。後座に跪。檜扇を抽上人の方にむかひ。是こそ御座にて候らへ入せ給へと言す源空すなはち座に著たまへば。廿餘人は座敷なくいかにはせんと立煩ひたり。成阿いかにや御房たちは參り給へ。今日こそ自宗他宗の得否今日を限るべし出離一大事の御法門聽聞仕んと。我人界に生を受たる幸ひなれ。人身の思ひ出。宿善の程是なるべしとて打笑ひ居たりけり。廿餘人は成阿が詞につきて一度に入て。上人の御うしろ佛壇のまわりに居流れたり。三百餘人の學匠若干の聽衆等目をすまして源空の御貌をまもり。成阿が舉動を見給て。假令内談したりとも只今の中にては可憐に舉動べしとも覺えず初聲の一言を以て法性の深厚を知ると云云。法然房の智に我等を

層ども思はぬゆへに。今此入道も斯の如く舉動なり斯る形勢にては今日の問答に必ず結りぬべしと思ひ給ひけるとぞ。後に懺悔ありしとなん。源空當座の景色を見給ふに其日の問答の問口は大原の本性上人と見えたり。題者は南都の範顯僧正。精義者は寶持房法印。註記は嵯峨の竹林房法印靜嚴の前には大卷のつぎ紙一巻あかれたり。範顯僧正の前には釋柏子一帖あかれたり。是は源空いさゝかも法門に煩たらは打々とうち。えらべ立べき料と見えたり。凡月支震旦はえらす日本一の宗論たり。さる程に座敷さだまり東西もえづまりけり。此時第一番に顯眞僧都問て云く速疾に生死を離れ解脱を得るは。眞言。止觀。華嚴。禪門等を以て最上とし。至極とすることいかん。源空答て云く法門無盡なれども其急要を論ずるに淨土の法門をもつて勝れりとする。諸教廣多なれども。其肝心をさぐるに他力頓教をもつて勝れりとする是則ち修し易くして功高し。行じ安して理深きか故なり故に廬山師の云く。諸の三昧は甚多けれども功高くして進みやすき事は念佛を先とすといへり。元照師のいわく念佛三昧は。具縛の凡愚屠沽の下類も刹那超越する成佛の法なりと言ひ此等師の意淨土の教法。念佛三昧をもつて大乘至極速疾解脱の最要とすと聞えたり

廬山師は尋陽匡廬山。東林禪寺慧遠法師なり。廬山は南康府の西北二十里にあり古周の武王の時匡俗兄弟七人。此山に廬を結んで隱居す故に具には匡廬山と名く其山高き二千三百六



十丈周二千五百里也。慧遠は師の諱。姓は賈氏鴈門樓煩の人なり唐の大中戊辰年。辨覺大師と諡す南唐の昇元三年に。正覺大師と諡す。宋の大平興國三年に圓悟大師と諡す。宋の乾道二年。等徧正覺圓悟大法師と諡す。諸傳に委し今爰に廬山師を引證の初とす誠に知ぬ淨土宗自立の義にあらざと漢朝の元祖を出す。是他をしてあらしめんと欲するか。樂邦文類に云。淨土に生るゝを勸む固に大覺慈尊より出。然して此方の人をして念佛三昧あることを知らしむるは應に遠公法師を以て始祖とすべしと云云

諸の三昧とは法華に十六三昧を説。涅槃に二十五三昧を説。樂若に百八三昧を説。加之大經に百千三昧と説。法華には百千萬億恒沙等諸大三昧と説。仁王には無量諸餘三昧ととく是等のごとき諸の三昧の中に於て功高く進易きは念佛を以て先とす。是を以て念佛三昧經に三昧王と説り。即此謂なり。問云何の故ぞ諸の三昧の中に唯念佛三昧のみ功德高きや。答云諸の餘の三昧は各一隅を守つて諸の徳を徧くせず。唯この念佛三昧のみ諸徳圓備せり故に大論七云復次に念佛三昧は能種々の煩惱及び。先世の罪を除く。餘の諸の三昧は能婬を除くと有て。瞋を除くと能はず。能瞋を除くこと能はれども婬を除くこと能はず。能痴を除くと能はれども妬を除くと能はず。能三毒を除くと能はれども先世の罪を除くと能はず。是念佛三昧は能種々の煩惱。種々の罪を除く云云。五會讚に云く然るに念佛三昧は。是眞の無上深妙の

禪門なり(乃至)修し易く證り易し。眞に唯淨土の教門なりと云云

元照師は佛祖通載十九云錢唐靈芝寺律師元照。字湛然餘杭唐氏の子。少くして祥符東藏惠鑑師に依て。毗尼を學ぶ神悟謙公に見るに及て天台の教觀を講ず。博く群宗を究め律を以て本とす。又廣慈に従ひて菩薩戒を授る。戒光登現して頓漸律義兼備せすといふとなし。南山の一宗蔚然として大に振ふ常に布伽梨を披て錫を杖て鉢を持。食を市に乞ふと云云。佛祖統記廿八云。元照は靈芝に住す律學を弘む。尤意を淨業に屬す。一日弟子を集めて。觀經および普賢行願品をよみ。加趺して化す。西湖の漁人みな空中に音樂を聞くと云々

屠沽の下類とは牛羊の肉を割て。これを賣を屠といふ酒を造りて是を賣るを沽といふ。皆賤き者なり。故に下類といふ

第二番に永辨問て曰く今此淨土宗は。權實の二宗の中に權宗なり。漸頓二教の中に漸教といふべき哉。其故に此宗は眞如實相第一義空の理を明さず。只厭苦欣淨指方立相の旨を宣ふ。而るに何ぞ此教を以て大乘至極の頓教とするや源空答て云く。淨土宗は實教なり。是故に或は眞宗といひ或は頓教と名け或は一乘と名つくるなり。但し通途の權實はみな自力に約してこれを明す。弘願の一法に於ては偏に他力に就て之を論ず。まかれは實教といへども自力の實には異り。頓教といへども聖道の頓には異り故に權に似て權にあらず。實に似て實にあらず。漸に似て漸



に非ず。頓に似て頓に非ず既に權實漸頓の所攝にあらず知ぬこれ諸宗超過の法門なり。但し權實の所攝に非ずして強て眞實の名を立つ。而し他力眞實の躰を示す漸頓の所攝に非ず而も假に頓教の稱を與へて。横超横截の用を顯はす。是故に和尙の云く。我依菩薩藏。頓教一乘海と云云元照の云く故に志んぬ。一切淨土の法門は皆これ大乘圓頓の法なり。定めて徧小にあらず。此等の所釋たれか依用せざらんや

永辨は繪詞傳に云く。惠光坊永辨法印は。證眞法印の立義の師なりと云云。第三に智海問て曰く大乘眞實の理を明す。是實教と名く是心是佛の旨を存ず。是を頓教と名づく。今此宗には生佛一如の道理を明さず。志かも偏に厭離穢土の安心をすしめ。寂滅無生の實義をのべず。而も僅に欣求淨土の起行を談じ。専ら權門漸教の法門に附傍す。全く圓實頓速の宗義にしたがはず縱ひ事を他力によすといへども。實頓の名尙以て心此れを得がたし。いかに况や權實の所攝にこえて剩さへ超過の義を論ずべけんや源空答て云く。疑難の趣きは偏にこれ。自力修行の道理に約して漸頓權實の差別を存ず。全く他力弘願の密意の教門なることを知らず。悼べく悲むべし。夫諸佛の法は眞如佛性を以て躰性となし。無相泥洹をもつて所期となす此理をはなれて外に全く別の法なし。然らば三世の諸佛の化導は必ず聖道淨土の二門を設るとは。二種の勝法ともに無相無念の一理に入しめんが爲也。所入の理は同じといへども能入の門に自

力他力の別あり。自力を劣りとし他力を勝れりとす。其聖道門とは是につひて二あり一には漸二には頓なり。頓につひて又二あり。所謂教内教外これなり漸教といふは所謂つぶさに万行を修して漸く佛果を感ず修行の時ながく。成佛の道遠し。故に漸と名づくるなり。又名づけて權教といふ。俱舍成實律宗法相宗等此意を出ざるなり。頓教といふは五乘もはからざる眞如を以て。還つて蠢々の心に納め十聖もきわめかたき法性をもつて。元來不動と談ず。證果を刹那に究竟し。悟道を一念に圓滿す。故に頓教と名くるなり又名けて實教と云ふ。眞言佛心天台華嚴等正しく此意なり。此等の漸頓の諸宗。其法門一途にして万機にわたらず。或は漸或は頓。唯一機に被らしめ。若は權若は實。ひとへに一機に攝す。故に即ち施。即ち廢して妙道遠く沾わす。故に釋に云く。漸頓則ち各所宜にかなふ。機に隨ふものは皆解脱を蒙る。志かるに衆生障重くして。悟をとるもの明らめがたしと云々又云く或は人天二乗の法をとき。或は菩薩涅槃の因をとき。乃至。根性利なるものは皆益を蒙る。鈍根無智なるは開悟しがたしと云云次に淨土門とは是につひて二義あり。一には他力本願の實躰二に他力本願の化用なり。初め他力本願の實躰といふは。所謂佛の密意なり亦此佛智所照なり。およそ聖道淨土の二門は共に眞如實相を以て其躰とするなり。故に前の聖道門の中に明す處の無塵法界凡聖齋圓の理。恒沙の功德。寂用湛然の性すなはち。是他力の實躰なり。五智の中の佛智とは此理を指すなり。次に



他力本願の化用といふは密意の上の教門をいふなり。又是四智の所成なり。極樂遠からずして志  
 かも十萬億刹の西にかまへ。彌陀己心にありて一座花臺の形を現す。不思議智不可稱智等は。此  
 善巧方便を指なり。實におもんみれば。真如界の内には生佛の假名を絶し。平等性の中には自  
 他の差別なし。真如は自にあらず他にあらすして。まかも自他の性を包。かるがゆへる。眞に  
 自他を薰習して。平等性の性海に會入せしむ。應に知べし自力他力といふは是れ則ち強弱の義  
 なり。それ薰力弱きときんば。冥薰密益すといへども。行人みづから勵まされは。道果を  
 得ず故に自力といふ薰力强きときは諸佛外護の智識となりて。増上縁をほどこす。故に他力と  
 いふなり。強弱ありといへども。俱にこれ真如の力なり。ゆゑに真如界の佛。平等性の衆生の  
 爲に。一心法界の理を開示せんと欲するの所垢障覆深の凡夫自力を以て。自己の淨慧を顯照し  
 がたし故に。諸佛無極の慈悲衆生迷倒をかなしみて。法藏發心を示現し超世の弘願を發起し。易  
 行易修の口稱をもつて願悟願入の往生を得せしむ。他力の實體こゝに顯はれ易く。弘願の化用  
 忽ちに成じ易し曇鸞法師は實相爲物の二義に約して如實修行の相を釋す此意なり然は即ち因は  
 少く果は多ひに行は淺くして而も悟の深きとは他力願大の教へにしくはなしと。是を以てこれ  
 を言ふに願の名は同じといへども諸宗の願にこえ。實の名は同じといへども。餘教の實には勝  
 れり。思ふて知ぬへきものか。凡そ他力の法門に於ては諸宗の談せざる處。諸師の判せざる所

なり善導和尚ひとり此宗義をたて我宗の祖師はじめて此宗門を開くものなり。凡そ聖道自力の  
 法門は諸佛無極の慈悲をのへ盡さず無塵法界の上。他力弘願の躰用をあきらむると有べからず。  
 淨土の正宗ひとり斯の如き法門をあかすまければ他力の大道は。廣弘にして五乘ひとしく通入  
 す圓々極々無相無念の果成の上に無方難思の大用を起す有相の修因はり直に無相の樂果に入し  
 め往生のを見を抑て。無生の理を躰達せしむと。何の教への中に斯の如き法門を明すや  
 智海は繪詞傳四十一に云く。檀那院の嫡流智海法印は。毘沙門堂の法印明禪の師なりと云々  
 叡山に久しく住して。天台の碩學なり  
 第四番に叡山の東塔竹林坊靜嚴法印問て云く。眞言佛心天台華嚴みな直に眞如の淨慧をあらわ  
 す事を期す。是れ則ち上根利智の機のために儲けたる所の法門なり下根下智は垢障覆深にして  
 敢て此利を顯照する事あたわず。是が爲に淨土の化義をまうけ口稱の一行を授け。彼土に引入  
 して後に見佛聞法の縁によつて無上法忍を悟らしめてはしめて眞如の理に入事を得せしむ是を  
 もつて之を謂に。聖道淨土おなじく眞如の所期とすといへども淨土門は猶これ迂廻の道なり願  
 ど名くといへども。華嚴法華の願には及ぶべからずいかん。源空答て云く此難大抵さきに會通  
 せしむるなり。根機に於て利鈍を論ずるに相望不定なり。聖道の一門について是をいふ時は漸  
 をは鈍と名づけ願をは利と名づく聖道淨土相對ふ時は。惣して聖道門を利と名づけ淨土門を鈍



と名づくは一往の義なり如何となれば修しがたくして能修し。悟り難くして。能悟るが故に。聖道自力の人を利根と名づくる也浄土門は入安く行じ易し。故に難きを捨て易きをとするの邊は。一旦鈍根下機に同じ。然りといへども。再往これを論ずるに。聖道浄土の二門をのく利鈍あるべし中に就て浄土門の中。利根有智の人他力實躰の智を得。無塵法界の理の上において洄沙功徳の化用を施し垢障覆深の凡夫を攝して淨躰顯照の悟を得せまめ。始て本願他力の大道に入て。頓に廓然大悟の無生を證す。全く聖道門の上智利根の人に劣るべからず。凡そ聖道門の諸教は。利鈍ともに究かたし。與へてまかもこれを云は。隨緣一途の益をゆるすといへども。森ふて而も之を論するに万か中に一も之を得かたし故に道綽のいわく。仰でもんみれば大聖三車の招慰且く羊鹿の運也。權に息て未だ達せず。徑に大車を擧るも亦は一途なり唯おそらくは現に即位に居して險徑はるかに長しと云云浄土の眞門は極惡最下なを以て捨すいかに况や上根をや本願の密意弘深にして他力の教門頓速なり。利根なんそ入ざるべけんや智者さらには是を思擇すべからざらんや。但し直入迂廻の邊に至つては。自力については是を云ときは誠に此上において證入を期す。是直入なり。佛國に往生してさとりを得れば迂廻に似たりといへども。横超斷の邊に約せば。有相の念によつて無生の國に入る。遙に聖道の直入に超勝せり。如何となれば自力直入は眞如はあらわし難く。法性はきわめがたし唯是有教無人。有名無實なり往生浄土

の頓入は。眞如法性を以て法藏の行因にきわめしめ佛智の所照に讓らしむ。是を他力實躰。弘願密意と名づくる也。この證悟を以て頓に善惡利鈍の凡夫を開悟せしめんか爲に發し給ふ所の超世の本願なり。故に諸宗の頓法に超て。此道理を顧みず。浄土の一教を以て。くだして下根最劣の法とすべからざるをや

靜嚴は繪詞傳三云く延曆寺東塔竹林房靜嚴法印。吉水の禪房に至て。此度いかにして生死を出離せんやと。源空こそ尋ね申し度侍れと答へ給ふ。法印云く決擇門は去ることにて。出離の道に於ては。智徳に至り道心深くましませば定て案立の義さふらわんと申さるれば。源空は彌陀の本願に乗して。極樂往生を期する外には全く知ることなし。法印又曰く。愚意も美言を承つて愚案を堅せん爲に尋ね申す所なり但し妄念競ひ起り侍るには如何せん。上人の云く。これ煩惱の所爲なれば。凡夫の力に及ぶべからず唯本願を憑んで名號を唱ふれば佛願力に乗して往生を得ると。法印信心決定して。疑念たちまちに解す往生更に疑ひなく退出し給ひぬ云々問て云く。法印既に疑念たちまちに解す。今何ぞ此問を發するや。答て曰く但し問の意を知ぬべし

第五番に明遍僧都問て云く。禪宗には教内教外を立て而も教外の一法をもつて諸教の法門を取拉ぐ。眞言には顯密の二教を判じて。顯教をもつて遮情門とし秘密をもつて表徳の法とす。乃



至天台には五時八教を立て超入醍醐の法をもつて。三五七九の諸法の上に置く。此等の諸宗皆以て深奥なり。輒く其境に望みがたし。然るに今。教内を以て教外を下し顯教をもつて密教にこへ爾前をもつて法華を嘲ること。諸宗の人これを許すべからず如何。源空答て曰く。凡そ宗を立てる法は各自宗の法を以て勝れりとし。他宗の法を以て劣れりとし。其義問端にあらはれたり。苟も疑執を懐くとなかれ此故に禪門には教内を以て劣れりとし。教外を以て至極とすといへども。而も是は此一宗の執見なり他宗に全く是を許すべからず故に眞言には秘密を以て最上乘の法とする時禪宗の無心絶想の義なを是顯大遮情門に屬すべきなり自餘の諸宗これに准ずべし。今淨土宗の意は漸頓の諸教みな眞如佛性を以て所期とするといへども。志かも自力の修行は解しがたく入かたきなり。故に劣りとし。念佛往生は施戒忍進をも修せず禪定般若をも學びず觀法觀心をも用ひず身印口誦をも假ず。坐禪工夫にも依らず。唯他力口稱の易行をもつて直に極樂無爲の寶國に入る。頓悟頓入の功德。はるかに諸宗の法門に超たり故に勝れりとするなり。此故に永觀の曰く實に知彌陀の名號は殆ど陀羅尼の徳にも過たり。又法華三昧の行にも勝りたり唯佛名を稱れば直に道場に至る况や淨土往生せんと豈留難あらんと云々

第六番に貞慶問て云く。他力の頓とは往生以後の得悟自力の頓とは。現世に即ち證入す聖道をもつて勝れりとし。淨土を以て劣りとすべきをや。源空答ていわく聖道門の人即身の證を期す

と雖ども唯是自力にして他力の持なし故に現世の證入は方が一もこれなし。縦ひたまく證悟の人有りといへども。強て無塵法界の一理にとまりて。他力洄沙の功德。無方無礙の化用を出さず故になを佛法の至極を知らざるなり。淨土の頓教とは或は現世或は次世。根の利鈍にまたかつて。證入疑ひなきがゆへに。猶これ勝れりとするべし

貞慶は藤原尙書貞憲の子なり。母夢に。高祖來つて自ら稱つて貞慶と云ふ。懐に入ると見て即ち懷妊す。成長して後薙染し書を母に奉る巽に。貞慶といふ母夢想の名と同じきをもつて奇とす。興福寺に投して出家せしむ才の譽あり。最勝講の詔に應ず。志かれども貧しくして乗物奴僕を人にかる。會衆みな其破れし衣を匿に笑ふ講已て直ちに笠置の窟に入て止る。解脱上人といふ。法相宗にして天台淨土を兼。碩徳なり建曆三年二月二日卒す年五十九云々

第七番に證真問て云く此宗の習ひに此土の入聖得果を許さず。なんぞ現世證入といふや。源空答て曰く。此事誠にこれと思ふべし。但し韋提希夫人第七觀のときに於て。大悟無生を得るを。和尙これを釋して證得往生と云々。これすなはち最上利根の人。他力本願の利を信知して現世に往生を證得するなり。往生とはすなはち無上なり。此義かさねて思釋すべし。第八に顯眞俗都問て曰く。和尙の意淨土の法門にあひて無相離念の義をゆるさず何ぞ今無塵法界の理をもつ



て名號の實躰とすといはんや。源空答ていはく有相は修因に約し無念は果證をさすなり。諸師此ころを得ず。修因感果ともに無相の義を存じて有相の願求を捨。故に是を破するなり。他力の實躰を論ずるときは。和尙の心無相離念の義をゆるすべきなり。故に釋にいはく無生寶國はなかく常たりと云々。又云く彼無生を見れば自然に悟ると云々又いはく覺えず真如の門に轉入すと云々。又云く法身常住にして比する虚空の如しと云云。第九に湛數問て曰く。天台宗の意は權教みな有教無人也圓教に非ずんば成佛の法なしと云ふなり。淨土宗の意又念佛往生の外に出離解脱の法なしといふべきかいかん。源空答て曰く。立宗の習ひ。廣く教相を判じて。衆機を納むといへども終に一味の法に歸するなり。小乗は猶所學の法に於て至極の想をなす。如何にいはんや大乘をや。故に諸宗みな我所立を以て至極とし他の所修を以て方便とす。まからば淨土宗に聖道淨土の二門を立る本意は。一往二門をのく其益を許すといへども再往これをいふ時は聖道の益を奪ふて淨土の一法にとり入るなり。此故に眞言止觀の妙行も證悟のときにいたつては必ず淨土の果報を得。華嚴禪門の悟入も解脱を遂る日は自然に法王の家に至るべし佛土に至つては必ず。佛身を念ずべし諸教みな念佛なり淨土の中には極樂を最とし、諸佛の中には彌陀を本とす。彼佛はこれ淨佛國の主。諸佛慈悲の躰なり往生と云は諸教諸宗の悟道の時の名なり茲に知ぬ未だ悟らざるの前は暫く隨緣の執情に封せられて自力の得道を期して淨土

を願はずといへども得悟の後にはかへつて泥洹の樂邦に入て終に道場の妙土にいたるなり。三世の諸佛はみな念佛三昧に仍て正覺を成すとは此意なり是を思ふべし。第十に俊乘房重源問て云く。一切往生の行人必ず生無生の道理を知り。名號の躰用の義理を心得て。淨土の行を修すべき哉源空答て云く爾あらず今他力の躰用を明すとは。淺深を論ずる時宗旨の原つくる所をまらしめんか爲なり是智者の知る所なり。一切の行人これを知べしといふには非ず。例せば三心具足の行人かならず淨土に往生すと經釋ともにのべたり下智愚鈍の族。田夫野客の輩。なを三心の名義も暗し。まかるに彌陀の名號を稱するものは必ず往生を得ると信すれば自然に三心を具足するが如し。名號の躰用の義を明むるとも又以て是に準ずべし造罪の凡夫。具縛の底下。一念十念の功力によつて。決定して來迎にあづかると信知すれば。即ち是他力の實躰を信じ。生無生の道理を心得るに當るなり。如何となれば。極樂はこれ無漏眞實の勝相。泥洹無爲の樂邦なり煩惱具足の凡夫容易以て入がたしまかるに而も他力本願の不思議によつて罪障の輕重を論ぜず戒行の持犯をも言ず稱ふれば必ず生ると信すれば自然にこれ當に名號の躰用を心得るにあたるなり。他力を離れて是をいへば此義誠に成ずべからざといへども。他力により佛智の照覽にあづかるに依て是を云ふ故に名號を信すれば。則ちこれ躰用を信する義なり。第十一に顯真問て云く他力往生の義猶もつて明かならず罪惡の凡夫佛の願力に託して。無漏寶



因に生ぜば。他作自受の義にあたる。因果の道理に叶はずや。源空答て云く。凡そ具如法性の理は。自に非ず他にあらず。修固もなく。感果もなし。無因果の中に強て因果を論ずるの時。既に自の修因によつて感果すといはば。何ぞ又他の縁によつて感報せしめざらん。彼縁覺の聖人。飛花落葉の因果を待て。煩惱を斷じて道果を證す。草木無心なるを猶修道の縁となる。况や彌陀誓ひを發し給へる。往生の便とならざらんや。但し聖道門の意は行者の自行猛利なる時は。他佛加被を垂給ふか故に。自力はつよく他力は弱し。故に只これ自力にして他力の持つとなきをいふなり。淨土門の意は三心を發し名號を稱へて。造惡をも止ず。妄念をも息されば。行者の自力は至て弱し。然るに佛願力つよくして惡業にも障られず妄念にも染られず。名號を稱へて必ず往生を得ることは。本願名號の力は強く。行者の自心の功力はよはきなり。故に他力往生といふなり。是又因縁果報の義にそむかず。一向の他作自受にもあらず。強弱の義を約して。自力他力を分別するなり。第十二に永辦法印問て云く。罪業妄念は任他。みづから専ら稱念すれば必ず往生すべしと許さは。人みな惡見に住して惡業を恐れず好で衆罪を作り。妄念をおこさば返つて惡趣に墮すべきなり。まかれれば一往先惡を制し。妄を止むるを以て安心の而として。鹿強の罪をおそれしむべけんや如何源空答て云く諸惡莫作諸善奉行は諸佛の通戒なり。まかるに造惡の凡夫も念佛にて往生すといふ義は全く。このみて惡業を造り妄念を起せ

と云ふにはあらず今惡趣の苦果をおそれ。淨土の快樂をねがふ者は専ら三業の罪を制斷し三業の善を奉行すべしと此道理を知るといへども愚痴の凡夫なれば更に妄念惡業を制止しがたし。此事歎てもしかも餘りあり。おそれるべし。此に彌陀の本願は斯の如きの凡愚を救はんが爲めに。易行易修の名號を以て。犯罪の咎を點せしむ。此意を得るの徒。なんぞ事を他力本願によせて。好て大惡を造べけんや。縦又煩惱強盛なるによりて。婦酒肉辛を禁せず。貪愛瞋憎をやめざるものは好んで惡を造るに似たりといへども唯是本性のいたす所なり本願を頼むによりて。今更に是をなすことを許すには非ず。まかれれば鹿強の罪におひては聖道淨土ともに後世を恐るゝの人。なんぞ是を禁ぜざらん細隱の罪にいたりては。聖道といひ淨土といひ。誰かこれを制止せん。およそ造惡において輕次重の三品あり五逆は重罪なり。是を造るものまれなり。在家の十惡の中に殺盜の二罪は。たまくこれを禁ずること有りといへども。自餘の八罪は盛んに是を犯す。出家の罪に於ては。持戒の人あれば破戒あるへし。戒法を持つ人なくんば何によつてか毀犯するにあらん。無戒の僧尼におひては在家と差別なし縦ひわつかに婦酒肉辛を禁ずといへども。唯是一旦の制禁なり。妄念を止すんば戒行具足といふべからず。然るに虛受信處不淨說法等の自餘の衆罪稱て計べからず禁ずる所の罪はわづかに一兩なり。犯す所の惡は數に過たり。斯のよき造罪の徒。自力を以て争か解脱を得べけんや。此故に他力本願の誠



罪増上縁の功用を頼みて念々の稱名を以て隨犯隨懺するなり。但し惡見を禁るを。安心の而となすべしといふにいたりては犯罪のもの解脱を得すといふは。是聖道門の安心なり。惡業を造るといへども名號を稱れば往生を得るといふは。是淨土門の安心なり。此ゆへに聖道を捨て淨土に皈する濫觴は罪障を制しかたき故なり。若し夫れ罪業を制伏し妄念を息べくんば。戒定慧の三學いづれの法。これを修行せざらん。故に知ぬ此見を成ずる人は。永く他力本願を信ずべからざる者なり。努々是を思ふべしと。淨土宗の義理。念佛の功力彌陀本願の旨を説給ふと明々たり。さる程に言口に定めし本性房も。默然として信伏し畢ぬ。願眞僧都は双眼より紅涙をながし。集會の人々も悉く歡喜の涙を流し偏に皈伏渴仰す源空重て曰く。予遁世の當初より。衰老の中頃に至るまで。竊に一代の教文を披きて情出離の要義を案ずるに。顯につけ密につけ開悟容易ならず。事といひ理といひ修行成就しがたし。一實圓融の窓の内には。多年即是の妙觀につかれ。三密同躰の床の上には今に現世の證入を失ふ。然る間涯分を量て淨土を願ひ。他力を憑で名號を稱ふ。誠に往生極樂の教行は直至道場の目足なり。有智無智誰の人か皈せざらんや。而に諸宗の行人おもへらく。口稱の念佛は偏に愚鈍の機に被らしむ。全く眞言止觀の妙行に及ばず。更に華嚴禪門の宗旨に勝がたし。一文不通の頑魯に於ては自ら往生の一路を欣ぶといへども。利智精進の根氣に至ては唯現世の證入を期すべしと云々。或は云く念佛往生は易

きに似て易からず。如何となれば。十惡五逆を造るといへども。深く改悔の心を發して。後に重ねて之を犯さるるがゆへに往生を遂る也。罪業を制止せずんば縱名號を稱すといへども。往生すべからず。又一念十念の往生は妄念異念を休息して。一心不亂に之を行す。餘念相交り妄心雜起せば。行業成すべからず。故に知ぬ念佛三昧は若は持戒清淨。道心堅固の人。若は智慧深遠勇猛精進の徒。罪障を制伏し。餘念を休息して是を修し之を稱すべしと云々或は勝の儀を許せども易の義を許さず。あるひは易の義をゆるすとも勝の義を許さず。悲しひかな斯のときの輩。諷に其一を知て未だ其二を知らず。伏惟は眞宗の法門は稍古今に異なり文の大意を知らざるの人。宗の元由を辨へざるの輩。妄りに弘願他力の淨業を輕しめて空く聖道自力の修行に疲る。極樂は是泥洹無爲の界。諸佛法王の家なり縱ひ利根なりといへども而も往生を欣ぶべし。况や鈍根をや縱ひ上智なりといへども而も他力を憑べし况や上智をや十方佛土の中は唯往生の法のみ有て二もなく三もなし佛の隨縁の說を除く乞願くは。畢覺異見の張別解別人。はやく邪雜の執をあらためて專修の門に入へし。弘願の一稱は万行の宗致なり誰か是を行ぜざらん果號の三字は衆徳の根元なり。敢て之を嘲るとなかれ。人をして欣慕せしむるの教門は暫く淺近に似たれども。自然に悟道の密意を究めて是深奥なり。一念に佛意に契らんと欲するものは極樂を願ふべし。一世に行業を成んと欲せば彌陀を念ずべし。於戲釋尊出世して衆



生を濟度したまふに化道百億に遍く。利益三千に普し化縁の薪盡て正像はやく過ぐ。我等生を五濁六惡の末法に受く罪を四生十惡の業道に感す。善根薄少なり。根性遲鈍なり戒行持しがたぐ定惠證し難し。妄りに其分を在世の正機によせて。現世の證入を期すべからず。暗く此身を正像の賢聖に同ふして自力の得道を恃べからず。况や在世の頓悟頓入は多くは是權化の示現なり。正像の得道得果は。恐らくは實業の衆生少し末代の機根に準望するに。足らず當今の凡愚に比拔するに及ばざる者か然るに彌陀の名號に於ては。極善最上の法なり。造惡の凡夫なりといへども。之を修すれば往生するを得る。他力難思の行なり。具縛底下なりといへども之を信すれば來迎に預る。其則ち念佛に於て勝易の二義あり。勝の義といふは。謂く至極大乘の意は體の外に名く。名の外に體なし。万善の妙躰は名號の六字に即し。洄沙の功德は口稱の一行に備ふ。大願強力の攝出さるゝ所。万徳を行者に讓與せしめ他力難思の巧方便なれば。一稱を善に超過せしむ。知識廣讚すれば。猛火涼風となる。善友教へて稱れば。金蓮果日の如し大利の名號は無上の功德なり易の義と云は行住坐臥を論せず。是を修すれば來迎に預る。時處諸縁を謂ず是を唱れば往生を遂く是則ち身心の濁亂によらず。唯他力の引接に依る故なり凡そ聖道自力の修行は罪惡を制止せず。妄念を休息せずんば。其行成就するとなし。生死罪濁の心泥。萬行水精の珠を穢すの義譬て知るべし此則ち珠の力用弱きが故に水清ず水澄ざれば光色顯はれ

ざるなり本願名號の躰はまからず一生造惡の凡夫相續妄念の衆生なれども隨犯隨懺すすれば衆罪を消除し。唯願唯行すれば淨刹に往生す。此則ち彌陀如來の至極無上の淨摩尼珠は。凡夫罪濁の心水に穢されず。珠の他力強きによつて無量死生の泥濁。頓に無漏法性の清水となる。譬へて思ふべき者か。凡そ廢惡修善は佛教の正意なれども。廢すれどもく廢られざる何んかせん。息妄修心は行道の大途なれども。息すれども息すれども息られざる何んかせん。唯すべからく彌陀の本願を憑むべし。只須く他方の名號を唱ふべし。此則ち造惡の上に廢惡の法なり。妄念の中の息妄の行なり。佛法修行の中に是より易きは有べからざる而已と。他力本願の名號。濁世末代機教相應して出離すへきはし聞からず。之を説たまふに。聽入たる三百餘人。一人も疑ひの心なく。人々虚空にむかふが如く。言語を出す人なし。碩徳の僧侶讚して云く。形をみれば源空上人。實をおもへば應惑の彌陀如來かと疑がはる。顯眞僧都は落涙しひびがたく。一心丹誠を抽んで自ら香爐をとりて持拂堂を旋遶し。行導して高聲に念佛を唱ふ。南北の明匠も。西土のをしへに皈し。信男信女參禮し。聽衆の老若の諸人。心中の誠を凝し。各異口同音に三日三夜の間。高聲に不斷念佛を修する其ひびき山谷に滿。林樹を動かす。故へに信を發し縁を結ぶ人多かりき。顯眞僧都は餘行をさし置き一向專修の行者となり給ひ。自らの出離ひとへに。念佛往生を期し給ふのみに非ず。他人をもしばくすゝめ給ひける。去は



どに妹の尼公を勸めんが爲に。念佛勸進の消息を遣はさる。世間に流布して顯眞の消息と名づく(文章略之)奥の宛書に文治二年十二月廿九日。護摩堂尼御前へと云々。顯眞專修の身となり。念佛を行とし給ひしと此消息に明なり。又十二人の衆を定めおきて文治三年正月十五日より勝林院に不斷念佛を始め行はれしに。顯眞十二人の隨一にして。戌の刻をぞ勤めたまひける。開闢の夜は十二人皆參し行道して同音の念佛を修するに。毘沙門天王列に立給ひけるを。顯眞眼前に拜み給ひしとなり又一の大願を立て此寺に五房を建立し。一向稱名を相續して。餘行を交へず勤めんと。其願空しからず終に文治三年十月に成就しけり。池上の阿闍梨皇慶の舊跡。護法守護の靈地に五房を建。楞嚴院安樂の谷をうつして新安樂と號け。性智房境智房佛智房勝智房妙智房と號しける又灌教上人も願を發して。來迎院松林院等にして。不斷念佛をはじめたまふ尤も此時まで。源空上人の勸化いまだ半なりしに。既に大原の問答に勝たまひしかば。日本一州皈依ますく繁昌し。有難かりし事どもなり

大原は京師の北山にして。叡山の乾にあたり。八瀬の里北一里にあり若狹往返の街道にて。東西すべて八箇村あり(端戸寺村。上野村。大長瀬村。來迎院村。勝林院村。井出村。草生村野村等なり)此に山門の別院凡そ四十八院ありて。立禪寺は勝林院の内にとぞ來迎院松林院は此別院の名なりと云ふ。今大原に魚山勝林寺といふ古刹あり。是宗論ありし舊趾に

して本尊を證據の阿彌陀と稱す座像にして長七尺。佛工の祖庸成の作なり。寺記にいはいく當院は一條左大臣雅信公の息。少將入道寂源法師の草創なり。往昔叡山の僧都。卒覺超同靜慮院の偏教とていみしき智者のちはしけるが此如來の前に於て佛果の空不空の議論ありけり。覺超は不空といひしに如來相好を隠し偏教は空の義を立たまふに。かへつて相好を顯し給へり。然れば中道實相こそ如來の本意なれといふと。此に於て顯れぬ。夫より世人證據の彌陀と稱しける。又文治二年の秋法然上人と山門の僧徒顯眞法印を始め諸宗の碩學と一向專修の問答侍しに法然上人の談論あるときは。本尊光明を放ら給ふこれを大原問答といふ諸宗の知識みな工人の弘法に伏し。顯眞も忽ち專修の行者となり則ち法泉房に住給ひ。稱名念佛絶ずと云々又寺門の傍に熊谷腰掛石(律川の橋の詰にあり蓮生法師此所に腰をかけて法門の勝劣を聽聞しけると云傳ふ)鉞捨藪(呂川の傍にあり大原問答のとき蓮生房。鉞を袖にかくし携へて法然工人の供奉す。蓮生云く師もし對論にまけたまふとあらば。法敵を打ころさんとの用意なりと。上人これを聞給ひ。大いに制し給ふにより。こゝに捨しと云ひ傳ふ)等の古跡あり

時に俊乘房重源一の意樂を起して云く此國の道俗男女閻魔王宮に至て。跪て交名を答ふる時。佛名を唱しめんが爲に。阿彌陀佛の名を付べしとて。先吾名を南無阿彌陀佛とす。是我朝に



ひて阿彌陀佛の名を付るは此時より始まれりとぞ(今何阿彌と號するは阿彌陀佛の略語なり)

### 三國七高僧傳圖會本朝之卷本終

### 三國七高僧傳圖會本朝之卷末

元暦元年二月七日。攝州一の谷の合戦に。本三位中將重衡卿。源家の爲に崩られ。九郎判官義經の下知によつて殿しく武士に預られ給ふ。爾後中將重衡の卿は。義經の許へ出家せばやと思ふは。免し給ひてんやと宣ひければ。義經が計ひには叶ひ難し。御所へ申いれて其御左右に依べしとて。奏聞ありし所に。賴朝に仰合せずして出家の暇を免んと。治りがたきの由仰下されければ。御氣色かくとて力及たまはず。中將重ねて出家は御免なければ。今は申すに及ばず。さらば年來相知て侍る上人を請して。後世の事をも尋聞はやと有ければ。上人は誰にて御座ぞと問奉るに。黒谷の法然房と申されける。兼て貴き上人と聞給ひければ。後世の情にと思ひつづ是を免し奉る。三位中將斜ならず悦びて。侍臣友時を使として。黒谷の庵室へ申されたりしかは。法然上人來り給ひて對面したまふ中將なくく言はく。重衡か身の身にて侍りし時は。榮花に誇り驕樂憍々の心はありしかども。當來の昇沈かへり見ると侍らず。運盡き世みだれて後。此にて軍彼にて戦ひ。人を失ひ身を助んと勵す。悪念は無間に遮つて一分の善心曾て起らず。就中南部炎上の事。公へ仕へ世に隨ふ習にて。王命と申し父命と申し。衆徒の悪行を鎮ん爲にまかり向ふどころに。側らざるに伽藍の滅亡に及べると。力及ばざる次第なりいへども。



大將軍を勤めし上は。重衡が罪業と罷成候ひぬらん。其報にや多き一門の中に。我身一個腐ら  
 れ。京田舎に罪を曝すに附ても。一生の所業墓なく拙なきこと今おもひ合せり。罪業は須彌よ  
 りも高く。善業は微塵ばかりも畜へはべらず。情も空しく終りなば。火穴刀の苦果曾て疑なし。  
 出家の暇を申侍れども。責ての罪の深さに御免なければ。頂に髮剃を宛て出家に准へ奉り。  
 戒を授り候らはばや。又斯る罪人の一業をも免るべきと侍らは。一句示し給へ年來の見参。其  
 詮今に有と宣ひければ。上人哀に聞給ひて。誠に御一門の御榮花は官職といひ俸祿と申。傍若  
 無人にこそ見えおはしませしが。今斯成給へは盛者必衰の理。夢幻のごとくなり。されば善  
 につき悪につき怨を起し。悦をなす事有べからず。電光朝露の無益の所。とてり斯ても有ぬべ  
 し。永世の苦みこそ。恐ても恐あるべき事にて侍れ。受難き人界の生なり。値がたき如來の教  
 なり。而るに今惡逆を犯して惡心を隠し。善根なくして善心に往して御座は三世の諸佛争か  
 隨喜し給はさらん。先非を悔て後世を恐る。是を懺悔滅罪の功徳と名づく。抑淨土十方に  
 稱へ諸佛三世に出給へども。罪惡不善の凡夫入事實にかたし。彌陀の本願念佛の一行ばかりこ  
 そ貴侍れ。土を九品に分て破戒闍提これを嫌ふことなく。行を六字につめて愚疾暗鈍も唱る  
 に便あり。一念十念も正業となり。十惡五逆も廻心すれば往生と見えたり。念々稱名常懺悔と  
 宣て。念々毎に佛名を稱すれば。無始の罪障ごとくく消滅せられ。一聲稱念佛皆除と釋し

て一聲彌陀を唱ふれば。過現の罪みな除かる故に南無阿彌陀佛とまうす。一念の間に能八十  
 億劫の死の罪を滅す。惡ても惡むべきは五劫思惟の本願。念じても念ずべきは此彌陀の名號な  
 り行住座臥を嫌はねば。四儀の稱念に煩ひなく。時所諸縁を論ぜねば。散亂の衆生に據あり。  
 下品下生の五逆の人と稱じて已に往生を遂ぐ。末代末世の重罪の聲も唱れば必ず來迎に預る  
 べし。是を他方の本願と名く。又頓教一乘の教といふ。淨土の法門彌陀願巧肝要斯のごとし  
 ど。善知識せられたり。其後上人剃刀をとり三位中將の頂に三度あて給ふ。初には三飯戒を  
 授け。後には十重禁をぞ説給ふ。御布施と覺しくて。口に金時たる双紙箱一合差置給へり。此  
 箱は中將の秘藏したまひけるが。侍のもとに預置たまひたりけるが。都落のとき取忘れ給ひ  
 たりけるを。思ひ出したまひて。友時をもつて召寄たまひしなり。借も三位中將は。今の知識  
 の授戒の縁を以て。必來世の解脱を助け給へと宣ひも敢ず泣給へば。上人は衣の袖に雙紙箱を  
 包み何と言ふ詞もなく。涙に咽て出給ふと云云(源平盛衰記大意)

元暦元年三月十日日本三位中將重衡卿は。兵衛佐源頼朝申請らるゝに依て。梶原平三景時相具  
 して關東に下向あり。同廿六日鎌倉に入廿七日兵衛佐殿重衡卿に對面あり。其後翌年又京都  
 へ飯され。南都の衆徒の願に任せ。山城國木津の邊の卍堂において誅せられ給ふ。(六月三日  
 といふ)今に是を哀堂と號けたり。衆徒等首を申請て。法華寺の鳥居前に於て竿に貫き。高



く捧げて是をさらす。去る治承の合戦に南都を亡し伽藍を焼失ありし怨を報す處なりと云々一説に重衡卿源空上人への布施として。松蔭硯と鏡一面とを進ぜらる。此鏡を結縁の爲とて。俊乘房重源の方へ送つかはされしかば。大佛を鑄奉る爐の中へ入れしに。飛出て竟に溶化ざりけり。故に大佛殿正面の柱に打付たりとぞ。是も又松永の兵火に罹りて焼失せしとなん言傳ふ

文治元年八月廿八日爐舎那佛の大像成就し。元の如くに磨きあらはし奉り。開眼供養あるに  
より。後白河法皇南都に御幸のよし。源平盛衰記に見えたり  
元暦元年三月十五日。權亮三位中將平維盛は。讃岐國屋島の館を忍び出。與三兵衛尉重景。石  
童丸といふ童。船に心得たる武里といへる舍人。此三人を具し給ひ。紀伊國由良の湊に渡り給  
ひ。是より陸に上り粉川寺に參詣し給ふ。折ふし此間より源空上人此地に下り給ひて。念門法  
門の談議ありけり。維盛かくと聞給ひ。與三兵衛重景を招き。態ども都に上り源空上人に逢奉  
り。後世のことも尋聞べきにこそあれども。道狹き身なれば力なし。上人たま／＼此寺に在  
すこそ幸なれ。憚りあれども。見參し奉りたく思へり如何あるべきとの給へば。重景長つて何  
の慎みか候べき。上人をは生身の佛と承る。然べき善知識こそ。後世菩提の御爲に御聽聞あら  
ん折ふしに。縦災害にあはせ給ふとても痛思召べからず。闘諍合戦の場にして身を失ひて修

羅の惡所にも生候なるぞかし。此は聞法隨喜の窓にして命を亡す事あらば。彌陀の淨刹に往生  
せんと思めさるべしなど。小賢く申ければ。然るべしとて夜に入て重景を御使にて。源空上人  
へ申されけるは。維盛高野參詣の志し有て屋島の館を忍び出。これ迄罷こし侍るが。折ふし上  
人此所に在ると聞て出離の法門一句承たきよし仰遣はされければ。上人哀と思しめして。臙  
て維盛卿を請し入奉り。見參し給ひて實に／＼ありかたくこそ思ひ奉るなれ。御身都を出給ひ  
て後。人々爰かしこにて亡ひ給ふと承るに付ては。如何ならせ給ふらんと心苦く思奉しに。  
再見參に入り奉ること哀に悦入侍り。偕もさしもの世の亂の中にはる／＼高野參詣の御志  
し。愛度も思召立給ふ事かなとて泣たまう。維盛のたまひけるは。家門の榮華すでに身に極り  
て。先帝をはじめ一族悉く西海に落下りし上は。人なみ／＼に慥れ出侍りぬ。愛ことも多か  
りし中に難波瀾一の谷にて卿上雲容屢亡びぬ。適討のこさるゝ者も世に有る空は侍らず。夜  
は終夜今や水の底に沈むと歎き。晝は終日今は敵に失るゝと悲む。とにも角にも靜心なし。さ  
れば遂に遁るまじき者ゆへに。貴き結戒の地と承れば高野にまいり出家をとげ。其後いかに  
とも成ばやと。思ふこと侍りて。屋島を出て是まで來り。不圖見え奉ることうれしけれとて其  
夜は菴室に留り給ひ。泣口説て物語し給ひけるが。曉がたに維盛少より身を放さず日毎に讀  
誦し給ふ御經あり。水の底にも沈まん時は。同く沈奉らん事罪ふかく覺え候ふ。若世になき身



と聞たまはん時は。ちもひ出して后世吊ひ給へと宣ひてこれを遣せ給ふ。源空上人請給ひてたどひ之なくとて争か忘奉るべきなれども。斯思召入て承れば。披見ん折々は。必吊ひ奉るべしとて。拜見し給へば。四半の小双紙に金泥にて書き小字の法華經なり。最哀にぞ思しける。維盛卿は今日とていまりて名残をも惜みたく侍れども。維盛を平家の嫡々として頼朝ことに相尋ねべしと披露あり。世の人口を憚れば。戒を持暇申さばやと宣へば。上人は此間説く戒のほどを聴問あれかしと存ずれども御急ぎと承れば戒を授け奉るべしとて。圓頭無作の大戒梵網の十重禁をそ説給ふ。上人結して曰塔中の釋迦は此法を説きて佛位十界の衆生に授け臺上の舍那は此戒をうけて正覺を華藏世界に唱ふ。法華一實の妙戒は能持の一言に戒珠と胸の間に研き。合掌の十指に十界を實際に安んじ。衆生正覺の直道即身成佛の要路なり。是則ち薄地底下の凡夫の一毫の善なき者。罪惡生死の衆生の出離の期なき輩。修行覺道に入ずとも速に佛果を成ずる計。此戒に如はなし之に仍て梵網經には。一切有心者。皆應攝佛戒。衆生受佛戒。即入諸佛位。位同大覺位。眞是諸佛子。一度受此戒者。入諸佛位同大覺位と説給へば誠に難有功德なり戒師の戒を授るは授戒灌頂とて。佛前の智水を後佛に授る意なれば。此戒を受るは即身に正覺を唱るなり故に此戒を得れば。永く不失の戒とて。一度うけて後永く失ふことなしとぞ宣ひける維盛も聽衆もみな隨喜の涙を流しけり。其後念佛の法門彌陀の本願。こまくと説給ひ。さま

く教化せられければ維盛はありがたき善知識にあひ奉るとかなど泣々立出給ひけるが。契あらば後生には必ず參會と宣ひて。夫より高野へ參り給ふ。上人も哀にもひ給ひ。遙に見送り奉り袖をぬらしたまへば。見る人袂を志ぼりけりと云々(維盛は小松内大臣重盛の子息なり)壽永元曆の間。源平の亂によつて。命を都鄙に失ふとの其數を知らず。茲に俊乘房重源。無縁の慈悲をたれて後世の苦みを救はんために。興福寺。東大寺より始めて。道俗の貴賤を勧め一七日の大念佛を修しけるに。其頃までは世人いまだ念佛のいみじきとを知らずして。勧めに叶ふもの少かりければ。俊乘房此事を歎きて人の信を勧めんが爲に。大佛殿のいまだ半作なりける櫓間に唐より渡奉る浄土の曼陀羅。ならびに五祖の眞影をかけて供養し奉らん爲。源空上人を南都へ招請して導師とす。上人領掌し給ふ五祖の眞影といふは。震旦におひて浄土の法門を述る師多しといへども。源空上人唐宋二代の高僧傳の中より。曇鸞。道綽。善導。懷感。少庸の五師を抜卒て一宗の相承を立給へり。爾後俊乘房重源入唐の時源空仰られて曰く唐土に五祖の眞影あり必ず是を得て歸朝あるべしと。これによつて重源渡唐して後普く尋需るに。上人の仰に違はず。果而五祖一幅に畫ける眞影を得たり。重源いよく上人の鑑み違はざるとをしる。彼大和國當麻寺の曼陀羅は彌陀如來化尼となりて。大炊帝の御宇天平寶字七年に。織あらし給へる眞像なり。序正三方の



縁のさかひ。日觀三障の雲の光景。人さらに辨べかりしに。其後文帝の御宇天安二年に唐土より渡れる善導大師の御釋の觀經の疏の文を見て始て人不審をばらし天平寶字七年より天安二年に至るまで。其あいだ九十六年あり。往昔我朝にて織られたる曼陀羅の遙の後に渡れる觀經の疏の文に合るをば不思議とこそ言傳へぬ。今上人先だつて淨土の宗義をひらき給ひ後に重源入唐のとき。彼影像を渡すべきよしを命ぜられ。得て販るところの影像上人の仰に違わざると。豈奇特にあらざるやされは道俗貴賤。かの五祖の眞影を拜みていよく上人の徳に歸し。倍念佛増長しけり。當時嵯峨二尊院經藏に安置するは。彼重源將來の眞影なり源空上人既に御約束の日になりければ。上人御弟子十四人を召具し給ひて入御あり上人の思召には御遁世の御姿にて御供養あるべきよしなりしを。門下一統に評議ありて申けるは其義有べからず。本朝無双の大伽藍なり。遁世隱居の事は各別の義なり。是は大法會諸佛菩薩の御影向の場なり。争か不法不義にてつとめられん事。人々の嘲り有べしとて法會の具足を上人へ送り奉る。上人力なく當寺ばかりをばとぞ仰せける。時所の衆議として。從僧大童子中童子力者人工に至るまで。皆々南都の經營なり。庭前に幢をたて。佛檀。華机。天蓋。寶散。玉珠の華鬘。高座。禮盤。錫杖。香爐。香篋。念數。散華。華籠新調美麗なり。招請の僧三十口仕出の躰は羅漢にひとし導師の躰は瑤瑤。細軟の法服に。九條の香の袈裟威儀釋尊のごとし。寅の

一天の亂聲辰の刻集會。耳目を驚かし。幡蓋風に翻し自在天の粧ひをうつし。沈香砌に蓋じて海紫岸の匂ひに類し持金剛僧の振舞は。法界官の侍從に似たり。珠幡七寶をいろへ。寶螺六端をあらはす。凡堂内の飾り供具の躰。言語道斷なり。饒鉢虚空に響きて貴賤ぬふりを覺えず。梵唄雲を穿て伽陀妙をきはめ。大阿闍梨の法義は實に智處城の教主かと疑がわれ。三飯發願の音聲は。舍衛の金言かどあやまたる。當に今此曼陀羅を解説するに。惣じて四分あり一には勸發大衆用心分。二には縁起因縁生信分三には正說曼陀羅法門分四には廻向法界往生分也。是より始めて彌陀觀音。願主の深き信心を鑑み給ひて。淨土の變相の曼陀らを織あらわし給ふ。人多く生信を賜わらしむ。正說曼陀羅法門分といふは。右の縁は觀經の序分義卷の第二。一代の法門を始として厭離穢土欣求淨土の旨禁父禁母の往生歷々たり。左の縁は觀經正宗分卷の第三にあたる三昧正受の義に趣き若男若女の觀門明々たり。下の縁は正宗分上中下品の來迎華鬘宛然として憑あり。中臺を仰けは四十八願。莊嚴淨土の義式彌陀の垂迹なり。惣じて三方の縁は釋迦撥遣の恩德肝に銘ず。彌陀如來願力所成の莊嚴觀音勢至諸菩薩九品蓮臺清淨大海衆。嚴重殊勝なり。凡定善十三觀は觀毎に念佛に皈し散善九品は品毎に往生すべき旨五箇日の間だ御讚嘆ありければ。聽聞の徒耳を驚かし。肝に銘じ涙あさへがたきが故に。偏執の族と邪見を捨て无生にいたり忽に三祇の功德を滿し。正に五智の果位に登る。然れば。三賢十地の六士四禪



六欲の大衆みな悉く侍衛す。生前は所願も満足する心地なり。凡實賤袖をまぼり衆徒袂を潤はす。慢心争ひを失ひ。伽藍も實に動き給ふかど。身の毛彌立てぞ覺へける。扱次の日より。同五祖の眞影を供養せらる。凡三國傳來の血脉。釋尊付屬の相承のく本宗を闢き。深く淨土の眞門に結成せる旨を述給へり。惣じて前後七日の間御說法の音聲解脱の赫大師の舊儀をうつし富樓那を學び給ふ。偏執の諸宗も捨劣の義を忘れ。法相至極の習學者も。我慢の旗幟をそばめて。上代も中頃もかやうの碩徳大智不思議の法門。きよ及ばざる由を褒美して退散しけり。爾後難波奈良の例人。舞樂の秘事をきわめ新羅高麗の曲を盡す。上下これを折角と見物す。扱上人御飯浴あるべき由の御出立あり茲に俊乘房重源まいりて言されけるは偕も此大佛を造し奉り。同御堂建立斯の如し。凡日本一の大善根と存じ候ふに。此間の御說法に。遂に御意に掛られず候ふ。いかほどの功德といふと御讚嘆候はず御供養は各別のとにて候らへども。當伽藍を稱揚候べきと存じ候らへば。餘所外の事にて候はず。何さまの御意にて候ふやらん定めて。經論所釋の文等候ふらんと言す。上人仰られけるは此大善根は目出度殊勝にぞ思ひ給ふらめど御邊のためには斯ほど修福造營は大苦惱とこそ見えなれ。日本のみにあらず唐土までの勸進は苦惱にあらずや。此功德念佛二三反には劣るぞと見えたりと云々此事やがて風聞ありて興福寺に聞えしかば。兩門跡の衆徒會合し

この法然房。此間の法門等は類ひなき學匠大智者と

聞たれど。是は心に大偏執を持たるものなりとて。即時に大鐘を鳴し衆會して僉議まぢくなり一僧進み出言けるは。當伽藍は是聖武天皇の御願。行基菩薩文珠の化身として建立し給へり然れば婆羅門僧正は。南浮第一と供養し給へり。斯るやんことなき大伽藍を。念佛二三遍の功力には劣といふと。これ偏執のいたす處にあらずや。速に耻辱をあたへて追下すへき者をやと云々。時に追々與力同心の惡僧七百餘人。雲霞のごとく集りたり。茲に覺範僧都の曰く當寺はこれ法相唯識のところ大乘習學のみぎん也。縦ひ經釋明文ありといふとも其憚なく。斯の如き過言に及ぶべきか。是佛意にも神慮にも違ふべき者なり。はやく押寄て追拂ふべきもの也と云々。此中にも定範僧都といふもの言けるは面々の僉議なりといへども。如此の經論所釋の證文歴然たらば争か種々の沙汰に及ぶべきか。夫は學匠義にあらず。法然房も定めて證據あるらん先子細を相尋ねて其返答によるべき者をやにと云々。これに依て。老若とも大略學匠達なるあいだ。定範の義に同して尤しかるべし。若不思議の文證あらんときは無道の強議なるべし。學匠の所存にあらずと一同して源空上人の宿房へ寄たりければ上人ははや御發駕と聞えしかば衆徒は急に遁さじと。般若寺の前にて追つき。定範法然の乘給ひし輿のまへにすかくと立寄。輿の轅をむづと握りて動かさず。當伽藍造立の功德は念佛二三返に劣るとは。私の語かいづれの經文にありやと云云其時源空の御弟子等は心中に驚き。今度南都への入御は如何候べきと申



しを。入御ありて斯のごときの珍事にもよぶ口惜さよとて各色を變ず。七百餘人の衆徒其外偏執のともがら。次手をもつてあわれ法門につまり聊にても謬あらば。耻辱をあたへんと。腕をさすつて見えたりけり上人少しも憚りたまはず定範が言もはてさるに。華嚴經を引て見たまへと答へたごふ。定範もさる者にて華嚴經は廣本なり。いづれの巻いづれの品に侍るそと。上人佛地品を引て見給へど仰せけるさらばとて上人の御下りを押へて華嚴經をとり遣しける時をうつさず經をとりよせたり。定範經をひらきければ上人其經をたびたまへ文は睡のことし各は左右なく見附たまわじとて。御手にとらせ給ひて。佛地品を巻よせて。是見たまへと仰ければ。老僧四五人立よりて。見れば十丈金色像六萬五千躰。十度造供養不如稱彌陀と見えたり上人宣わく。又妙塔勝心經を取よせ給へ引て見せ奉らん。南無阿彌陀佛一念功德勝於一百三十五恒河沙。成滿金塔者と云云此餘經釋論勝て計ふべからず。當伽藍は一佛一精舍一度造立の供養なり。此等の經文の如くは莫大の金像供養なるべし。念佛二三返の功德に劣るとは。源空が私の會釋なく。明文の如くは只一返の功德にも劣るとこそ勘へたれ。實にも斯る大乘經等の文を破りて言はれ力なくとぞ仰せける。定範いはく佛々平等なり十力四無爲長内證外用の功德皆もつて等し。何によりて彌陀を念ずる功德。諸佛の善根に勝れたるやと云云。上人宣まわく彌陀因位の執行別なり。誓願別なり成佛別なり。故に三世の諸佛に超過せりと云云。其日の辰の

上刻たり終日の問答なりしが。上人の御返答條々勝れ給ひ。且淨土の法門彌陀の名號諸敎にすぐれ。三世の諸佛の功德善根に秀肝心ともを仰せければ。各學匠にて皆々歸伏し奉りけり(此條一書には建久二年のころと云明義抄には正治二年四月とあり按ずるに正治二年は大佛供養の五ヶ年後なり志かれば文治二年の誤ならん乎凡大原問答と同年にして彼宗論の以前なるべし) 文治四年の春の頃。明遍僧都いさゝか夢想を御覽することあり。その有さまは攝州荒陵山四天王寺にいたりて西門をさし覗きて見給へば。非人乞丐其外病者など許多臥たり。看病人も又多くありて。或は飯あるひは栗柿梨等を病者に與ふるに少しは受る者はありとはいへども。病者多くは手をかくることなし茲に看病病人の中に實に慈悲ふかけなる僧ありて。米飲をさまして病者に進めて通りたまへば力づきたる病者も。大切にみえたるも皆米飲を受て飲と見たまひ。夢心地に倚ちもひ給ふやう。栗柿梨と與へたるに大事なる病者は一口たに喰ずと見たるは。斯る堅き菓物は華嚴天台等の法門にして。今此大事なる病者は。極惡最下の衆生なり。されば法は難行なり。衆生の機分は劣るなり。機法あひ相叶はぬ歟。然るに慈悲深げなる僧。看病の爲に米飲を與へて通られたるに。元氣有病者も。衰へ勞れし大切の病者も。皆々受て飲むと見ゆるは彌陀の本願なり。慈悲深き僧は善知識なり南無阿彌陀佛の名號はくだんの米飲なるべし。



機法相應して生死を離るべき瑞相を。六方恒沙の諸佛のてらして見せしめ給ふよなど。思ひ合せて。此由を源空上人に委しく書て進らせ。是ひとへに上人の御勸化の殊勝なるが故なりと。益飯伏し信心深かりしとぞ。最尊とかりし

同五年の春のころ。源空御弟子等十餘人召具して。蓮臺野（舟岳山西傍歟）に御出有し言ふやう。源空兩三年前に聊夢みたことあり。夢の實否をさるべき事ありとて。少し高き塚の上にのぼり給ひ四面を見めぐらし有るふ瀾骸を彼是と取あつめさて塚に築。行道して阿彌陀經數返どなへ吊ひたまひ

皮にこそ 男女のまなもあれ。骨にはかはる人形もなし

と詠じ給ひて暫く首をながめ給ふに百四五十もありける其中に大なる瀾骸より血の涙を流したり。御弟子等おどろきて。餘の不思議さにこれは如何なる人の瀾骸にて候らんと申すに。源空もいかてかざるべき。先かうべを火葬せよとて件の瀾骸を焼かしめ。名號を書して立歸り給ひ御弟子等に語り給ふやう。源空いにしへ敵山に有し時。同學の僧に三位註記祐尊といふ者あり。然るに或時京師に趣きしが。二三日彼處にありて。一夜失たりき。尋ねしかども其往去を知らず。次の年人の風聞しけるは人に殺害せられ亡骸は蓮臺野に捨おわんぬと聞く。是を一族どもは知らずして。空しく犬野干に荒され果けり。源空が夢に見えて曰く。我過去の宿習によりて人

に殺害せられて。空しく野外の土となりぬ。日頃の同學の好吊らひてなり候へ首は野原に存せり。天台の習學あれどもいまた得道せず。候ふとて涙を流して告たり。吾も夢ころに涙をながし。必ず吊ひ奉るべし。心易くおもひ給へと答へしかば。數よろこびぬ。ゆめさめての後も尙涙を流せり。されば正しく彼祐尊が首ならんと言ひける上人其夜の夢に祐尊來りて。御とふらひにあつかり忽ちに天上すると見給ひしとぞ。殊勝なりし御とふらひなりき

同年修明門院にして女院へ源空上人を召され。七箇日の間御説戒あり。南岳大師天台に傳へ給ひし戒品なり又慈覺大師五臺山にわたりて文珠の即身に值奉て御相傳ありし三種の淨戒。源空より傳はり給ふ戒なり。此三種淨戒といふは。一には有情遠益戒。二には勝善法戒三には勝律義戒なり。此三種の戒に十二の戒躰あり。一得永不失の大乗戒なり。此等の戒行七日御讃嘆あり。第五日にあたる朝いまた御説戒始らざるに香爐に火ありて兩三日消えず。このけふりにあたるもの。男七人女五人都合十二人臨終まで異香薫じて失はずといへり。女院上人の御目には十四五はかりなる天童香爐に火を置て。修明院の御前にて勢至菩薩大乘戒七日御讃嘆の結縁に。梅檀を焚て忉利天へ登ると言て。天をさして登ると見給ふ。餘の人々の目には雀飛昇ると見給ふとなり。又説戒結縁のときは。菽垣の元より兎とび出て垣の上に昇り高く飛あかりて。落て石にあたり頭をうちて死す。此兎の口より鬚卵ゆひたる童子。天をさして昇りおはんぬ。又畜生



なれども不愆身命の志深くして。忽ちに畜業を免れけるも不思議なりし事どもなり唐土には隋唐二代の國士大極殿にして仁王般若を講じ給ふ。今は法然上人清涼殿にして御説戒あり。同女院に袈裟を授奉り給ふ。唐の安然和尚は戒品は傳へ給ひしかども袈裟は授けられず。古今に双なき大徳なれば。彌和尚上人の位たかく。尊きことども言すばかりもなしとなむ。完に河内國の住人天野四郎といふ惡黨の張本あり。此者人の有徳なるを聞ては夜討をなして財寶を奪ひ山賊をなし海賊を働らきける。人異名をして耳四郎と名づく。一時徒弟信空の宿所姉小路白河二階の房へ。源空上人を招請申されける。其折節耳四郎都に上りて。在々所々を窺ひ歩けるが便よきにまかせ。二階の坊へ潜び入り。椽の下に盤みありて。人静らば財寶を掠んと。時の移るを待居けり上人常の御事なれば出離の要道娑婆の有爲無常。轉變の所を常住と思ひ入たる無墓さよ。極樂無爲の不退の快樂を斯すべきと彌陀本願の念佛にしくべからざる道理を説き。たま〜人界に生れながら。惡人となり程なく三惡道にかへりて。无量永劫苦しみを受んこと悲しからずやと。懸に夜三更に及ぶまで御法談ありしが。天野椽の下にありて具に聽聞せし程に何ことも打あすれ。嗚呼我身いかなる心ぞや拙きものは我より外にはよもあらじ。抑四方の人々は皆貴きも賤きも。必後世を願ふなるに。我はわづかに此身を頼んとて。種々無量の罪をつくることの淺ましよと思ひ悔みて嘆きしが。夜も既に明わたりしかば。椽の下より

徐々と這出づ。上人の御前に平伏し我身の所業の惡きはじめ。此房の椽の下に昨夜より忍入て窺ふ折ふし上人の御法門を承り先非を悔み年來の罪業を歎きて罷出候と。涙をながし懺悔しければ上人打うなづき給ひ。實に神妙に思切たり。縦ひ日來惡業を犯したりとも。今日よりして偏に念佛せば惡人攝取の本願なれば何かは捨て去るべき必す決定往生なるべしと。種々に御法門を説きとし。給ひければ夫より四郎は。無極の遁世者となりて少の罪をも犯さず。愛度かりし道心なり。然るに年來日頃うらみを含む敵ども多かりけれども。四郎が發心をつたへ聞て討も擲めもせずして有けるが。四郎は昔に引かへて腰刀に指さず有ければ人みな兼ての遺恨を捨て許しけり。時に丹波國の住人篠村新左衛門範長といふ者ありて此頃京師に滞留して在けるが三世已前に頼みとせし一族を彼天野が爲に討れしかは。何ともして此本意をどげはやと思込たりし故。たどひ四郎道心者となりしとて許すべきにあらざとて。謀略をもつて四郎を我家に賺し招き。只管に酒を勸む。天野元より上戸なるゆへ勸めに隨ひ數杯を傾け。終に醉臥して前後をまらず。人静りて後範長刀をぬきもちて宵に着せたる衣引のけ稍て刀を指立んとするに。熱醉せし四郎が息の音をきけば念佛の聲なり恠しくおもひ紙燭をともし之を見れば阿彌陀如來の御姿と幻のごとくにて。不思議にもひて聲をかけて驚かして能々みれば正しく元の四郎なり時に範長刀を投すてあゝ雖有や斯る惡人すら堅固の同心を起せばかくのごとき尊き身



となれり。我争かこれを殺さんとて。忽發心してたがひに古への敵の意を懺悔して。同道心者となれり。頓て醫をきり四郎は法名を教西と給わり。範長は善教と給わる。是偏に上人の御法門の奇特なり

一書云河内國天野四郎とて強盜の張本なる者あり人をころし寶を掠るを業として世を渡りけるが年長て後上人の敎につきて出家して教阿彌陀佛と名づけたり(中略)相模國川村といへる地に下りて住ける後。大往生をどげしと云々

建久元年二月上旬に。源空上人宣旨によつて院參し給ふ。折ふし仙洞(後白河法皇)の御所には高僧五六人參られける一人は無動寺の僧正覺圓。一人は仁和寺の僧正淨範。一人は石山の上人專祐。一人は横川の僧正眞範。一人は大乗院の僧正祐範なり。法皇この僧侶を御覽ありて宣ひけるは。今日法然上人を初として。方々參内こそ神妙に侍ればやく聖道淨土の法門出離の肝要を談せられば。朕よろこび聞し召るへしと。堀川殿承つて仰せられ。尙某御勅實に僥倖と存じ候ふ。尤慮に相叶ひたまふべく候ふと仰らる。于時無動寺の僧正申けるは。何事の肝要か申侍るべき去る文治の頃顯眞の催促によりて。隨分の碩徳達大原立禪寺において宗論の問答に。大略念佛往生決定と落居候ふ。諸宗の對判はいかやうに候らひけるや不審に存候ふと云々大乗院の僧正言し給ふ。召ありといへども今日同心に御參内稀なるべし。御參會さいは

ひに覺候ふ。君の御勅のごとく尤聖道淨土の法談申承りたくさふらふと云々。石山の僧正實に大原にての問答。のころとところの法門本朝にはよも候うまじ。まかれども君の御前にて定談なし佛敎多門なれども皈佛は又一佛なり。无動寺横河の師法は天台なり。大乗院の師法は又法相なり。仁和寺の皈法は華嚴なり。愚僧又眞言なり法然上人は。天台。法相。華嚴。三論。眞言。九宗の兼學至極の法どもを捨て無相傳の念佛を見いだし。日ごろ稽古の修學さしをき。往生極樂の一法に思ひつき。偏に稱名念佛候ふも八宗九宗は無縁にして念佛の一法は有縁なり抑愚老今日。本朝無双と披露ある法然上人に値奉不審一句申て。上人の御意を殊に蒙りたく候ふ。一印一眞言。證道諸路といへり。然れば庵の一字を胸に持ては即身の如來なり。此息を鼻へ出せば兩部の大日虚空に現ず庵の一字を舌の先にかくれば諸尊空中に満り。まかれは經には隋字三密即此法身遍照毘盧遮那得大惣持門といへり。道理を御覺悟ありながら。念佛すぐれたり立られ候はん。最不審に候ふ。心底のこさず承はるべく候ふと云々上人答て曰く。源空も御前の問答さいわひに罷存じ候ふ。そのゆえは君は無上法皇の御名をからせ給へり其御前にて聖淨土の眞偽を決せんと傍にて潜に説にはまぐべからず。當座にて難易の二道を治定すべし秘密神兒經にいはいく。一一言語。皆是彌陀。所說思量讚護兩字。秘密藏經に云。三世諸佛。出世本懷。阿彌陀佛。名號爲說。大師の御釋にいはいく眞言行者於南无阿彌陀佛名



號更勿。作淺略思。若入真言門。諸言語皆是。真言何况。阿彌陀と云々又ははく念佛者十。甘露真言。一代聖教。結經。八方。法藏妙肝心由離生死最要法。彌陀來迎得往生といへり。かでか名號をはなれたる真言あるべからず。又真言はなれたる名號なし。真言門にて修行しかたければ難行道と判したまへり。而々のごとき智者はさも候はんずらん。夫すら時機いかん如何にいはんや鈍根無智。極惡最下の徒は。真言止觀の修行にかなふべからず尤空しかるべしと答へたまふ。各不審なほも區なりといへども。終に淨土易行に結成せり。同年の春三月七日顯真法印をもつて。天台の座主に補せらるるといへども。固く辭退し給ふにより。勅使大原にむかひて。宣命をくたして座主職を授けられ。終に召出され給ふ。所謂末代の高僧本山の賢哲なり同五月廿四日に。最勝講の證義を勤め同廿八日權僧正に任ぜらる。山を治め給ふと三ヶ年のあいたに内論義二度。寂光大師の御廟の番論義。傳教大師の御廟の淨土院の番論義など執行はれ吾山の佛法の絶たるをつぎ。廢れたるを起されしかども。傍には尙稱名の行意らずして。法華堂の初夜の行法には。高聲念佛千返を加へ修行せられき其行今に退轉なも。時に日來の塵物の病著俄かに發りて淨土院の番論義の夜。建久三年十一月十四日寅の刻に東塔圓融房にして正念違はず念佛相續して往生の望を遂給ふ。遺言の旨ありて則ち大原に送り奉りぬ。叡山の名僧なりといへども源空上人の教によりて。往生の道を思ひ定められき。心あらん

人誰か其跡を希はさらんや茲に諸宗の碩學卒して源空に皈せずといふとなし。一天四海併て念佛を以て口號みとす。源空普く智慧第一の名を得給ふ

建久三年靈山寺において三七日不斷念佛のあいだ燈明なしといへども。光明ありて。四面赫々たり。五日の夜をのく。行道に勢至菩薩うち交りて。同列りたち給ふ或人夢のごとくにこれを拜して源空に此よしをかたられしかば然ることも侍らんと返答ありしとなん。是よりして始めて人々奇異のおもひをなせり。此三七日不斷念佛の時衆は都て十二人なり。法蓮房。正觀房。藏人入道住蓮房。安樂坊。蓮光坊。西仙房。清淨房。念佛房。蓮乘房。阿彌房。其先達は源空上人なり右十二人三番を守つて勤行せらる。三七日といふ丑の時。異香室の中に満て。音樂耳に聞ふ。聽聞の人々四十八の燈を見る三七日の己の時阿彌陀佛如來出現し給ふ。爾時源空上人の口より光を放ち給ふこれを見る人々住蓮房。安樂房。西仙房。法蓮房。清淨房等なり唐の善導和尚は口より化佛を現し。此上人は口より光明を出し給ふ。末代念佛の祖師誰か敢てこれを背ん哉。首楞嚴經の勢至章に云く。我本因地にして念佛の心をもつて無生忍に入る。今此界において。念佛の人を攝して淨土に歸せしむと云々。此文思ひ合すべしと云々此時源空上人五十口

歳なり  
一時後白河の法皇。源空上人を宮中に請して。往生要集を講せしむ。藤原隆信に勅して。上人